もしう思し召すとの事ございます』

『夜叉若左様に健氣な生れか、身内に男子の出生するは此の上もなく目出度い、美濃攻め事終り少々にても暇あらば呼び寄せて對面せう、右衛門にも長う會はぬ、相變らず病身か』

『近頃は左程にもございませぬと、昨日一若殿歸らせての話ございました』

『それも目出度い』と藤吉郎はまた一獻『只氣に懸るは此度の御出陣ぢや』

『また合戰でございますか』

『戰爭がお好きで勝敗をお心に置かせられぬ、今日までは武運强く、さしも捷ち誇った今川の大軍を一擊ちになされてから、高慢の鼻高うならせられた』

『近々美濃へ御出陣とございますな』

『それに就て申し談じたい事もある、客人は』

『只今御飯を濟ませられて、淋しう御座にあらせられまする』

『我等一人の思案では協はぬ、半兵衛智慧を借りて見やう』と云つて座を立つ、表書院には半兵衛一人默然と坐つて居た。

『半兵衛淋しからう、話相手に參つた』

藤吉郎は氣輕に云ひつゝ座に着いた、半兵衛は無言。

『時に半兵衛、お身の目から織田殿は什麼と見ゆる』

『虎と見申した』

『武士の中の虎か、虎は百獸の王、一たび嘯けば豬狼も、其の前に平伏すと云ふ』

『然し虎の牙にも磐石は嚙まれ申さぬ』

と半兵衛は獨語のやうに云つた。

（六）

藤吉郎はまた問ひ蒐けた。

『お身の目から稻葉の城は什麼と見ゆる』

『鯉と見ゆる』

『鯉とは』

『古池に棲む鯉ぢや、然も其の池次第に水が涸れて行く』

『其の鯉網にかゝらうか』

『鐵の網ならば知らぬ』

『尋常の網とあらば刎れ破つて逃げると云ふか』

『中々の事、三代年經る大鯉ぢや、普通一般の網にはかゝらぬ』

『さうあらう哺』と藤吉郎は我意を得たやうに頷き『自然に水の涸るゝを待てば、如何な大魚も子供の手に捕らるゝものぢや、急には爲らぬの』

『ぢやに由つて虎と云ふ、織田殿お顔に殺氣が見えた、急々御出陣、稲葉の城を攻め落さうお覺悟と推量申した』

今度は藤吉郎が口を噤んだ。

『大磐石は動き申さぬ、强つて人の力に動かさうとすれば、却つて人數を傷つけ、望み遂げぬ間に疲勞する、然し地磐の崩るゝを俟てば、自ら望み遂ぐる時節參る、兎角は時、時を待つ外ござり申さぬ』

と半兵衛は重れて云つた。

『我等も同意ぢや』と藤吉郎は頷いて『然し一旦仰せ出された事、容易に後へお引きなさる御方では ない、殊に御傍近くには草好きの柴田佐久間、其の他の衆がある、假令前に猛火見えても、假ひ足下に大河漲つても、其れ等の事目に置かず、一散に驅けさする、御方御瑕瑾正しう此れぢや、藤吉郎申し上げるを用ひ給はず、强ひて齋藤家御征伐とあらば敗北は目前、一旦の敗は懸念するにも足られど、其れが爲味方の勢ひを殺ぐことあつてはならぬ、引いては又御方御恥辱とも相成る、不可を知つてお諫め申し上げぬは、家來たる身の落度、明日は推しても伺候、此の儀篤と申し上げる、半兵衛所在今申したに相違ないか』

『毛頭相違ござり申さぬ』と半兵衛はきつと云つた。

『諾し、さらばお身へお訊れあつた時、今の詞に違ひなく眞直に申し上げ、奉公の道は思ふ事に、實を籠めて繕ひなく申し上げるを要とする』

『半兵衛も心は同一、舌は只一枚、終始を承知罷り在る』

藤吉郎は半兵衛が其の身と同じ意見であると聞いて殊の外歡んだ。

『然しお身も今は御方御家來、此の度の出陣、もし稲葉山の案内仕るべき旨御沙汰あらば、其の時

は什麼とするな』

『道の無い處へ案内は致されぬ、まづ其の荊棘を刈つて後ちや』と半兵衛は快い程も清い聲であつた。

『總て我等心を得てある』と藤吉郎は歡びに堪へぬ如く『今宵は夜と共に酒宴、心の中語り明かさう、お身も參るか』

『何時までもお相申し上げる』

後はまた酒宴となつた、酌の役は小一郎務める、二人は獻しつ酬へつする、其の盃の獻酬に互の心を酌み交して、一夕の歡會十年の知己の如くなつた、半兵衛の心と、藤吉郎の心とは、符節を合せた如くぴたりと合つた、半兵衛は藤吉郎の爲に命も惜む間數き愚ひ、藤吉郎はまた半兵衛を手足にして此の後幾戰場に馳せ向はう覺悟をした。

二十 不意の援

（一）

眞に藤吉郎の半兵衛を得たのは、龍に翼を得た如くであつた。

藤吉郎は翌日の朝、信長公御前に伺候した、其れは信長から稻葉の城征伐の御沙汰あらば、今はまだ其の時機にある間數きを飽くまでも諫言しやう心であつた。

處が信長から絶えて其の事を云ひ出さなかつた、近々兵馬を動かすやうな口振は絶えて無かつた、四方山の話の末、

『藤吉郎何時歸るな』

とそれと無き聲であつた。

『御暇下さる上、一日も早く歸城致し度き願ひ、東美濃一帶の草木、御主家御德に靡きありまするも、申さば敵地、まだ心緩されぬ節もございます』

『爾うあらう、鵜沼の城は大河の中に漂うてある浮洲も同樣ぢや、預りの主たるお身の手を空けてはならぬ、早々歸れ』

『直にも歸城、きと留守仕るでございます、なれど只一言と……』云ひ掛けるを信長は能くも聞かず。

『其の口上早や分つた、聞くまでもない心得てある』

『留うもござりませう、なれど……』と藤吉郎は押し返して『此儀御當家御大事と思ひまするに由つて、尙深く申し上げ置きまする、稻葉の城は……』

『聞くまでない、お身の口上よく分つた、諸事は前田丹羽池田など思案もあらうで、篤と談合其の上に進退する、而て半兵衞は什麼とするな』

『藤吉郎確乎と預り、鵜沼の城へ同道、尙能く其の擧止を見るでございます、絶えて二心なき者とは推察致せど、付られぬは人心、代々齋藤家恩顧の者、如何た異心を挾みあるか分りませぬ』

『善く申した、表面から見えぬは人の心ぢや、美しい花の底にも針を祕す世の習ひ、半兵衞歸服餘り早急ぢや、假令お身の手柄、お身の辯舌、彼れの心を動かしたに爲、三代相恩の主を捨て、俄に當家へ馳せ參る事、且以て合點行かぬ、然も半兵衞は次郎左衞門等力量一方の物とは違ひ、思慮分別にも長けてある、其の者俄の降參、昨日まで主と奉じた齋藤家へ弓引かうとは其の心飲み込めぬ、お身の鋭い眼で腹の底まで鑑と見よ』

『委細畏まりございます、半兵衞心中は藤吉郎眼に由つて底の底までを見貫くでございます、願はくば御方御眼に依らせられて、稻葉の城の狀況ども、具さに御覽あらせらるゝやう……』

『何も云ふな、其の事は聊か分別も致しある、安堵して行け』と追ひ立てるやうに『引き出物せう』と其處に在つた一刀を取り上げて『此れを一身の守護と致せ』

『畏く心得まする』

恭しく受けて艶て御前を退いた、信長の今日の仕打ち、意外の引き出物、逐ひ立てるやうの御諚、如何にしても合點行かぬ、藤吉郎は後に心を殘しながら、一刻も猶豫なり難れ、我が家へ歸ると共に、小一郎に供廻の用意を命じた、おれゝは何時に變らず笑顏を以て慰める。

『早や御立ちでございまするか、お庭の櫻、明日の朝露を待つやう見えまするに、殘り惜しい事でございます』

『櫻よりはお家が大事ぢや、吩咐け置く事がある、我等今日鵜沼の城へ立ち歸らば、後は柴田佐久間其の他軍好きの面々、前後の思慮なく御方の側に從き添うて、什麼かと血腥い談合致すであらう、もし出陣とある場合、早々鵜沼へ注進の者差し立て呉るゝぢや、好いか、命にかけて忘るゝな』

おれゝは委細を心得た。

『油斷なく仕るでござります』

『今は三月、半年早い、如何に考へても半年早い、三人衆の心一旦は動ぎあるも、風靜まらばまた原の儘となる、吩咐を忘れまい』

其の外留守中の事を吩咐け居れる間に、供廻の者も揃ふ、藤吉郎と半兵衛の乘るべき乘馬はそよ吹く春風に嘶いた、一若は來て藤吉郎の出世を祝ふ、御前の首尾日毎に良くなり行くを歡び壽く、藤吉郎は何時に變らぬ挨拶して、其の儘清洲を出發した、さうして鵜沼の城へ着いたのは、其の日申の刻過ぎであつた。

鵜沼の城には、蜂須賀小六棟梁となつて、藤吉郎の不在を守つて居た、稻田大炊助は岩手の城を預つて居るので、其方へも城の兵を分けたが、まだ千人ばかり籠つて居た、其の士卒が心を一つにして藤吉郎の爲に忠義を擢んずる、忠心義心が土臺となつて、俄普請の小城も少しの動ぎだに無かつた、梶田隼人、青山新七、蜂須賀彦十郎皆門前に出迎へた、藤吉郎は半兵衛にそれ〳〵の大將分を紹介せて、其の夜は目出度く酒宴を開いた。

藤吉郎は明日か明後日か其の次の日には、おれゝから信長公御出陣の報知が來るであらうと冷々して待つて居たが、三日過ぎても五日過ぎても清洲は無事であつたらしい、美しい暮春の霞が彼の城を取り卷いて、長閑に今日も明日も過した、さては藤吉郎の申上げた事を酌みとらせて、此の度の出陣御延引あらせられたものと見ゆる、一微短慮の御方ながら、熱田明神御守らせ、柴田佳久間其の他の軍好きが樣々に申し上げるを、能くもお聽き入れないと見えた、此れならばお家大丈夫、斯くて半年を過させられなば、其の間に三人衆は心から歸服、稻葉の城に立て籠る者の中にも變心者出まいに限らぬ、其の時は道三以來武威に誇る齋藤家も、枯木を倒す如く倒れやうと、沁々心に嬉しく思つた。

大澤次郎左衞門も其の後宇留間の城に沈として居た、信長には多少恨みを抱かぬでも無かつたが、藤吉郎の眞心ある仕方には歸服して、深い好意を運んで居た、もし藤吉郎の眞心が彼の胸に沁みなかつたら、彼は再び齋藤家に屬いて信長を敵としたかも知れぬ、目と鼻との間にある宇留間の城を敵としては、如何な藤吉郎も不便を感ずるであらうが、絶えず天佑を得て居る彼は、少しの不祥事もなくて終つた、藤吉郎は此の間も腹心の者を稻葉山の內外に放つて、齋藤家の樣子を搜らせた。

其の內に花の三月も夢と過ぎて、若葉涼しき四月の始めとなつた、木曾川の涙の上には、何處から

來るともなき櫻の花瓣が流れる、繪の如な筏船にも花の香が乘つて居る、犬山の城の森には杜鵑が訪れる、各務野の空高く雲雀の音が響き渡る、人は國を爭ひ、地位を爭ひ、勢力を爭つて、明日にも血の雨を降らさうとして居るが、天地は繪よりも美しく、若葉は其の繪の上に彩色する如く繁つた、藤吉郎は軍慮に遑がない、其の自然の景色に對して心を慰める暇が無かつた。

四月四日折柄來合せた次郎左衛門と半兵衛と三鼎になつて、半年先の軍の手配りなどをして居ると、其處へ遽しく取次役が入つて來た、清洲から來た急飛脚がおれゝからの文を持參したのであつた、藤吉郎は受けて一行二行讀み行く間に顏の色が颯と變つた。

（三）

おれゝの手紙には昨夜俄に出陣のお觸れが出て、御方親しく稻葉の城御征伐あらせられべき旨、今日正巳の刻清洲を御出發と承る、まことに晴天に雷を聞く如く心得、只今一若殿より聞き及び、取り敢ず御知らせ申し上げるとの事が認めてあつた。

『一大事、一大事』

藤吉郎は思はず叫んだ、半兵衛は沈着いて、

『愈御出陣か』

『此の文言にそれと知れた、今日まで延引、密々手配りあらせられたは藤吉郎への御遠慮と思はれる、今は是非ない、追々御着到、御出迎の用意致さずではなるまい、拔いた刀は血を見れば收まらぬ、早や御立ちとある上は什麼を申すやうもない』

藤吉郎は諦めたやうに云つた、次郎左衛門は仁王の動ぐ如く身を進め、

『信長公御出陣か』

『其の樣子ぢや、今清洲から注進參つた』

『諾し、我等心中明白を見せる時が來た、次郎左衛門へ先陣仰付けられ、此の手に咖か覺えもござる、他年飼ひ馴した手の者引き從れ、先頭第一の手柄、此の方へ收め見せる』

『いやそれはならぬ、此の度御出陣の事、藤吉郎には內々、今日まで表立ち御通知もなさせられぬ、此れへ御着其の上お供仕るべき旨御沙汰あらば兎も角、其れでなくば當城に留守居、是にて凱陣を待ち奉る外あるまい、お身も我等の配下、半兵衛同樣勝敗を他に見るぢや』

宥めるやうに云ひ聞けた、次郎左衛門は兩腕を擦つて居る。

此時河一つを隔てた犬山の城に人馬の音が遠く響く、斥候の者は馳せ歸りて、

『只今犬山お城へ總大將旗印見えてございます、總人數二千餘騎、まだ後より引き續き到着の御模樣ございます』

云ひ置いて取つて返した。

『さては只今』と藤吉郎は驚いて『早やお着きか、さらば御挨拶に參られねばなるまい、彌助小一郎同道、留守居は半兵衛、次郎左衛門は本城を守護、小六も萬事に心配りをせ』

信長の今日の出陣は、まことに寝耳に水であつた、藤吉郎に知らせれば、必ず深く意見するであらうと遠慮して、突然清洲を出發、先づ犬山の城へ入つたのであつた、柴田勝家、佐久間左衛門其他の重役皆扈從した、總軍八千餘騎と聞えた。

藤吉郎は彌助と小一郎とを從れて、早速犬山の城へ伺候、執次役を以てお出迎への爲參上の旨を云ひ入れた、信長は直ぐ居間へ通した、お側には池田勝三郎丹羽五郎左衛門村井所之助森三左衛門の四人が詰めて居た、柴田佐久間は戰の手配りに油斷なく、明日の用意に忙しかつた、藤吉郎は次の間へ

伺候する、信長は見て、

『俄に思ひ立つた、十年來の望も協ひ、美濃一國を手に入れる目出度い門出、不祥な事云ふな、家老共皆同意、八千餘の手の者心を一にして奉公の忠を盡すとある、明日は各務野に勢を立て息も續がず井の口の城へ押し寄せる、お身は不同意であらう哺』

藤吉郎は手を支いた儘であつた。

『只今となつては何事も申し上げませぬ、御武運長久、さしもの敵を一戰に打ち破らせ、彼の城お手に入るやう祈る外ございませぬ』

井の口の庄は今の岐阜の事であつた。

（四）

信長は安堵の體、

『能く申した、信長生れて幾十箇所の戰ひに一度も不覺を取らぬ、此の度の城攻め、靈の物を探るよりもまだ容易い、半兵衛案内を致し呉れうか』

『長れながら半兵衛にも心ございます、右京大夫殿は半兵衛の舊主人ございます、假令彼方へ背は向くるとも、双を向ける心あるまじと推量してございます』

『諾し、さらば半兵衛の手は賴まぬ、捷利のある處道は自然に開かれ行く、お身は鵜沼の城の留守居するか』

『御意にございます、前へ急がせられる道より、足溜りの城肝要でございます、御預りの城を守護、凱陣の日を待ち奉るが此の場にての忠節と心得まする、藤吉郎は御供を外れ、此の度の合戰に加はりませぬ、なれどいざ御大事とあつた時、第一に御馬の轡に縋り、一方の血路を開く者は、藤吉郎と思召しませ、決して二心あるではございませぬ、藤吉郎所存、今日の御出陣、只々御大事の御場所と心得まする』

『其の義も分つた、お身は鵜沼の留守居を爲、當城には丹羽五郎左衛門を止め置く』

藤吉郎は強ひて何事も云はなかつた、側に居る四人の重役は、何時になく信長が藤吉郎を討手の中に加へぬのを不審したが、是も別に云ふ處はないのであつた。

藤吉郎は其の夜犬山に一泊して何かと信長を慰めた、明くれば四月六日、八千餘騎が木曾の大河を

渡つて鵜沼の城の前を横ぎり、各務野に人數を立てた、其の事忽ち稻葉の城へ聞えたので槇村丑之助、長井隼人日根野兄弟早速用意して新加納の村境に敵を迎へた、其の手配りが極めて順序よく定められた。

まづ第一に日根野兄弟に各一千餘を從けて半途に兵を伏せさせ、相圖の烽火を待つやうに云ひ聞けた、また一方には齋藤八郎左衛門長井飛驒守に二千餘騎を從けて、之を假りの伏兵にし槇村と長井隼人とは三千餘騎を本丸に備へて、織田勢を迎ふることに定めた、織田勢の先陣は池田勝三郎福富平左衛門の手であつた。

此の先陣は豫期した通り、新加納の村盡處で衝突した、何れも恥を知る武夫であるから、雙方が火花を散らして戰つた、其處へ織田勢から森三左衛門佐々内藏助の一手、潮の寄するが如くに攻め寄せた、それと見るより長井飛驒守と齋藤八郎左衛門との伏勢は、忽ち立つて横合から攻め立てた、此の勝負半と見えた時、柴田權六と前田又左衛門とは二千餘を左右に從へ、どつと喚いて驅け入つた、此の勢に辟易して齋藤勢は右往左往に散亂する、前陣の池田福富は勝に乘つて、眞先に采配打ち振り進めゝと下知を傳へる、信長の本陣二千餘騎何處までもと追ひ蒐ける、上加納から瑞龍寺山の麓近く

なつた時、合圍の烽火が日野山の後に揚る、日根野兄弟時分は好しと、二千餘騎が一團になつて、雲霞の如く突つ蒐けた、齋藤家は伏勢を使ふのに巧な事をかれて能く知つて居るので、其れ等に十分手配りをして居たが、一箇所ならず二箇所までも、精英を集めた伏勢が居らうとは思ひ寛けぬ、新手の槍先に攻め立てられて、流石の勝家も色めき立つた處へ、先きに逃げ足となつた齋藤勢は再び此方へ引返した、池田前田は素破一大事と驚いて信長の旗本へ驅け附けやうとしたが、此の時誰とも知れず一手の軍兵驀地に驅け出して、其の間をひたと遮つた、此れは三人衆の一人稲葉伊豫守定通が、織用家に心を傾けながらも、尚舊恩を忘れ難れて、齋藤家へ最後の忠義を盡す爲の援けであつた。

(五)

日根野兄弟は此の不意の援助に勇み立つて、何處までもと攻め立てる、信長を打ち取つて齋藤家百千年の礎を鞏固にするは此の時と思ふので、平生の攻め口とは思はれぬ位手痛き軍配、假令千騎が一騎になるまでも、信長の首を見ぬ上は、一歩も退くなと無二無三に攻め立てる、織田勢の中には音に聞えた勇士もあつたが、何れも遠くへ引き離れて、其の間の連絡を絶たれて居るので、今は何うする

事も出來ぬ、さしも朝日の昇るが如き勢ひであつた信長の運命も、今は此れまでと見えた處へ、馬煙を立てゝ東の方より馳せて來た一群の人馬があつた、織田勢遙かにこれを見て、さては齋藤家に加勢の者東美濃より馳せ加はるものと見えた、眼前の敵すら手に餘るに、更に斯樣の大敵を引き受けては殆ど鼯の鼠である、主從一統枕を列べて討死する外はないと、決心の臍を極めて居た、處が彼の一隊の軍勢は一團の黑雲二個に別れて、空穹を翺ける鳶が如く颯と分れ、一方は信長の旗本を目掛け、一方は勝ち誇つた日根野兄弟の陣中へ切つて蒐る、新手と云ひ軍に馴れた武夫らしく、揉みに揉んで攻め立てる、信長の敵ではなく味方であつた、信長の旗本が大勢に包まれて、猛火の中の一むら杉と見えたのを援ふべき天使であつて、何れも槍薙刀白刃を閃して、齋藤家の後より激しく迫る、此の不意の新手に驚いて勝誇つた齋藤勢も思はず狼狽へ、早速陣を立て直さんとする間も無く信長は采配追取り

『援助の兵ちや、敵の多勢を挾み討て』

と大音聲に喚び立てた、此れに勢ひを得て旗本勢が俄に勇む、死地から歸つて縱横に斬り捲つた、齋藤勢は前後左右に敵を受けて、如何ともする事出來ず、思はず颯と引き退く、其の間に新手の大將と見えた馬上の武士は、弦を放れた矢の如く信長の側へ驅け寄つた。

『早御立退きあらせませ、藤吉郎御迎へに參つてございます』

と口早やに云ひ掛けた。

『おゝ』と信長は面目なげに『藤吉郎か』

『敵の手配り油斷なく見えまする、鵜沼の城には峰須賀小六、竹中半兵衛御入らせを待ち受け、此れより笠松各務野邊り一帶に、御案内の武士を出し置きたれば、只御一騎にても自由に御開かせなります、後は藤吉郎引き受け、勢を集めて日暮までに陣致すでございます』

云ふさへも口早であつた、信長は何を云ふ暇もない、一鞭當てゝ驅け出す、今迄お側に從いて居た前田又左衛門を始め、五十騎の武夫は大將に後れまじと引き退く、遠く近くに聞ゆる矢叫びの音、天地も覆る如く響く、藤吉郎は此の光景を馬上より見て、悠々と采配打ち振る、彼處にも手負、此方にも死傷、初夏の日は麗らかに此の血腥き大修羅場を照しつゝ、次第々々に西へ傾く、必勝を期して居た齋藤勢の軍配も、藤吉郎が不意の助けに驅け亂されて、散々の敗北、再び原の陣形に立ち戻る隙さへなかつた、一陣の池田福富、二陣の森佐々、三陣の柴田佐久間、辛くも切り拔けて、命から〳〵藤吉郎の堅めて居た原の信長の本陣へ辿り着いた、一面の屍、野にも丘にも慘澹たる殺氣滿ちた、勝家は今更藤吉郎に合す顏もなかつた、軍に急いて何時もながら敗北する、勇氣餘つて思慮足らぬ身を氣注くと共に、藤吉郎が怖しくなつた、同時に藤吉郎が心憎くて堪らなかつた。

（六）

されど此場にては、いかな勝家も、九死の中より總大將を援けた藤吉郎の智略を褒め稱へる外無かつた、勝家の尾に附いて森福富前田佐々皆藤吉郎に謳歌した、其の間に打ち漏らされた多くの軍勢が此處に集る、齋藤勢も今は是れまでと思つたのか、兵を纒めて肅々と退いた、藤吉郎は當然信長に代つて總軍を指揮すべき地位に立つた、勝家は如何にも口惜しくて堪らぬ狀で、今一度引き返し最後の勝負に、一か十かの運命を試したく思ふ狀もあつたが、それは藤吉郎が許さなかつた、總大將既に鵜沼の城に御入らせある上は、一統御後を慕ひ奉つて善後策を講ずる外、盡すべき道あるまじき旨を說き聞かせ、夕陽の光薄く照る間、總軍を三手に分つた、第一は柴田權六、第二は森三左衛門、第三は自ら大將として堂々と陣を引いた、彼等が鵜沼の城へ着いたのは早や酉の刻を過ぎて居た、日は落ちて夕月の影がさやかに木曾川の流れを照した、信長は奥の御座所に夢の如く坐つて藤吉郎の歸るを待

つた、お側には銚子土器など置かれたが、それを手にする勇氣もなかつた、前田又左衛門二の間に伺候、竹中半兵衛蜂須賀小六其の他藤吉郎縁故の三の者間に詰め合つて樣々に心を慰めやうとするが、信長の胸に受けた深い傷は容易に癒ゆる態もなかつた。

其處へ藤吉郎は多くの將卒を引き率れて歸つて來た、信長の眉は纔に開いた。

藤吉郎は柴田佐久間森福富其の他の諸將と共に、信長の御前へ出た、敗軍の後であるから、誰れ一人恭悅を申上げる者もない、主君の御機嫌を忖り難れて無言の儘坐つて居る、信長は股肱の家來が勢ひなく歸つて、無言の儘座に着いた光景が如何にも悄れて見えるので、今日の無念が俄に胸先へ突掛けた、藤吉郎は只一人平生に變るさまも無く一膝進めて、

『御無事御顏を拜み奉り、斯程芽出度い事ございませぬ』

と取り敢ず慶びを陳べた、信長の眉はぴりゝと動く。

『敗北が芽出度いか、弓矢取つて三十餘年、今日ほど不覺を取つた事無い、無念な』

『御勝利ばかりを軍とは申しませぬ、勝敗は時の運、月も滿ちる時ばかりでございませぬ、花も盛りなのみは見られませぬ、人の一生には種々の苦勞伴ふが常とございます、今日の敗北は明日の御勝利、

今日の蕾は明日咲く花の色香とも思ひ替へあらせませ』

『侮り難い敵の軍配ぢや、長井日根野斯程の器量はあるまいと思うてあつたに、眞個案外ぢや』

信長は今更の如く目を圓うして云つた。

『齋藤家代々の手並、伏勢を使ふに巧な事、かれて存じございましたが、今日程目ざましい働き、此迄には覺えぬ事ございます』

池田勝三郎は信長の語に從いて云つた。

『神業ぢや』と信長はまた云つて『藤吉郎の諫言を今になつて思ひ起した、尙且時機ぢや哺』

『今日の御合戰强ち無用とも申されませぬ、柿の實に礫を中つれば、其處より早く腐り廻つて遂には時を俟たず朽ち墜つるが常、思ふ儘の御勝利はあらせられずとも、今日の御合戰柿の實に中てた石の礫でございます、此の手傷より腐り廻つて、齋藤家の運命早く傾く時あらうと推量、一二日は御逗留、心靜に清洲へ御歸らせあらせませ、遲くも八月初旬には必勝の謀計を廻らし御勢を迎へ奉るでございます』

されど信長は此場に臨んで藤吉郎の詞を用ひるのが殘念でならなかつた。

二十一　半兵衛の獻策

（一）

藤吉郎の意見に背いて、只一擧に稻葉山を屠らうとした望みは絶え、散々の敗軍を見たのであるから、意地にも藤吉郎の手を假らず、弔ひ合戰が爲て見たいと思ふのは信長ばかりで無く、勝家の心にもまた其れと同じ望みがあつた、信長は扈從の酌する土器を取り上げて、息も吐かず飲み干し、血走る目に三の間を視遣つて、

『半兵衛々々々』

半兵衛は三の間の末座に控へて居た。

『はッ』と其處に平伏するを、

『近う』と呼び寄せ『お身は當國に並ぶ者無き智慧者と聞いた、父祖三代齋藤家に事へて、稻葉の城の案内も能く知りあらう、右京大夫の旗本其の他を能く心得あらう、今日の軍には不覺の敗を取つ

た、一呼吸休めて再び押し寄せ、右京大夫殿御首級を申し受ける心である、捷利の謀計ないか、信長への奉公始め、お身の手に必捷の手術ないか』

半兵衛は手を支いた儘であつた。

『謀計あらば云へ、藤吉郎の云ふ半年後を待たず、立所に彼の城を手に入るゝ工夫あらば云へ』

『右京大夫樣御妹に馬場殿と申す絶世の美女ございます』

半兵衛は意外の事を云ひ出した、信長から稻葉山を打ち取るべき必勝の手術を聞かれたに對し、馬場殿の美しい女である事を云ひ出した、一座の目は悉く閃めく、信長は手にした土器を投げるやうに折敷の上に置いて、

『什麼と云ふ』

『花ならば彌生の色、朝の露に浥み見えた姿でございます、御年齒は十六歲、月の姿整ひ見えまする、御所望ございませ』

『いや』と信長は頭を掉つて『城攻めの計略を訊ねる、女の事聞くで無い』

稍不興の狀も見えた。

『軍の庭に櫻の散るは憐れ深きものでございます、御勢を差し向け給ふ前、まづ馬場殿を御所望あらせませ、半兵衛の手術此の外にございませぬ』

『阿』と信長は考へて『馬場殿を所望せと云ふか』

『御意にございます、馬場殿の御姿は美濃一國にも換へ難き御標緻、當國井口の里に唯一本の名物として稱へらるゝ墨染の櫻も、馬場殿御裝ひには及びませぬ』

信長は無言であつた、勝家は物に怀へぬ氣性、堪り難れて兩眼を活と睜いた。

『これさ、半兵衛さ、お身は御前をも憚らず、御時節をも考へず、唯今お訊れに對し什麼と云ふざまな事申し上げる、城の遣り取りは、鐵砲、太刀、劍此の他に何もない、高が一人の女美しうあらうと醜うあらうと存じの外のこと、左樣の者所望して何とならう、御方思召しは美濃二十一郡を御手の中に收めさせうお心ぢや、其の中に咲く櫻梅、やがては皆御袂に入るべき物、唯一箇取り立てゝ云ふに及ばぬ、其れを事々しう必勝の手術などゝ以ての外の曲事、お身は御方を弄び物に致すぢや哺』

『言語道斷、左樣な事毛頭ござらぬ』

『無いとは云はせぬ、今の口上此の耳に犇々應へる、今一言云うて見、御前とて手は見せぬ、これさ』

と籠くれ立つた腕を叩き『此れに覺えある、柴田權六肱は鐵ぢや』

（二）

『什麼ともございませ、御家老衆御心には入らずとも、拙者存じの旨お訊れに由つて言上、齋藤家御征伐に御勝利得させやう思召し在さば、彼の山の盛りと咲く花の馬場殿御所望あらせられる外ございませぬ、此の事御意に入らず御手討とあらせられうも、毛頭恨みには思ひませぬ、唯御存分になされませ』

半兵衛は又云つた、年齒はまだ二十八歲、艶よき顏に覺悟の狀が現れた、信長は笑を含みて、

『權六舌長に物な云ひそ、半兵衛口上其れと思ひ當る節もある、右京大夫妹に美しい御寮、井口の里に只一株香ろ墨染の櫻のそれよりも美しい姿とは疾くより聞いた、所望せう、合戰の事思ひ止まり清洲へ歸つて改めて所望せう、藤吉郎思案は喃』

『御尤と申す外ございませぬ、半兵衛手術百萬斤の大砲を打つより、まだ手痛き攻め道具と推量してございます』

勝家を初め並み居る人々、此の面白からぬ問答に飽き果てゝ、中には憫れたやうに顔を見合せる者もあつた、けれど信長は何處までも乘り氣になつて、

『藤吉郎も同意か、さらば此の事齋藤家へ申し入れの手蔓附くるな』

『委細心得、御意の儘取り計らふでござります』、

勝家はずつと出た。

『先刻より承る處軍の御評定でもある事か、舌だるい女の穿鑿、權六一向に其の意を得ぬ、お家には新參、御家風を知らぬ牛兵衛は兎も角、十月近く御奉公、お家の風を心得ある藤吉郎まで、同じやうに御方のお心を迎へ、馬場殿所望の旨齋藤家へ申すなど武士にあるまじき詞、今一言申して見、御方光を裏む黑い雲、此手の中に拂ひ奚るゝ』

と以ての外の氣色であつた。

『權六控へ』と信長は一言に抑へ附け『月花の噂、風流の沙汰、むくつけなお身達の存じある事でない、雨風雪霰と此ればかりで世は立たぬ、時には月花、時には星霞、春と夏と秋と冬と裡表行く道は幾個もある、今日敗軍の恥辱を雪ぐは、牛兵衛の謀計を採り用ひる外にない、流石は美濃一の智慧者

と呼ばれた程あつて、人の心附かぬ人を謀る、斯樣に目出度い事は無い、皆が打ち寛いで一獻せ、春は過ぎても若葉の色中々芽出度い、夕月の光さやかに木曾川の涙を射て、銀の珠千々に碎くるこの景色見て、戰場の塵を拂ふも一興ぢや』

信長は急に碎けた人となつた、權六平左衛門は怪しからぬやうに腕を擦るが、莞爾と笑ひ頤で見て居た。

藤吉郎は小六を通じて膳番に酒の用意を命じた、山海の珍味と香りよき酒とは、此の座の中に駢べられた、曩に信長の疑を受けて既に命を取られやうとした大澤次郎左衛門も召に由って伺候する、三の間から廊下へ流れて藤吉郎の家來も集る、戰評定の場は忽ち無禮講の酒宴に變つた。

『時に藤吉郎』と信長は思ひ出したやうに呼んで『今日の合戰一つ心得難い事がある、お身は西美濃の三人衆我等へ歸服致したと申した喃』

『心を通はせござります、齋藤家へ奉ずる心を此方へ注いだでござります』

『其の三人衆の内、安藤伊賀守に味方を散々驅け惱まされた、萬一お身の云ふ事眞實ならば、武士に似ぬ二心を抱く者ちや、當家へ味方とは表を飾る僞り、眞箇は齋藤殿へ忠義の爲、お身を欺き我等を

欺き、深い淵へ誘引き入れやう計略であつたか知れぬ』

『由つて半年を御待たせござりませと度々御意見申し上げたでござりませぬか、三人衆の心確かに動きござります、なれど物の動く間はまだ定りない證據ござります、風の梢を搖かす間は木の根に締りござりませぬ』

（三）

『半年を待たせられませ』と藤吉郎は再び詞を續けて『幾千騎の武士を差し向け給ふより、先刻半兵衛申し上げた馬場殿御懇望の使者を送らせられるが何程敵の痛手になるか分りませぬ、斯くして月を經さする間に、三人衆の心、藤吉郎の手へ取り入れるでござります、尠くも御當家へ弓引かぬやう爲し參らすでござります』

信長は初めて納得の入つたやうに頷いて、

『其の爲に半年待つか』

『中々の事、諸事を藤吉郎に御任せござりませ』

『我等心注かであつた、時機來れば花は咲く、時節を待つ、良きに計らへ』

土器に羽根が生えて飛ぶ如く酒宴の場は賑つた、鈍みた聲を張り揚げて催馬樂を唄ふものもある、小謠に興ずるものもある、信長は安堵して寢所へ入る、颯々たる松風、潺湲たる水の音、此等皆信長の將來を壽く音樂の聲であつた。

信長の今度の敗北は、人數の上に左程の死傷のあつた理では無いが、總體の上からは隨分大きい損失であつた、其れは敵に内兜を見られたのと、これが木下派と柴田派との衝突を來す原因となつたからであつた、勝家は最初から藤吉郎が卑賤の境より成り上つて、信長の寵愛を受けるが、不平で堪へられなかつた、蛆蟲同樣に考へて居た藤吉郎が、今は自分と肩を駢べるやうになつて、兎もすると自分の收むべき手柄を、彼の爲に收められる場合が多かつた、それが殘念で堪らなかつた、勝家が信長を說き進めて俄に稻葉山へ押し寄せたのも、藤吉郎が此の事に不同意で、幾度も信長に諫言を入れた、其の鼻を折りたい心があるからであつた、此處で藤吉郎の意見に悖つて稻葉山へ兵を出し、幸ひ捷利を得ば、藤吉郎の上に集つた信長の信用は忽ち地を拂ふであらう、藤吉郎の信用地に墜つれば、轟て勝家一派の勢力を扶植する基となる、勝家が今度の軍に魁したのは、稻葉山を攻むるが目的では無

くて、藤吉郎の勢力を殺ぐのが第一の希望であつた。

然も勝家の謀計はがらりと外れて、藤吉郎の云ふ事が正面に的中した、今川義元の大軍を鏖にした織田勢も、齋藤家の一萬騎を平げる事が出來なかつた、もし藤吉郎の援助無くば、信長も命全う歸る事が出來なかつたかも知れぬ、信長のみならず勝家を初め、部下の諸將は悉く枕を駢べて、新加納の露と消えたかも知れぬ、信長を死地より援つて鵜沼の城へ歸らせたのは眞個に藤吉郎の手柄である、されば三代相恩の君の勸めて、死地に導いたのは勝家、其の九死一生の難所から危く助け出したのは新參成り上りの藤吉郎、其の間に天地の懸隔があつた、勝家は勇氣の人で藤吉郎は思慮の人であつた、藤吉郎の幕下に附けられた竹中半兵衛が、今度敗北の恥辱を雪ぐ第一の手術として言上した、馬場殿所望の謀計は、眞個に人の意表に出て、さうして其の結果が幾萬の大軍を差し向けるより効驗あらうと決定した時、藤吉郎の器量は愈擧つた、同時に勝家の面目は散々に踏み潰された。

信長は翌日清洲へ凱陣する筈であつたが、なほ藤吉郎へ後日のことを云ひ含め置く必要があつたので、二三日を鵜沼の城に逗留した、柴田池田其の他の諸將は犬山の城に滯在して、信長の歸城を待つて居た、信長が鵜沼の城を立つて清洲の城へかへつたのは、四月十五日の朝であつた。

其の後藤吉郎からは蜂須賀小六を幾度も大垣の城へ使させた、最も祕密の用向であるらしく其の事に與るのは小六と半兵衛とばかりで、小六の大垣行は何時も微行であつた、小六の大垣の城へ往來する間、藤吉郎は青山梶田及び彌助小一郎に命じて、附近の百姓に及ぶだけの德を施させた、貧しい者には金錢米穀を與へ、少しにても物の役に立ちさうな若者は、城へ引き取つて人足小人に召し使ひ、其の中にて拔群の器量あるものは、行々武士に引き上げやうとの約束も取り結んだ、齋藤家の百姓で居るよりは藤吉郎に味方した方が、慥合ひも良く、また立身出世の望みも達せられるので、我も我もと鵜沼の城へ驅け附けた。

二十二　馬場殿

（一）

其の月も過ぎ五月も過ぎ、六月の半となつた頃には、藤吉郎の勢力が次第々々に擡つた、藤吉郎の德を慕ふ者が、梅雨晴れの水の木曾川に增す如く增して來た、例へば山の巖にぽつと出た朝霞が、次々

第に廣く、終には大きな高い山を包んで了ふやうに、其の德が普及された、西美濃は安八、多藝、本巢の三郡に分れ、東美濃は各務、方縣、加茂の諸郡へ渡つて、藤吉郎の勢力が擴張された、稻葉の城は其間に挾まれて尙屹然と立つて居た。

山々は殺氣が充ちても、城の奧には春風が吹いて居た、右京大夫龍興はまだ三十に手の達かぬ血氣の大將であつた、代々武門の家に生れて、稚きより弓矢鐵砲の間に人と爲つたが、父祖の武勇が、高く稻葉山を守護るので、此れ迄他家の爲に旗本を汚された事も無い、家は長へに榮え、家名は稻葉山の何時までも繁る如く繁昌するものと思つて居た、南に木曾川を隔てゝ織田信長と云ふ敵は控へて居たけれど、越前の朝倉は自分の妻の實家である、朝倉家と好みを結んで居る江州の佐々木とは攻守同盟が結ばれて居る、織田の大軍執拗く攻め來ることあらば朝倉一家は云ふに及ばず、佐々木一家も見ては居るまい、家には三代相恩の家來も居る、長井日根野槇村齋藤其の他の勇士も居る、まさか違へば越前へ援けを求むるばかりであると、心の中に高を括つて今日も酒宴、明日も酒宴、山の麓に春咲く櫻が城の內には絕えず咲いて居る樣に思つて、亂舞遊興にのみ耽つて居た、假令眼の下に合戰はあつても、假令遠くに鐵砲の響はしても、絕えて勝敗を氣遣ふでもなく、自分の地位、家臣の運命、

城の行末を考へる事もせず、明けても暮れても玉の盃にのみ親んで居た、玉の盃には必然の條件として花の如き美人が添ふ、追從輕薄のお側役も添ふ、忠義の武夫が血を吐くやうに諫言しても、其れは皆中途で遮られて龍興の耳には達かなんだ、縱し達いても馬の耳に春風の吹くやうに心を動かす狀も無かつた、城の柱に蟲が入つても、彼は其の前に美人の膝を枕にして眠る人であつた、棟梁が傾いても其の本に扇取つて拍子面白く小謠を謳ふ人であつた。

『申し上げまする』

執次の役人は三の間の廊下に手を支いた、奧の座敷は今日もまた酒宴であつた、清く流るゝ長良川を隔てゝ、北に百々ケ峰の翠を控へ、東の方に伊吹山の遠巒を望み、高殿の欄干に肱を凭けて、とろんとした目を見張つて居た龍興は、此の調を振り向いても見なかつた。

（二）

二の間に控へて居たは槇村丑之助であつた、屹と見て、

『何事ぢや』

『氏家卜全法印御出仕ございます』

執次の武士は明白に申し上げた。

『卜全法印參られか』

『急々御意得たい事あるに由つて參上の旨申させございます』

『暫時待て、只今御意を伺ひ見る』と丑之助は一膝進めて『申上げまする』

それでも龍興は無言であつた、お側に居た御意に入りの嬖妾初瀬と云ふが袖を引きて、龍興にそれと知らせる、龍興は初めて氣注きて、

『何ぢや』

『氏家卜全法印御目通りを願ひ出た氣ございます、如何樣計ひまするか哺』

丑之助は恐る〳〵云つた、卜全の名を聞くと共に龍興の眼は電火の如く閃く。

『彼の坊世見るも嫌ぢや、逐ひ返せ』

丑之助は今の詞を執次役へ傳へる、執次役は心得て引き下つたが、幾程もなくまた取つて返した。

『申し上げまする』

丑之助は苦々しげに、

『何事ぢや』

『卜全法印押してお目通りを願ひ、お家一大事に就き直々お目通り致し度き旨、頻つて懇望仕りまする、押し返し御諚の旨を傳へてもございまするが、少しも動く狀ございませぬ、什麼と計らひまするかな』

『言語道斷』と丑之助は考へ『なれどお家一大事と云ふ上、お會ひなさらずば叶ふまい、待て』

と云つて再び龍興の方を向いた、龍興の面色は物凄き程青かつた。

『坊主奴まだ云ひ居る、家中一大事など坊主の口から聞かうとは思はぬ、なれど折柄の好い下物、弄り物に致し呉るゝ、此れへと申せ』

丑之助は稍逡巡つたが、御諚に悖る事は出來ぬ、執次の役人に其の事を傳へると、執次はまた退いた。

卜全法印出仕と聞いて、初瀬を初めお側に興を添へて居た腰元共は、一齊に座を立たうとした、龍興は見るより、

『何れへ參る』

『御遠慮申し上げまする』と初瀬は媚かしい程情のある聲にて云ひ『暫くお暇を戴きまする』

『構はぬ、彼の坊主を下物にして快く一献酌む、酌が無うてはならぬ、皆が此れにて見物せ』

云ふ間も無く卜全法印は案内に從れて伺候した、丑之助を初め二の間三の間へ掛けて詰めて居たお側衆は、恭しく迎へる、御前の首尾は善くないが、其れでもお家第一の重臣と云ふので皆が尊敬を拂ふのであつた、卜全は例の如く二の間の上席へ着いた、彼は諸家中の上席であつた、手を支いて、一應の挨拶を申し上げる、龍興は無言。

『畏れながらお家一大事を言上仕り度きに由つて態々伺致しございます』

龍興はまだ無言であつた。

『只今も申上げまする、お家一大事に就き、お人拂ひを願ひまする』

『皆が居ては悪しいと云ふか』

『眞個に御意、一同遠慮致され』

ぎろりとした目に一統を見廻した、丑之助を初め腰元の末まで、悉く座を立たうとした、龍興は押し止め、

『其れに及ばぬ、此れに在るは乃公の手足ぢや、問へない、何事あらうとそれにて申せ』

（三）

卜全は重れて言上した。

『仰せではございますれど、密々の義、且は……』

『何事にても腹心に秘密はない、彼等同席宜しからずと申さば、乃公も聞かぬ、お身の口上一箇も聞かぬ、何事も云ふ喃』

龍興は斯う云ひ切つて顔を外向けた、卜全は蔑むやうな目に一瞥り龍興を睨めて居たが、手に持つ扇を閾の上に置き、姿容を改めて、

『是非もなき義、さらば此れにてお側衆一統に申し置く、今日の事お家一大事、他言の義相成らぬ、確と心得』

腰元にては初瀬、お側衆にては丑之助、一統を代表して承知の旨を返答する、卜全は點頭き、

『別義にてもござりませぬ、先日以來鵜沼の城主木下藤吉郎使者とあつて、蜂須賀小六、稻田大炊助二人、卜全居城を訪れ參つてござりまするぢや』

『爾うあらう』と龍興は甲走つた聲で『お身の二心は能く存じある、藤吉郎は信長の草履取りでは無いか、左樣な者と往來、相恩の主家に弓引かう所存ぢや喃』

『八幡照覽、卜全二心持ちませぬ、二心持つなりや御前不首尾を存じながら、これへ參上仕りませぬ』

『而て蜂須賀が何んと云うた、其の大炊助口上は何うあつた』

『藤吉郎使者とはござりますが、眞實は信長よりの口上、お心を靜めさせて具に御聞きござりませ』

『愈〻奇怪、信長口上を齎せてお身の居城に使したと喃』

『口上の主意此れにて冒上』と卜全はまた詞を改めて『齋藤織田は舊くより境を交へて、脣齒輔車の好誼を結びあつた、然るに先年より不執、年頃合戰止む時無く、人馬の費え容易にあらず、此の上雙方鎬を削るは、手を持つて足をうつも同樣、足を持つて胸を蹴るも同樣、つまりは一身の波滅となるで、舊き昔に立歸り、兩家間善く好誼を結ばうとの思召し、御方御異存あらせられずば、相互に長く手を握り合ひて東の方今川、武田、北條の諸雄に備へ、西の方は淺井、朝倉其の外の大名衆を抑へやうとのお心あらせらるれど、今まで白刃を以て相對した稻葉の山へ、長社杵着た使者も送れず、據なく拙者を賴み、此の義内々申し入れられ度き旨の口上至極の道理と存じ附き、態々伺候、此の義御意を伺ひ奉るでござります』

酒色の外に何事も顧みぬ龍興も、先年來信長の爲に土地を蠶食せられ、手足と賴む舊臣を奪はれたを見聞くに附け、餘り善い心持も爲なかつた、長井、日根野、齋藤、横村など、屈竟の忠臣は持ちながら、其の手で能く信長の大軍を支へ得るであらうかとの疑心もあつた、勝敗は時の運、さしもの土岐家も終には滅亡の時機が來て、當國悉く齋藤家の所領となつた、さらば忠義の家人も賴むに足らぬ、石門鐵壁も賴むに足らぬ。もしも當家の運傾き、當城兵火に裹まれる時あらば、我が身の上は什麼とならう、此遊樂の場所は什麼とならう、初瀨も妹も多くの櫻も、長良川の清き水も終には什麼となるであらう、との危懼が無いでもなかつた、其處へ卜全法印から、長く平和の交りを結ばう信長の口上を聞いたので、俄に胸が晴れて來た、頭の上に被つて居た黑雲が、急に除れたやうな心に爲つた。

『藤吉郎手の者、左樣な口上齎せ參つたな』

『御意にござります、御當家御爲、此の上もなき芽出度い事ござります』

（四）

『然し其の事、信長本意か』と龍興はまだ疑つて『人の心は忖られぬ、殊に軍好きの大將の心尙以て忖られぬ、信長斯くて當家へ油斷させ、其の虛に乘じて大軍を差し向ける心で無いか』

恁う云はれた時、卜全の眼は雷光の如く輝いた、少し口籠つて、

『弓矢神を誓ひに立て、毛頭相違なき旨を申されたれば、萬一の變あらうとも思はれぬ、殊には代々尾張清洲の城主として、譽れある織田殿、左樣な卑怯な手術回らさせう筈ござりませぬ、此の義卜全確乎とお引受け申し上げるでござります』

『正しう喃』

『御前御覺悟定まらせ、愈よ昔の好誼に歸つて、美濃尾張手に手を取り合ひ、一家同樣に親まうとの思召しあらば、尙能く織田殿御心中搜り見るでござります』

『呸』と龍興は膝を進めて『人の心、春を捨てゝ冬を取るものはない、年々の合戰より免れて長閑な月花を樂む事能くれば、乃公は望んで親好を結ぶ、縱し何人が何事を云はうとも、織田殿と手を握る、只花の下に陷穽があつてはならぬ、取り檢べて見』

『心得てござります』と卜全は直ちに答へ『それに就き織田殿所望の義ござります、お聞き容れござりまするかな』

『何事ぢや、まづ云へ』

『別義ござりませぬ、兩家長く親好を結ぶため、御妹御寮人樣を清洲の城へお迎へ申したき義とござります』

『馬場殿を喃』

『中々、御許しござりませ』

『祖父道三殿息女、嘗て織田殿を聟君になさせられた前例もある、彼の御寮人不運にも逝れさせた、其の後添に馬場殿を望ませか、良き緣ぢや、愈舊き親好に歸つて、兩家長く手を握るに定らば、馬場殿へも申し入れ緣談成就の運びをせう』

『其れに少々障りござりまする、織田殿奧方に御迎へあらせらるゝに定らば、卜全よりも御勸め申し上げるでござりまするが、奧方として御迎へなさるではござりませぬ』

『呀、什麼と云ふ、上總介殿後添として迎へぬとならば、腰元にでも所望と仰せか、否さ、人質に懇望と云はるゝ歟』

龍興の詞に勵しくなつた。

『爾うではございませぬ、人質御懇望ではございませぬ、奥方御逝去以來、信長公女人を近附け給はぬ、其の物淋しさを慰め申す爲、御側女に申し受けたい旨の……』

卜全の詞まだ終らぬ間に、龍興は拳を固めて脇息を發矢と拍つた。

『言語道斷、龍興の妹を織田殿側女に迎へやうと……』

『御意にございます、如何な大名高家へも、御緣附き御自出に渡らせ給ふ御標緻御姿容、高き御氣性を持たせられど、御當家安穩の爲には換へられませぬ、幾萬人御家人の安危には換へられませぬ、御方御武運の爲に一生を犧牲になさせられて、清洲御城へお奥入れあるやう、卜全切に御勸め申すでございます』

『爲らぬ〳〵、左樣な事ふつと爲らぬ』と烈火の如く憤つて、『痩せても枯れても美濃一國の主齋藤右京大夫の妹、遠く南朝以來、武名世に隱れなき土岐家の血を傳へた家、織田家とは身分が違ふ、されど道三公御息女を遣はされた前例もある、一國平和の爲とならば涙を呑んで後妻にも遣はさうと、存じたを、其れでもなく側女として迎へたいなど奇怪至極、いかにしても爲らぬ』

(五)

龍興の怒りは容易う鎭まらぬ。

『假令當城に擧げ、國土を擧げ、一家一門悉くを擧げて、焦熱地獄に委ぬるとも、親身の妹を敵の慰み物にはせぬ』

『御立腹御無理とも思ひませぬ、なれど織田殿は當時旭日の昇る勢ひ、今川の大軍を以てするも、一足だに尾張の土地を踏ませられず、小勢を以て鏖になさせられたお手の中、鬼神も及ばぬ、伊勢には瀧川左近、當時鵜沼には木下藤吉郎、洲服の砦にも其れ〳〵勇士を入れ置きて折あらば當城旗本にも鐵砲を打ち入れやうとの氣勢、既に當夏も大軍を以て自身出陣、御城下近くに押し寄せ參つたを御忘れはあるまじ、馬場殿御身を火の中に投げ入れさするは、無殘とも御不便とも申し上げる詞なけれど、一家中の爲、御先祖代々の爲、當お城のため、深く御目を瞑らさせられて……』

『まだ云ふか、己れ當家の祿を食み、當家に恩を蒙りながら、信長の犬となつてまざ〳〵しい口上、左樣な冒葉よくも我等面前にて申した、憎い奴、軍神の血祭り、此の場に於て手討ちにする、覺悟せ』

云ふより早く側にあつた刀桁の一刀を取り上げた、卜全は屹として、

『命は惜みませぬ、卜全此れにてお手討ちになるとして、大垣の城には三人と伜ございます、氏家の血は絶えませぬ、卜全の首をお討ちなされた其のお太刀が、軈て御方御自身お腹に臨む時あるを悲みまする』

『憎い口上、舌の根ず々に切り裂き呉るゝ』

龍興は刀の柄に手を掛けながら立ち上つた、其の間に分け入つて龍興を押し止むるは初瀨、卜全を圍うて立つたは丑之助であつた。

『まづ待たせられませ、お氣をお鎭め遊ばしませ』

『お退り召され〳〵』

丑之助は卜全の手を取つて三の間まで引き立てた、龍興は睨みつけて、

『其處退け、斯樣な者活して置いては、一家の不吉、以後の見せしめ此の場にて斬つて棄てる』

『それなりませぬ、お家第一の御家老をお手討なさせられては、皆樣思召も如何、初瀨身に代へ御願ひ、卜全樣御手討とござりまするなりや、まづ初瀨をお手にお懸けなされま手せ』

媚しい花の口には過ぎた詞であつた、其の間に丑之助は飽までも御前お刀の錆にならうと意地張る卜全法印を引き立てゝ、廊下遙に隔たつた詰所へ伴つた、龍興の怒りはまだ治まらぬ。

『織田家の犬ぢや、彼の坊主織田家の犬となり居つた、此れへ出せ、此れへ連れて來、活しては歸さぬ』

其處に立ち現れたは、奥の間にて始終の樣子を聞いて居た馬場殿であつた。

『兄上殘念でござります』

云ふ間もなく摺箔した麻の袖を顏に當てゝさめ〴〵と泣き入つた、雨に痛む紅芙蓉の花重く垂頭れる姿であつた。

『おう』と龍興は倒れるやうに坐つたが、刀はまだ脇の下に抱へたまゝ『馬場殿か』

『口惜しうございます、慙に長へて、兄上御名を汚し參らせた、父上御位牌に合す顏ございませぬ、此れにて自害、身を淸め家を淨め、兼ねては兄上御名を淸うするでございます』

『死ぬには及ばぬ、此の恨み必然晴らす、お身の名を清める爲、我等恥辱を雪ぐ爲、日根野、長井に申し附け、清洲の城へ逆寄せする』

（六）

龍興の怒りは火の如に烈しかつた。

『今日までは當城守護にのみ力めたが、今は堪忍なり難ぬる、洲股の砦、鵜沼の城、我等一たび出陣せば、鎧の頭の觸るゝばかりで、忽ちに碎け散る、斯くて木曾川を北に越え、清洲の城近く逼らば、信長大剛の將たりとも一支へあるまい、泣くな、歎くな、此の恨み今の間に晴らし遣る』

『兄上御勇氣を頼みまする、女の身の悲しさ、合戰のお供は叶はず、一命を神に捧げて御代々の御魂を呼び返し奉り、兄上御勢を護らするやう祈念するでございます』

健氣に云つて振り上げた顏の美しさは、今まで櫻と見えた初瀨が忽ち色を失ふのでも知れた、龍興は片手に大盃を差し出して

『初瀨酌せ、さうして卜全を歸し遣るな』

腰元の一人は此の御諚を聞くと共に、三の間の廊下遠く彼方へ去つた、すると程なく槇村丑之助を同道して歸つて來る、龍興は恐ろしいほどに瞋られた眼に屹と見て、

『卜全は哺』

『不調法なる儀申し上げ、御方御怒りに觸れたる後悔、恐縮の體見えてございますれば、後後を戒め只今大垣の城へ送り返しございまする』

丑之助は云ひ惡さうに云ふのであつた。

『什麼と云ふ、卜全を大垣に歸し遣つたと……』

『中々の事、外に御用あるまじと推察、斯樣な不調法者長くお城へ留め置くは却つて御不興の基と存じ、丑之助計ひ送り歸してございます』

『言語道斷、我等許しも受けず、敵方犬と爲つて馬場殿お顏へ泥を塗つた不忠者、見す〳〵歸し遣る法あるか』

今にも手に持つ盃を打ち附けん狀であつた、丑之助は一縮みに縮み上る。

『疾く呼び返せ、命持たせて歸し遣る者でない』

云ふ詞の終らぬ間、長井隼人執次なも待たず慌しく伺候した。

『隼人か、能く參つた、只今卜全如此の事あつて、手痛く叱り附けた處、丑之助計らひ、大垣の城へ返し遣したと云ふ、憎い坊主、活し置ては一家中の見せしめにならぬ、匆々城内へ連れ來れ、人手は假らぬ、我等手討ちに致し呉れる』

『其の事ございまする』と隼人は進んで手を支いて『卜全出仕、密々談合の事あると申すにより、一統御遠慮申上げあつた處、只今お暇給はつて歸城致す旨を云ひ、供人召し連れ下山致した其の狀、普通ならず深く憤りを含みある樣、御油斷はなりませぬ、且は此の場にての御模樣何事ございました、其の事具さに承り置き度く押して推參、御遊興の妨げ致しございます』

『卜全早く歸つたと云ふか、憎い奴、後追ひ蒐け首にして連れ歸れ、彼奴の面構へ再び當家へ忠義盡す者とは見えぬ』

隼人は委細を心得、一散に駈け出した、丑之助は自分の取り計ひで卜全を歸し遣つた事が、甚だしく右京太夫の機嫌を損じた樣に氣を揉んで、

『御願ひございます、卜全法印追手の役、丑之助へ仰付けございませ、丑之助の手に法印首を打ち取り參らずば　只今の不調法お詫の廉ございませぬ』

『坊主逃すな、驀地に逐ひかけ參れ』

丑之助もまた後を逐うた、右京太夫は引掛け〳〵酒を參る、胸は宛然煎附くやうで、好物の酒も平生よりは味が出ぬ。

（七）

翠の樹々の間から絶えず吹き來る風の涼しさは、氷室の奥から送られる程、涼しく清く冷たいが、それでも右京太夫の胸の火を鎭めるには足りなかつた。

『丑之助はまだ歸らぬか、隼人はまだ歸らぬ歟』

と間がな隙がな問ひ掛ける、其の度毎にお側衆は廊下に出で遙か彼方を透し見つゝ、

『まだお歸りございませぬ、卜全法印も去る者、討手を迎へ手痛く合戰致しあるのではございませぬか、甚う間が要りまする』と同一事を云つた。

『日根野兄弟を呼べ、齋藤八郎右衛門を呼べ、總家中殘らずを表書院に集め置け、大事の評定早やゆ

や』と眉に火の點くやうに急き立て『安藤伊賀守、稻葉伊豫守彼等へも急使を立て、一生一度の大事、今より談合の席を開く』

お側衆は委細心得て、一座殘らず此の口上を傳ふべく立ち去つた、物の三時も經つたと思ふ頃、丑之助は力なく歸つて來た。

『殘念でございます、最早遠くへ逃げ去つてございます』

『坊主逃げたか』

『逃げ足早い法印殿ございます、長井殿諸共一散に逐ひ掛けございましたが、早や姿見えず、大垣へ入つてございます、大坪の城には子息俊通殿詰めさせ、恩顧の武士一萬近くも詰めありまするで慾に押し蒐け參る事なりませぬ』

『而て隼人は』

『尙後を逐ひ蒐け行かせられございます、なれど望みは遂げられ間敷きかと、恐れながら推察此の上は大勢を以て大垣の城を取り圍み、攻め落す外、手術ございませぬ』

『諾し』と龍興は頷き『急ぐに及ばぬ、清洲の城手に入らば、彼等自ら打ち倒るゝ、家中の者出仕せぬか、樣子見て參れ』

○其の間に長井隼人も手を空しく歸つて來た、卜全を逸したので龍興の怒りは愈烈しくなつた、長井日根野齋藤槙村など、龍興の旗本は當城に詰めて居たが、城持の重役は、皆五里十里、近くも三里を隔てた處に居るので、其の人々が龍興の急使を得て稻葉の城へ集つたは、其から三日後の事であつた、安藤伊賀守、稻葉伊豫守も皆召しに應じたが、卜全のみは姿を見せなかつた、其の代り、親の名代として總領の俊通、家來耶黨を引具して第一に出仕した、龍興は卜全の代理として俊通出仕の事を聞き、親の代りに手討しやうと敦圉いたを、斯る事より味方の勢を挫くは、大敵を前に控へた御方の爲さるべき事でないと云ふので、備中守から種々に諫言した、それで抑へ切れぬ怒りを抑へて、軍議の席を終つたのは七月二十五日巳の刻前であつた。

軍議の要は此れ迄織田家の爲には幾度の辛き目を見せられある、而已ながず近年に至つて洲股、鵜沼の兩所に新城を築かれ、大澤次郎左衞門、竹中半兵衞など、當家の手にある者を彼方味方に引き寄せられた、斯くして月日を送り行かば、朝には一郡を取られ、夕には一城を奪はれ遂には土岐家以來連綿として傳はる當家の滅亡を見るに至らう、斯くして彼等の爲すが儘に任せ置かんよりは、一擧し

て清洲の城に攻め寄せ、信長の首級を得て、年來の恨みを報いんとの主意であつた。

此は今日改めて龍興の口上を聞く迄も無く、心ある者、皆織田家を憎む餘り、度々評定の問題に爲つた事であるから、一人として異存を云ふものは無かつた。

（八）

然し齋藤家に於ては、織田家の如く敵地に足溜りの城があるではないから、木曾の大河を南に越えて大軍を繰り出すには、まづ鵜沼の城を滅却せねばならぬ、洲股の砦を壞たねばならぬ、さうして第一には尾州中島郡黒田の地に足溜りの城を築いて、眞逆の用に備へねばならぬ、大將御出馬の間稻葉の城を留守すべき屈竟の人を選ばねばならぬ、兵糧は道三以來、倉庫に充溢して居るから、此れには少しの不足を感ぜぬけれど、國中には長井日根野と快からず思ふ者もあつて、異變者が無いとも限らぬ、其れ等の差配も嚴重にせねばならぬから、この企て客易で無かつた。

然し容易でないからとて、此の儘過ぎ行かば、長き年月の間には國土を擧げて、信長の手に奪はれる時が來ぬに限らぬ、土岐家代々鍛へに鍛へ、道三以來錬りに錬つた美濃武士が、父祖の臍魂を現す

は此の時、三代相恩の主を捨て敵に味方した不忠者は敢て問はぬ、假にも當家大恩の頭に被る者、悉く心を一個にして命限り戰はゞ清洲の城とて鐵石で作られたものでない、年々の恨み、別してけ馬場殿御顏に泥を塗つた今日の申し入れ、國の仇、家の仇、一族の仇打ちやげずば武士としての面目は立ち難ぬる『一統が異存あるまい、異存あらば腹藏なく之にて云へ』と龍興は酒氣を帶んだ聲で云つた。

長井日根野は原より同意、安藤稻葉兩家老は口を噤んで何も云はぬ、卜全は病氣に付き、名代として驅け附けた氏家俊道は義理御尤と返答する、不破飯沼其の他の勇士猛將皆腕を抑へながら、此の合戰命の捨て處、御恩を奉ずるに聊か覺悟の次第もあると、勇しく言上した。

それで軍議は立所に決した、乃ち美濃一國の勢を以て清洲の城を攻め落すと云ふのである、土岐家以來忠義の二字に鍛へ上げた美濃勢幾萬騎が一個に爲つて、尾張武士を打ち平げやうとの事であつた。

『一同舊恩を頭に戴き、當家の爲に死を以て合戰するとは、何とも健氣ぢや、さらば今より陣備へ諸事の手配り油斷なくせ、八月三日は馬場殿誕生日、眞個に黃道吉日ぢや、此日を出陣の日と決める、左樣心得よ』と龍興は一同に沙汰をした。

馬場殿の事なら端を發しての大合戰であるから、馬場殿の誕生日を首途と定めたのは時に取つての

計ひであつた、並み居る人々は勇みに勇む、美濃から他國に兵を出すのは、近年絶えてなき事、今日に爲つて此の大事を決行し給ふ御方の頭には、御代々の御魂が宿らせられる、此の合戰必ず勝利、今より十日と經たぬ間に、清洲の城を焦土にして、信長殿首級を見る。何んとも良い心地と互に勇み勇まぬは無かつた。

即ち尾張攻めの軍奉行は、長井隼人に決められた、隼人は龍興の義理ある叔父に當つて、一家中に並びない名家であるから、配下は皆歸服した、日根野備中守は武者奉行を承つた、槇村齋藤不破飯沼は一方の旗頭、安藤伊賀守は中軍、龍興は殿、先陣は長井飛驒守、稻葉伊豫守は龍興に附き添つて、萬事に心を附け、事に由らば出陣の留守中を預かるべき沙汰もあつた。

今まで亂舞遊興の場であつた稻葉城の奥殿が、俄に殺氣立つて來た、御方一大事といふので諸方面から城持の家來が驅けつける、稻葉山の周圍は人をもつて充たされた、七月二十五日以後の總人數三萬餘騎と記された。

二十三　一門の會合

（一）

稻葉山の城では尾張征伐の軍議に日もまた足らぬ、兵糧彈藥の運搬、武器武具の選擇、陣備へ手配り、それ〳〵に受け持ちを定めて、城内城外宛ら鼎の沸くやうな混雜であつた。

此れを知つかて知らずにか、鵜沼の城を預つて居る藤吉郎は、近頃床しい事を思ひ立つた、それは木下家の一族を悉く城へ招きて、絶えて久しき親族を結ばうとの事であつた、幼少の時家を出て後、三河遠江の處々を流浪し難儀し、或る時は蜂須賀家の食客となり、或の時は松下嘉兵衛の草履を擂み、矢矧橋の月を枕に眠り、津島の社の闇に徘徊、白木綿の着物被て針を賣つた事さへある、今は思はぬ出世して、信長の重役、一城を預る身分となつた、然も日毎御用の繁きに紛れて母の許を訪れもせぬ、親戚緣者の往來もない、恰度良い折に少しにても血緣の續きあるものは、悉く招き寄せて、一家一門水入らずの酒宴を開かうとの心であつた。

此の事は七月二十日頃からの思立ちで、それ〳〵に使者を向けられた、第一は中中村の茅屋に住んで居る母のお臺、其の從妹のおきく、おきくの良人加藤右衛門、其の子夜叉若、續いては妻おれゝの

母、おれゝの妹婿淺野又右衛門、朝日殿、おれゝの兄杉原孫兵衛、其の子大藏、また續いては妹伊智子、其の頁人三好彌助、弟の小一郎、妹のお小どの、これ等の人は藤吉郎から遣はした使ひの者に伴はれて、次ぎ〳〵に鵜沼の城へ到着した、さうして一家水入らずの酒宴を開いたは、稻葉の城で龍興が尾張攻の大評定をし、其の月二十五日の翌日であつた、此の外に一人の珍客があつた、それは何十年來信長の幕下に從いて、小人頭を勤める一若であつた、彼は六十の坂をも越して、頭に雪を戴いて居る、が心ばかりは達者で、少しも昔に變らぬ狀であつた。

此の時藤吉郎は二十九歳、お臺殿は五十一歳、小一郎は二十六歳、お伊智は三十三歳、お小殿はまだ稚く十三の蕾の花、おきくは二十五歳、其の子の夜叉若は三歳の秋を迎へて、愛らしさは涙に躍る兎の子を見るやうであつた。

正座にはお臺殿、次には伊智子、其の次にはおきくお小殿と次第に並び、向ひ合せて杉原孫兵衛、加藤右衛門、彌助、小一郎、一若と順次に並んだ、孫兵衛の子の大藏は夜叉若より二歳上で五歳、色淺黑く眼の色光つて子供ながら一曲あるべき狀が見えた。

藤吉郎は其處へ出て酒を侑める、斯程出世して居ながら、人に對する狀は少しも以前と變る事が無

かつた、お臺殿は其の昔『猿よ〳〵』と卑み居た我が子が、斯くまで出世して、斯くまで立派な城の主となつたのを見るに附け、嬉し涙を襟に濺いだ、一若は見て、

『お臺殿、さて〳〵人の一生ほど分らぬものはござらぬな、腕白者の日吉丸が、斯程出世爲樣とは誰の心にも思ひ懸けぬ事、私は此の子の事を思ふ毎に夢ではないかと疑ひ申す』

『眞個喃、此の子の生れたは天文五年丙申の年で、忘れもせぬ正月元旦、朝日の光のつと東の山をお出まし遊ばす時、勇ましう產聲擧げた、其處へ恰度來せられたはお身であつた、岩幕殿悉なう在せられたら、今日の變ぬにお招きも致さう筈を、悲しい事でござる喃』

『岩幕は果報の無い奴ぢや、私諸共日吉丸が最眞であつたが、惡い風評ばかり聞いて、心配苦勞の間に目を瞑り居つた、岩幕に比べると私は幸福、私よりは此方が幸福、いや〳〵此方よりは小一郎、彌助、緣に繫がる人達は皆幸福、どつこいそれよりまだ幸福なは、此の城の主藤吉郎殿ぢや』とほくほく笑ひ顏で云つた。

（二）

『ぢやが喃、油斷しては無らぬで喃』とお臺の方は一杯過した酒の香を、年の割には艶々しい目に顯して『折角昇つた山坂も油斷すると直ぐ滑る、其れにまだ行く先は遠い、見上げられる程山は高い、もう五六度も汗を掻かぬでは頂上へ行かれぬで喃』

『ほゝ』と一若は驚いたやうに『するとお袋樣はまだ出世が足りぬとお云ひぢや喃』

『おいの、高の知れた身分、此の城とて藤吉郎の物でござらぬ、信長公から預つて御留守居を致すまでぢや、さらば我が物顔に私達を呼び寄せ、酒宴するさへ褒められぬ事、山なら眞の少しばかり登つたと云ふ分ぢや、藤吉郎も男、百姓で一生を果つれば其の分、苟且にも兩刀佩し武士の群に入つたからは、自分の城を持つだけの覺悟無うてはならぬ、合點であらう喃』

心の嬉しさを深く包んで勵ます樣に云ふのであつた、藤吉郎はずつと進んで、

『仰せの通りございます、信長公御恩に由つて此處までは出世したれど、まだ微祿、一人前の人間とはなれませぬ、お預りのお城へ母樣初め一門の衆を招き、粗末な酒、粗末な物を參らせまするは、上に對して恐れもあれど、皆お許しを受けての上、殊には戰國の習ひ、今日あつて明日無い命と存じ、今生の間に御機嫌良い御顏も見、また藤吉郎狀態もお目に懸けたく、取り急ぎお招き申したでござります、幸ひに命あらば重疊、又改めて芽出度い酒宴開きまする、今日は眞の無沙汰のお詫び、眞實云へば當方より罷り出で御機嫌も伺ふ筈、御用繁き身はそれも協はず、態々當所へお越しを願うて、お口にも適ふまじきを差上ぐる、只藤吉郎の眞心をお酌み取りあらせられ、それが今生にまたと無い歡び、滿足でござります』

少しも高振つた狀は無かつた、お臺は我が心を得た樣に頷いて、人並み勝れた大きい顏に溢れる程も笑を見せた。

『其の心懸け肝要ぢや、武士は今日あつて明日無い身、君侯に捧げた命なれば、忠義の爲捨てる事、最初よりの覺悟、最初よりの約束、虎の穴に入らずば虎の兒は得られぬと、昔の人も仰せられた、命を的に勇ましい軍をせずば拔群の功は得られぬ、此詞が今日の土産ぢや、小一郎も能く聞け、彌助殿も仇には聞くまいぞ』

彌助も小一郎も只愼んで聞いて居た、一若は引き懸け〳〵大盃で煽り立てた、酒の醉ひが廻つたらしく、呂律も廻らぬ舌に、

『芽出度い事〳〵、此の樣に芽出度い事がまたあらうか、六十年來浮世の事、良いも惡いも見聞きし

たが、草履取りから一足飛びに城の主と爲つた者まだ聞かぬ、其の出世を歡ぶ狀態もなく、此の上命懸けの手柄して、高い山の頂上まで登れと諭ふるお袋がまたとあらうか、此の樣な立派な武士を子に持つたお臺殿、身寄りに持つた一門衆羨ましう存じ申す、夜叉若も大藏も聽ては當家御家來ぢや喃』

大藏は父の側に坐つて居たが、夜叉若は母の手から離れて、危なげに廊下の杉戸に掴まりながら、彼方此方と歩いて居た、加藤右衛門は日頃から病身、痩せこけた顏に蓬々と髭を生して酒も飲まず坐つて居たが、此の時少し膝を進めて、

『時に藤吉郎殿へ折入つてお願ひの儀がござる、お聞き入れ下さるまいか』

『改まつて何事ぢや』

藤吉郎は詞輕く云つた。

『一門衆お越しの前、貴殿を賴み、倅夜叉若將來を賴み置き度い、お聽き容れ下さる歟』

（三）

藤吉郎は笑まし氣に、

『何かと思へば夜叉若一身の事、お賴み無くともお世話致すが一門の常、母とおきく殿とは從姉妹、我等とも血が通ふ、藤吉郎目の黑い間は、引き受けて世話をする、御安堵召され』と力ある聲で云つた。

『承つて此の上の歡びござらぬ、拙者も生來の百姓では無い、歷とした先祖を持ち、歷とした系圖ある家に生れ乍ら、二十歲前後の大病で立身の望みも絕え、日陰者同樣に世を送る、無念とも口惜しいとも云ふに詞ござらぬ、百萬の大敵も恐れぬが病には勝れず、人々の功名手柄を夢のやうに聞き乍ら惜しからぬ命長へあるも、夜叉若の將來見たさの爲ぢや、拙者には似ず生れ落ちるから肥太つて、まだ漸う三歲ながら、普通の五歲六歲の子供に負けぬ骨組、親の慾目かは存ぜぬが、眼の光普通ならず見ゆる、御家來の一人とも思召されて、將來長く御目を懸けさせられば、生々世々の鴻恩、拙者は明日が日目を瞑るとも心安い、平にお願ひ申し上げる』

右衛門の目の底には涙があつた。

『什麼かと思へば心細いお詞、病は氣で治まる、右衛門殿まだお若い、弓矢取つて人に後れを取らせられる方でもない、お勵みなされ、協はぬまでも戰して先祖のお名をお擧げなされ、我等などゝは、

違ひ歴々のお家筋、働き次第で如何樣な出世もなる、幸ひ藤吉郎當城を預り軍奉行も致し居れば、信長公にお執成しも仕る』

『御親切は辱いが、此の病身で什官の望み絶え果てた、明日をも知れぬ身、只管夜叉若の將來を願ひ置く』と云ひ掛けて後を向いて『夜叉若此れへ來う、御前お召しぢや』

おきくは垂頭いて涙を拂ふ手も顫へた、夜叉若は父に呼ばれて、刻むやうに驅けて來る、右衞門は袖の蔭に引き据ゑ、

『此方が其方一生涯の御主ぢや、子供心に能く聞け、忠義の二字忘れる喃、忠義と云ふは命を捨てゝ御奉公申す事ぢや、命を捨てゝ御奉公申し上げるぢやぞ』

夜叉若は黑視勝の眼を睜て見て居たが、父の詞胸に收まつたと見え、太つた顎を點頭かせた。

『夜叉若能く來た喃、叔父が良い物取らせる、此れへ參れ』

藤吉郎は膝の上を敲いて見せた、夜叉若はつと立ち上がる。

『此れ〳〵御前に對し不禮あつてはならぬ、愼まうぞ』

右衞門は氣を揉んだ、藤吉郎は夜叉若を膝の上に抱き上げて、

『三歳には大きい、骨組も確乎ぢや、此れなりや一廉の武士になれる』といつて其處にあつた山栗の蒸したのを取り上げ『此れを取らす』

夜叉若は手に受け戴いた。

『夜叉若は大人ぢや喃、何うぢや乃公の家來になるか』

夜叉若はまた頷いた。

『家來になつて何をする喃』

『軍、軍』と廻らぬ舌に答へた。

『家來に爲つて戰爭するといふか、尙且武士の子、右衞門殿の胤、三歳の兒が戰すると云ふ、末賴母敷い、今日から藤吉郎の家來、此れで主從の盃せう、受けるか』

夜叉若はまた頷いた。

『お母樣何うござりますな』

『良いとも〳〵、右衞門殿のお賴み、夜叉若は將來一城の主と爲り、右衞門殿おきくどのへ孝養を盡すやう、熱田明神を心に念じ芽出度う酌をして取らす、藤吉郎さつと差さうぞ』

（四）

『心得てございます』と藤吉郎は前に在る盃の雫を切つて『それ盃ぢや、主從の契約ぢや』

『お母様お酌して下さる、辱く受けう』

夜叉若は小さい手に盃を受けた、お臺殿は酌をした、一座は手を拍つて千秋萬歳を壽いた。

此の光景を羨しさうに見て居た大藏は、父の側を離れて藤吉郎の側に進んだ。

『叔父様私も御家來にして下され』

『大藏、暫時見ぬ間に甚う大きく爲つた、お身は藤吉郎の家來にせずとも、歴とした父上在らする、藤吉郎よりは淺野叔父様ずつと御大身ぢや』

『否え、私は叔父様の家來になりたい、夜叉若殿に負けませぬ』

『強い事云ふの』と藤吉郎は優しげに笑を見せ『ぢやが大藏は家來にせぬ、おれゝの甥ぢや、濃い親類、養子にせうぞ』

『養子よりは、家來が望みでございます』

『はゝゝゝ養子よりは家來が良いか、可愛い事申す喃』と機嫌克く盃を持つて『兎も角盃を吳るゝ、此の酌もお媼様にお願ひ申さればなるまい喃』

『おゝ、私の酌をして取らせうぞ』

お臺殿は何時も同じ調子であつた、淺野又右衛門は先刻から口を噤んで居たが、此の時愉快氣に

『木下殿私も些と頼みがある』

『貴殿もな、はゝゝゝ』と笑ひ『何事でござる』

『杉原孫兵衛は妻の兄、おれゝ殿爲にも兄御、久しう拙者方に食客と爲つて在すが、まばお召し出しにもならぬ、一生を日陰に置くも可惜者ぢや、改め貴殿に引き取つて吳れまいか、我等口から斯樣な事申すも如何ぢやが、一方の旗頭、弓矢取つては覺えもござる』

『お頼み無くとも繋がる御緣、家來とは附かず當城へお越しなされては何うあらう、藤吉郎幸ひ信長公御鑑目に叶ひある間、片腕ともお頼み申す』

『聞き入れて下さるか』

『中々の事、眞實の兄とも存じ、眞心を盡すでござる』

『千萬辱い』と孫兵衛は滿足氣に膝を向けて『お役には立たぬが、何時にても命は捨てる、武士の意地少々は心得ある、御家來同樣使はせられ』

『勿體ない口上、お智慧を借りる』

云ふ詞の終らぬ間、執次の役人慌しく驅けて來た。

『申上げます、只今蜂須賀小六殿歸らせられてござります』

藤吉郎は騷ぐ氣色もなく靜に見て、

『其の儘待たせ置け』

『急々申し上げたき事あるとのお詞、頻つてお急ぎの樣に見えまする』

『先日より幾度の往復、疲れもあらう、暫時休息致すべき旨、懇に申し傳へ』

執次役は心得て引き退る、酒宴はまた一頻り機んだ。

此の孫兵衛は後に木下肥後守家定と名乘つた、序に記す、夜叉若は後の加藤虎之助清正、大藏は後の若狹少將勝俊である。

夜叉若と大藏とは頗る得意であつた。

『乃公は叔父樣の家來ぢや、必然手柄する』と大藏は父孫兵衛を顧盼つて云つた。

『乃公も負けぬ』が夜叉若は普通勝れて能く光る眼に大藏を見上げながら『乃公も負けぬぞ』

『何んの夜叉若に負けてならうか、乃公の方が年長ぢや』

(五)

夜叉若は年の割に太い肱を鐵と堅め、今にも大藏に打つて掛るさまが見えた、藤吉郎二人の爭ひを莞爾として見て居たが、

『夜叉若は强い、然し同志打ちしてはならぬぞ、味方同志が太刀打ちして何方が傷いてもならぬぞ、お身も大藏も叔父の家來ぢや、すれば間良うせねばならぬ、戰場では相互に魁、少しの手柄も爭ふが、今日は酒宴の場、酒の場では兄弟間良うせねばならぬ、武士の本意此處に在る、間違へてはならぬぞ』

夜叉若は頷いた。

『大藏も其の心得忘れる喃』

『私は忘れぬ、夜叉若と間良うしまする』

年長丈け大藏は明瞭した聲であつた、右衛門は心苦しげに、夜叉若を呼んで、

『此れよ、叔父樣へ御苦勞掛けてはならぬよ、お身はまだ子供、戰する時で無い、十二三歳ともならば、親の手を放れ叔父樣御膝元へ參る、それまでは文武の修業、それを心懸ければならぬ、此れへ來い』

藤吉郎は夜叉若が賴母しかつた。

『右衛門殿御夫婦にお約束申し上げ置く、夜叉若十三歳にならば、我等手に引き取り、立派の武士に仕立て見せる、それまでは御夫婦お手で今仰せられた文武の修業、それを專一に爲させられ』

『心得申した』と右衛門は夜叉若を振り返り『叔父樣斯樣に仰せぢや、十三歳迄は親の手許で修業せねばならぬ、十三歳と聲が掛らば叔父樣のお側に參り、お身の好きな眞劍の手柄して、御先祖のお名を揚げればならぬ、父の名も擧げればならぬ』

夜叉若は頷くばかりであつた。

『おきくも能く覺え置け、我等は病身、明日の日も知れぬ、假令我等世に無くとも、只今木下殿仰せられた御一言を力にして、夜叉若を育て上げればならぬ、十年の丹精を凝らして育つる母の心が夜叉

若の土臺となる、土臺動けば一身の立つ瀨が無い、忘れては爲らぬぞ』

お菊は何んとなく悲しさが胸に逼つた、喩を押へて、

『お詞は能く分りございます、御方百千年の後には、私手に如何樣とも育て上げるでございます』

『親類一統の目の前、今の詞反古にはならぬ、證人は滿座の方々、拙者萬一の事あらば、夜叉若の上をお賴み申す、只今木下殿と主從の契約出來、此の儘目を瞑るとも心殘り少しもございぬ』

『什麼とも芽出度い、一獻頂戴申す』と一若は盃を取り上げた、お菊は側から酌をした。

『さて〳〵芽出度い、此の樣に芽出度い事またとあらうか』とお臺殿は一座を顧盼り『兎角する間に日も暮れる、藤吉郎にはお客來もある樣、何時まで斯樣にも致されまい、女は女連れ、殿方は殿方、休息致さうではござらぬ歟』

『良い處へお氣注き、御用繁多の折柄、長う止め置くはお上へ恐れ、藤吉郎殿お構ひはござらぬ、御用をお濟しなされませ』と一若も口を添へた。

『夜一夜お饗應申し上げても藤吉郎眞心は盡きませぬが、只今西美濃に遣はし置いた者立ち歸つた、申さば一大事、仔細承り參る間、此れにて御休息下さるか、それとも彼方に控間を取り置いたれば、

それにて寛ぎ、お物語りなさるゝか、何れとも藤吉郎よりお差圖は仕りませぬ』

『それでは彼方に休息致さう、殿方はまた殿方で御休息の間もござらう、これでお暇申さう哺』

お臺殿は眞先に立ち上つた、案内は扈從の市松であつた。

（六）

加藤右衛門、杉原孫兵衛、一若其の他の男客も禮いて座を立たんとする時、藤吉郎は淺野又右衛門を呼び止めた。

『淺野殿其れへお止まり下され、密々言上致し度き儀もござる』

又右衛門は心得て後に殘つた、酒の香は籠つて欄干を越えて夕陽の影が、狼藉たる杯盤の間を照した。

『今日此れへお出での事、信長公御存知でござらう哺』

藤吉郎は改めて問ひ掛けた。

『勿論の事、御前お許しを得て參つた』

『我等の事お噂は無かつたか哺』

『只此方からの注進を待たせられある、藤吉郎より何とか申し參る筈が、一向に其の事無い、何故あらうと絶えずお心に懸けさせられてぢや』

『左樣ござらう、大敵を前に控へ、當城御留守居を致しながら、悠暢らしく一家一門呼び集め酒宴を開いたには思ふ仔細もござる、藤吉郎の心中御推量下されたか哺』

『拙者も左樣とは存じあつた、而て密談の要と申すは』

『仕儀によらば信長公年來の御望み協はさせられる、只今西美濃に遣はした使の者歸りある、由つて此れへ招き敵の狀況聞き糺し見やうと思ふ、諸事は其の後、貴殿もお立合ひ下されたい』

『心得申した』と又右衛門は元氣良く『まづ其の衆をお呼びなされ』

藤吉郎は多くの扈從を召し寄せて、取り散る杯盤を悉く片附けさせた、其の後へ蜂須賀小六は旅裝束の儘無刀にて立ち出づる、藤吉郎は見て、

『大儀であつた、卜全法印稻葉山へ登城致したか哺』

『中々の事、先日仰せに從ひ、馬場殿御所望の旨申し入れの爲、昨日登城、頻つて右京大夫殿にお勸

め申し上げたやにございます』

『呱』と藤吉郎は頷いて『右京大夫殿御返答什麼とあつた』

『以ての外の御立腹、卜全法印已にお手討になる處、横村丑之助計ひにより、命からゞ〳〵立ち歸つたと云ふ、その後稲葉山から櫛の齒を引く如き急使、急々清洲お城へ逆寄せ致すべき旨御沙汰ある氣、御油斷はなりませぬ』

『呀、齋藤龍興大軍を引率、尾張表へ逆寄せ致すと喃』と又右衛門は驚いて『眞實か』

『確乎には知れませぬ、なれど昨日より今朝に掛け、國中城下の重役衆に早速登城致すべき旨急飛脚を以て觸れられたと申す、必定其の事御評定あるべき爲かと、卜全法印嚮致してございます』

『大垣の城に其のお觸れ參つたか喃』

『參りございます、なれど卜全は出仕致さず、子息俊勝人數を引き連れ、今朝登城の狀見屆けてございます』

『時節到來』と藤吉郎は思はず歡んだ。

『時節到來とは……』と又右衛門はぎろりとした眼を輝かし『さらばまづお手配りお取決めさせられ

ればならぬ』

『勿論の事、密々御談合の事あると申したは此處ぢや、一統に先立ち今宵の中貴殿一人お歸りは下さるまいか』

『お容易い御用、何れとも仕る』

『齋藤家、馬場殿の所望を立腹、大軍を以て清洲お城へ逆寄せ爲やうとの事、國中の武士皆稲葉山の城に集りあるは云ふまでござらぬ、時節到來とは此の事、西美濃より稲田大炊助、東美濃より佐藤紀伊守父子、當方よりは大澤次郎左衛門其れに信長公大軍を以て、稲葉の城へ押し寄せ給はゞ、御捷利は目前、道三頃來お心に懸けさせられた稲葉の城御手に入るは、茲十日の内を出でぬ、勝算我等の胸に在る、齋藤家出馬無い前、此方より押し掛け、勝を一擧に制するが上乘、明日にも御動座、取り敢ず當所へ御迎へ申し上げる旨、言上給はるぢや』

『心得申した、然し美濃一國の大軍、稲葉山に集り、日根野長井屈竟の者共、必死の勢ひを以て采配振らば、御方如何に大軍を以て押し寄せ給ふとも、容易く御望みを遂げられ間敷きかと心得、現に先日不覺の破れを取らせられた例もござる、それには謀計ござるか喃』

『御念に及ばぬ、稻葉山の内外に美濃國中の軍勢犇籠りある樣子、味方に取つて此の上もない便宜、只今申した氏家卜全其の子俊勝は云ふに及ばず、三人衆と立てられて、代々重く用ひられた安藤稻葉の兩家も、また深く我等に約束致した儀もござる、いかな大石も内外表裏より大鐵鎚を以て打ち碎かば、碎けぬ事よもござらぬ、竹中半兵衛御奉公初めの軍配、萬一の敗はござらぬ、此の儀も合せてお執成し賴み存ずる』

『心得申した、さらば此れにて』

又右衛門は骨も鳴り腕も唸る思ひであつた。

『成る可く密に、敵の隙密の邊を窺ひあるかも知れぬ、夫等目を避くる爲、城は一門緣者を集め、亂舞酒宴致すのも、敵に油斷さする謀計ぢや、貴殿一人は醉ひ潰れた體に見せ掛け、天明までに夜道を歸り下さるぢや』

『容易い事、徒歩で參らう』

又右衛門は藤吉郎より種々のことを聞き取り、日のちり〳〵暮れ懸る頃、木曾川を南に越えて、秋の夜道を單獨清洲へ歸つた。

後には藤吉郎の所望により大酒宴がまた開かれた、今度は不禮講と云ふので殊の外酒が機んだ、主も客も入り亂れて騷ぎ立てた、此の物音が木曾川の流に和して遠く各務野邊までも聞えた。

二十四　大事の戰

（一）

又右衛門の清洲に着いたは、寅の刻過ぎであつた、急ぎ執次役に以て信長へ斯くと通ずる、朝起きの癖ある信長は此の時早く床を放れて、有明の下に默然と坐つて居た、又右衛門急に目通りを願ふ旨を聞いて、直ぐ其處へ招き寄せた、又右衛門は藤吉郎よりの口上を落もなく申し上げ、鵜沼の城にて見聞した事を一々述べた、信長の顏には滿足の色が溢れた、時をうつさず一家中總出仕の觸れが廻る、柴田、佐久間、丹羽、佐々を初めとして、老臣重役悉く大廣間に集つたは、それより二時を經た後であつた、信長は編に人數を取り揃へて、速かに出陣すべき旨を命じた、恨ある齋藤家を征伐する事に關いて、誰一人異存のある者はない、委細畏まつて直準備に取り掛つた、それは七月二十七日の事で

あつた。

すると其の日の夕暮れ一若が一封の密書を持つて歸つて來た、又右衞門執次いで信長にさし出すを見ると、齊藤家の大軍は八月三日稻葉山を出發、驀地に木曾川を越え直に清洲の城へ逼らうとの義に決した旨、只今注進、由つて當方よりは七月二十九日、又は八月一日夜の明けぬ間に、稻葉山の麓近く押し寄せ、在々町々に火を放つて、大擧稻葉山へ肉薄したき旨の文言が記された、信長はそれを讀むと共に、躍り上る程歡喜んだ。

『急げ〳〵、陣備へを急げ』

一家中は鼎の沸く騷ぎであつた。

（二）

何れも戰爭に慣れた人々であるから、其の日から又翌日にかけて悉く用意を終つた、兵糧彈藥運搬の手續まで殘る方もなく爲きた、さうしてお臺を初め藤吉郎の珍客が、鵜沼の城を引拂つた直ぐ後へ、一萬騎に餘る大軍が到着した、此の度こそ千騎が一騎になるまでも、日頃の望みを遂げねば止まぬ、

稻葉山の城を手に入れねば止まぬ、翌日は一日休息、八月一日天の明け切らぬ間に、直々と押し寄せやうと議が決した。

『而て三人衆は什麼とした、三人衆の心什麼と爲つた』

信長はまだ疑ふ心があつて、藤吉郎に問ひ掛けた。

『他意無くお味方、御方の爲に、犬馬の勞を取るべき約束、身は齊藤殿幕下に動けど、心は御方に附添ひあるでござります』

『さらば此の度の合戰は云ふまでも無く、當方に忠義を盡すであらう喃』

『御懸念に及びませぬ、藤吉郎申し上げる事、只御信用爲させられませ』

『ぢやが人心、浮とは信じられぬ、早々人質を差し出すやう申付け』

『三人衆より人質を召させらるゝ御所存でござりまするか喃』

『勿論の事、三人衆は齊藤家の棟梁、代々忠義の眞を盡し參つた者、餓に我等へ味方する其の心疑はしい、花の下に陷穽ある世の中、念には念を入れて人質を召し寄せ、さもなくば三人衆は味方の外へ出し置け』

容易に心の解ける狀も無かつた、藤吉郎は是非も無く承知の旨を答へて、

『されば今より使の者遣はし、それ〳〵人質を參らするやう、申し通ずるでございます』

『直ぐ爲、今日まで其の事無いはお身にも似合はぬ、人質の無い內通人は、絲目を附けぬ風も同じぢや、何れの風に飛んで行かうも知れぬ』

『お心安く思召せ、明日御出立までにはそれ〳〵、人質を申し付けるでございます』

藤吉郎の答へに信長は稍安堵して、更に出陣の用意に掛つた、七月二十九日の空は清く晴れて、星の光燦然と照り、遠く近くの山々に、妻戀ふ鹿の鳴く音物淋しう聞えて居た、明れば八月一日、朝霧深く犬山の城を籠めて、闇の色淡く木曾川の流れに殘る、日はまだ出でず、大空の彼方此方に三五小さい星が殘つて居た。

朝起の癖ある信長の居間には、有明の光り明く見えた、勝家を初め多くの家臣は次の間に詰め合はせる、お側に伺候して居た前田又左衞門はいそ〳〵と其れへ出て信長の口上を傳へる、それは天の全く明け切らぬ間に、各務野を横切つて斜に野一色を過ぎ、新加納より瑞龍寺山を衝くとの事であつた、一座は急に色めき立つ、藤吉郎は末座より聲掛け、

『三人衆の人質まだ到着仕らぬ、それにても御出陣なさるぢや喃』

信長は早や昨夕云付けた人質のことは悉く忘れて居た。

『左樣なもの何れになつても構はぬ、要は右京大夫御首級ぢや、速に陣備へ、一番手は柴田權六、二番手は森三左衞門、三番手は佐久間左衞門疾々打ち立て』

執次を待つ隙もなく、信長は大音に云ひ聞けた、信長の陣備へには竹中半兵衞の助言あつた事云ふまで無い。

(三)

柴田森佐久間の三人は直に席を滑り出る、四番手は前田又左衞門、五番手は佐々內藏助、六番手は大澤次郎左衞門、七番手は梁田出羽守、八番手は木下藤吉郎、次には信長親ら殿として總軍を指揮すべき旨を達した、竹中半兵衞は鵜沼の城に留守居、合せて次郎左衞門の居城宇留間の城をも監督すべき旨沙汰があつた、一統異議なく承知の旨を答へ奉る、此の觸の間に名指の大將は何れも御前を退いて、それ〳〵出陣の用意に掛つたが、藤吉郎のみは別間に退いて半兵衞を側近く招き寄せた、半兵

衞は沈着いて座に通る。

『此の度の合戰、勝敗は什麼と見ゆる』

藤吉郎はまづ訊れた。

『猪は虎の相手にはなりませぬ』

『一日で片が附くか喃』

『稻葉の城は無二の要害、信長公如何に手强う攻めさせられても、配下の大將如何に鋭く逼らせても三日の籠城容易く出來ますする』

『三日も要るか』

『仕儀に由らば、五日七日十日餘りの合戰、稻葉の城には兵糧彈藥充滿てございます、美濃一國の精鋭雲霞の如く楯籠りございます、加ふるに無雙の要害、攻むるに難く守るに易き古今の名城ございます』

『爾うはあらうも、お身只一人にて彼の城を乘取つた事あるで無いか、さしもの鐵壁を、一人の力で打ち破つた事あるでないか、況して味方の大軍一擧して逼る、落城は目の前ぢや』

『如何な大象も一本の針で倒るゝ急所ございます、天然の鐵壁も攀ぢるに道を求むれば、容易く項上へ登られまする、人にも獸にも急所ある如く、金城鐵壁にも尙且急所ございます』

『其の急所存じてあらう』

藤吉郎は儼と訊れた、半兵衞は無言。

『豫て風評に聞いてあつた、お身が十八歲の時であつた氣、家老重役共に恥搔せられた憤り一騎にて押し掛け、右京大夫殿を押し込めて、彼の城を手に入れたと申す、畢竟其の急所を心得あつたぢや喃、急所を押せば三寸に足らぬ針を以て大象を倒すと云うた、其の急所心得あらう、それを聞く』

半兵衞はまだ無言。

『それ申さう、織田殿へ奉公始め、藤吉郎に功名をさせうため、其の急所を明地に申さう』

『此の儀なりませぬ』と半兵衞は重い聲で『齋藤家は大恩ある家筋、自然の勢ひにて滅亡とあらば存ぜぬ、半兵衞手に其急所を打つことなりませぬ、鐵の鎚は堅くとも、恩を毀く事はなりませぬ』

『お身の口から云ひ惡いか、諾し、諾し』と藤吉郎は事もなげに『强ひては問はぬ、義理が惡い喃』

『只御推察を願ふ外ございませぬ』

『人の急所は乳の下一寸の處、稻葉の城の急所は、背か』と尋常事の樣に『南西に向うた七曲り口が表ならば、長良川に沿うた北の方は背ぢや、其の急所背であらうか』

半兵衛は垂頭いた顏を擡げて、藤吉郎を儼と見た、然し一言の詞も無かつた。

『それとも脾腹か、人で云へば脇の下とも云ふべき處、日野の烽火臺から山傳ひに本丸近きあたりと聞いた、それ歟』半兵衛に訊ねるでもなく、獨語のやうに云つた、半兵衛の顏色は其の度毎に變り行く、藤吉郎は視て、

『最早聞かぬ、まさかの時は背を搏つか、脾腹を挾るか、急所は一、さらば留守せ、お身の力假りぬ、三人衆の手の者多く城内に入混みある、案内に事缺くまい』

『半兵衛はお留守居、悉なく御凱陣を待ちまする』

『確乎と留守せ、信長公大事の軍ぢや』

云ひ切つて立ち上つた。

半兵衛はさすがに古主へ弓引く心なかつた、時の勢ひ止むを得ず信長の手に屬きはしたが、それでもまだ舊恩を忘れては居なかつた。

二十五　龍興の運命

（一）

信長の大軍は雲霞の如く稻葉山の麓へ攻め寄せた、右京大夫はまだ寢所に長閑な夢を見て居たのであつた、日毎に到着する味方の兵の多いを聞く嬉しさ、昨夜も更闌くるまで刹瀨の酌で樂んだ、忠義無雙の家來を從れて、怨み重なる信長を征伐すべく、清洲の城へ押し寄せるは、早や一兩日の間と思ふと、何んと無く氣が勇んで、酒の量も增えて來る、それに近頃まで疎遠に暮した三人衆の中、稻葉伊賀守が詰め切つて、何時に無く酒の相手をする、長井日根野は戰ひの陣備へに暇なく、御前に伺候する事はないが、伊豫守と伊賀守とは交る替る相手に出て、朝から酒を侑めるのであつた、龍興はそれが嬉しかつた、卜全のみは出仕せぬが、俊勝は百曲口を堅めて居る、彼の働き次第に由つて、卜全の罪をも赦さう思召し、尾張より還る時は、信長の首級を土産に持つて馬場殿に參らせうぞ、併せて代々の御位牌に手向けやうぞと只それぱかりを樂んだ。

處が八月一日夜のほの〴〵と明け放れて、蕭颯たる秋の風が深山の梢を吹き渡る時、新加納の方に一團の猛火天を焼して燃え揚つた、素破火事と見る間に、又一手々々々、處々に火の手が見えた、續いて矢叫びの聲、天地も覆る物凄さであつた。

『一大事ございます、織田の大軍攻め寄せてございます、御用意なされませ』

近習の一人は龍興が寢覺めの居間を驚かした。

『織田家より寄手の軍兵、お城下近く攻め寄せてございまする、早や起きさせませ』

初瀬は精悍しく搖り起した、龍興は枕を蹴つて跳ね起きた。

『此方より逆寄せすることを早くも知つて、不意に寄手を差し向けたものと見ゆる、口々の手配は良いか、長井隼人、日根野備中それ〴〵に心得あるか』

龍興は口早に罵つた。

『兩家老それ〴〵持ち口御堅め、槇村殿殿藤殿其の他屈寛の御方何れも決死の軍兵從へさせ先刻下山、敵の勢を喰ひ止めやう手配り、嚴重に見えてございます』

『応』と龍興はつか〴〵と廊下を出で、欄干に片足掛け、片手に簾を颯とかゝげて、南の方新加納の

町を見ると、一面の猛火焔々と天を焦す、其の間に鐵砲矢叫び、朝風に飜る旗指物林の如く、敵の總勢雲霞の如くに見えた。

『鎧持て、武具持て』

側には初瀬が附き添うた、お側役は心得て引き退る、それと入れ違ひに伺候したは稲葉伊豫守であつた。

『御前御目覺めございまする歟』

『おゝ伊豫』と詞急しく『彼を見、雲霞のやうな寄手の大軍を見』

『良いお眠氣覺してございます、又しても蟷螂の斧を振つて龍車に向ふでございます、沈着いてあらせませ』

『爾うはならぬ、平生とは違ひ、當方より逆寄せ致す手配り最中、却つて敵より押掛けられて此の儘には見ては居られぬ、自身出馬、一戰に蹴散らし、美濃武士の手並を見する、伊豫も供せ』

『言語道斷』と詞急しう『輕々しう御出陣など思ひも寄らぬ義、まづ朝のお支度をなされませ、只今膳番へ申し付け、長良川の鮎の香良きを料理させてございます』

『おゝ』と龍興は座に着いて『勝軍の盃、それ良から う、早く持て』

云ふ處へ近習は武具を持ち運んだ。

(二)

伊豫守は見て、

『左樣な物召さるべき折でない、高の知れた織田勢、お味方には長井日根野兩大將控へある、瞬間に退治、あはよくば此の一戰にて信長の首級、お下物に參るまいものでもない、御鎧よりは何時ものお杯、御兜よりは何時もの銚子、早召させ』と沈着いて云ふのであつた、それでも初瀨は心許なく、龍興の袖を引いて、

『油斷大敵でございます、御用意に若く事ございませぬで、勝軍のお盃、只一獻、後は朝餉を召させられて、御出陣の御用意肝要とございませうぞ』

『女の知つた事か、早や酌せ』

龍興は大盃を取上げた。

女でさへもそれと心注きて、苦い諫言を進めたれど、龍興は耳だも傾けなかつた、運の末とは云ひながら、齋藤家五代の主たる身が、女の心にも及ばぬは無念であつた、近習は其處へ手を支きて、

『御武具を取り出し參らせてございます、早や召させませ、合戰半と見え、矢叫びの聲次第に烈しう新加納より、瑞龍寺門前へ押し寄せたやうに見えまする』

龍興がそれへ心を移さうとすると、伊豫守が直ぐ遮る。

『武具は合戰の用、お酒の場に召さるべき物ではございませぬ、瑞龍寺からは餘程の道程、味方の兵村々を堅めたれば、容易く織田勢に蹂躙られる筈ございませぬ、寛々と召させられませ、安藤伊賀守鷲谷の嶮を守り、恩顧の武士忠義を盡しあれば、敵兵近づく懼れとてもございませぬ』

『安藤伊賀守鷲谷を堅めあるか、さらば安心、武具の用は無い、お身達は次へ立て』

龍興は早や其處へ腰を据ゑた。

『仰せではございますれど、當夏の敵勢とは異ひ、手痛き働き、人數も幾倍多く見えまする、そこへ木下藤吉郎信長の旗本近く、采配振るやに見えますれば、陣備へ手配り一つも脱漏ございませぬ、輕輕しう御出馬なさせられぬまでも、まづ御用意の御武具、寸時も早く召させられませ』

『呀、要らざる諫言』と龍興は眼に稜立て『思ふ仔細あれば武具は附けぬ、己れ等の知る事か、退れ退れ』

お側衆は是非も無く悄々と次に退る、其處へ慌しい注進に遣つて來た。

『御注進ございます』

伊豫守は膝を向けて、

『戰爭の模樣何麼とござる』

『されば新加納の敵勢思ふに增して手强く、一の手柴田勝家眞先きに進み、瑞龍寺前に於て槇村殿御勢と合戰、最初の程は槇村殿捷と見えございまするも、敵の大軍、新手を引換へ攻め立てる太刀先に敵し難く、散々の敗北、早や小熊まで退かせた氣、殘念至極ございます』

龍興の顏は見る〳〵中に變つて來た。

『槇村丑之助敗北したといふか、柴田勝家軍勢左程に手强く働くと云ふ歟』

『中々〳〵、鬼神と綽名に呼ばれた柴田の軍勢、死物狂ひに荒れ廻る光景、物凄くも怖しく見受けまする、注進の次第此れ迄、おさらばでございます』

云ひ置いて退いた、伊豫守は事も無げに、

『斯樣な事、御耳に止めさするまでの事ございませぬ、勝敗は時の運、軍は勝利ばかりあると極りませぬ、時には敗北、時には勝利、斯くて最後の勝を致す者が、時の勢を握るのでございます、槇村丑之助一旦は敗北しても、恥を知る武士、盛り返して勝利を得ば、お味方の傷とはなりませぬ、鷲谷には安藤伊賀守罷り在る、それを深く御賴ませ、寬々捷軍の御盃を擧げさせませ』

(三)

『畏れながら伊豫お相手仕るでございます』

伊豫守は膝を進めた、龍興は見て、

『如何樣、捷つばかりが戰でない、敗北は勝利の基、祝うて一獻相手をする歟』

『忝く頂戴、御武運長久を壽きまする』

『愛い奴ぢや』

手に持つ盃を差し突けた、初瀨に擦り寄つて酌をする。

「初瀬殿、何時見ても美しく居らせちや喃、彌生の日麗かに當お山を照す中、松の翠打ち交つて處々に咲く花の精が、假に姿を顯す樣ぢや』

初瀬は顏を眞紅にした、大軍間近く押し寄せて、お城を距る遠からぬ處に條羅場が開かれて居ると云ふに、お家の棟梁たる三人衆の其の一人、稻葉伊豫守の口より、斯樣の詞を聞かうとは、夢にも思ひ寄らぬ處と、恨めしくもあり又腹立たしくもあるので、返答は無く垂頭いた。

『はゝ』と伊豫守は快く受けた酒を飲み干し『次には初瀬の御、御寵愛衰へぬを祈りの盃、今一獻頂戴申す』

「伊豫守は剛勇ぢや、幾萬の大軍を前に控へて、悠々と盃上ぐる、武士は其の度量なくて叶はぬ、酌して取らせ』

初瀬は蟹の口へ酒を注ぐ思ひを爲ながら、嫌とは云ひ得ず伊豫守の側近く寄り添うた。

『我れ等も此れにて今一獻過すであらう』

龍興はまた盃を擧げた、此の時間の襖を靜に開けて、悸々しながら立ち出たは馬場殿であつた、清い目に涙を持ち、優しい眉に皺りを見せて、龍興の後方に膝行り寄つたが、泡つた聲で、

『見上　合戰の樣樣御聞かせござりましたか喃』

「今最初の注進申つた、槇村丑之助不覺の敗を取つたと云ふ、ぢやが味方には長井隼人、日根野備中うと伊豫がそれと言き申した、まづ安堵ぢや』

其の他一騎當千の者共、忠義の二字を頭に頂き、必死と防戰、今に信長の首級を此の酒宴の下物にせませぬ歟

『怖しい鐵砲の音、矢叫びの聲、木の間に漏れて響きまする、當お山へ彈丸の飛び來る氣遣はござりまする』

『これや姫君の甚い御心配とござりまする喃、高の知れた織田勢の打ち出す彈丸、斯樣な高山へ飛び來る時あらば、長良川の水遡さに流れるでござります、大船に乘らせられたお心で、譜代恩顧の御家來を賴ませられ、明日までには織田勢木曾川を南に渡つて逃げ行くは知れてござります』

『左樣には云ふが、心安う見ては居られぬ、私が男なりや、采配取つて眞先に打ち立ち、屍を戰場に暴さうもの、女の身の甲斐なさそれも叶はぬ、切ては北の方長良川緣の要害にても堅めたい、表口は殿方、裏口は女の手、太刀持つ術は知らずとも、二個の眼を輝かして敵の樣子を見拔く事は出來る、此の我什麼とござりませう喃』

女には健氣な詞であつた、南西に面した迫手の要害は、それ〳〵嚴重に防禦が行き達いて居るけれど、北東に當る搦手には、十數人の番卒が置いてあるばかり、少しの用意も爲てなかつた、馬場殿は女ながら、其の事を氣遣はしさに、態々心注けに來たのである、龍興も頷いて、

『良い處へお氣が注いた、北東は長良川の激流、自然の濠を爲し、金華山の絶壁は屏風を立てた樣に峙ちあれば、容易に敵の寄せ來る事もあるまじきを思ひ、誰とて防禦に心注いた者も無い、さるを馬場殿御遠慮、感服の外無い、此方大將として腰元共引き連れ搦手を守らせか』

（四）

馬場殿は鐵として、

『女性ながら武士の胤、身を捨てゝ御先祖御威光を守り奉るは、當然の務めと心得まする』

『さらば急いで用意を召され、我等も聽てお力添へ申すであらうに』

伊豫守はまた遽つた。

『さて〳〵要らぬ御遠慮、北の方は只今御前仰せの通り、長良川の激流麓を繞り、金華山の絶壁屏風を立てた如く欹ちあれば、何處からも攻め寄せる事叶ひませぬ、長井日根野其れを存じあるに由つて、十數人の番卒を附け置くのみ、少しも手配り致しませぬ、それを姫君御出陣腰元共從へさせ、御守りあらせられうとは要もなき御企て、其の事もし後日の沙汰となり、齋藤家よく〳〵人數に不足と見え、女原を驅催し搦手の守りとしたなど、口の端に係つては、御先祖に對し武門の恥辱、お家の穢れとなりまする、此の義切に御止まらせこざりませ、伊豫惡しき事は申しませぬ、萬一搦手守護の要あらば、他手は假らず、伊豫一騎にて防ぎ矢仕り敵に油斷を圖らせる事致しませぬ』

『左樣には云ふが』と馬場殿は安からぬ面貌で『織田殿お膝下には木下藤吉郎と云ふ智慧者あるを聞いた、如何な手術を運しあるも知れぬ、油斷は大敵、慢しいは此れぢや、女とて戰せぬ事か、兄上御身に通ふ血も、私の體に通ふ血も、皆御先祖の給物ぢや』

『相應しからぬ事なさせられぬ者でこざります、長良堤より樵夫の通ふ間道はこざりまするも案內知らぬ織田勢の心注く筈は無し、東の方日野山に烽火臺の細道はこざりまするが、此れは不破河內守堅めある筈、日根野長井の軍配に少しの脫漏こざりませぬ、姫君は太刀薙刀持たせられるよりも、琴笛俳紙短册それが相應こざります、御前は捷軍のお盃、姫君は今日の合戰御捷利のお歌どもなされませ』

『こりや伊豫の申すが當然ぢや、馬場殿左樣な處へ出でさせ、流矢にても中つては取返し附く間敷事、戰爭は武士のするものぢや、控へて在せ』

龍興はまた伊豫守の詞に從いた。

『さらば私申す事お採り用ひござりませぬ歟』

『ならぬ事〳〵、和歌の德は鬼神をも感ぜしむると云ふ、稻葉明神へお歌ども參らせられ、さらば神も感應、其の御利德に由つて捷利得るは必定、搦手の守護より其の方が味方の爲ぢや』

龍興は笑ひながら云つた。

其處へまた第二の注進が來た、伊豫守は膝を向けた。

『槇村丑之助殿一旦は小熊近く引き返されござりまするが、新に陣を立て直し、瑞龍寺前へ押し寄せ見事の捷利、一旦奪られた陣所をお取り返しござります、まづは芽出度い捷利のお知らせ、此れまででござります』

云ひ置いて直ぐ引き退つた。

『敗北は捷利の基、此の詞に僞りござりませぬ、丑之助健氣にも敗軍の士卒を以て、柴田森の大軍を

追ひ退け、一旦奪れた陣所を取り還したとは、返すがへすも健氣な仕方、御感狀遣はされねばなりませぬ、鬼柴田など怖ろしい名は云ふが、丑之助に新手を當てられ、一旦太刀先にて得た土地を再び取られ逃げ歸るなど、恥を知らぬ仕方、織田の家風は此れでも分る、誠に云ひ甲斐のなき有樣、由つて御捷利は目前とござります、まづ御安堵、初瀨殿それお酌參らせ』

伊豫守は龍興の心を掩ふ黑雲であつた。

骨ある武士は戰爭に出て居るので、龍興の側近くには此れと云ふ者も居無かつた、伊豫守は心を信長の許に繫いで、軀を龍興の側に置くのであるから、龍興の爲に利益ある事を云ふ筈ない、伊豫守の云ふ事を心ならず用ひる龍興は、敵方に手を引かれて、知らず識らず深みへ入る盲目であつた。

此の日の合戰は斯る間に終つた、織田勢は新加納から小熊近く進んで居た、それだけ齋藤勢が不利であつた、夜に入つてからは雙方で篝火を焚き、貝鉦太鼓勇ましく打鳴らすばかりで一矢なも射出さぬ、まづ休息の體と見えた、翌る朝は烈しい大合戰があるであらうと云ふので、士卒は油斷なく陣所を堅めた。

二十六　搦手攻め

（一）

織田勢の士大將は何れも其の身の營所へ歸つて、明日の戰の手配をする、柴田佐久間森池田それに作戰計畫を立てゝ居る、或は弓、或は鐵砲、一騎驅け、野合せ、伏勢など得意得意の謀計を廻す間に、藤吉郎の陣所のみは森閑と靜まつて、時々密めき語る聲が聞えた、篝火も多くは焚かず、桐の紋を染めた幕の内に燈火暗う照つて、其の前に座を占めたは藤吉郎と弟の小一郎姉婿の彌助とであつた、彌助は前後を顧眄しながら、

『お留守居は必然仕る、早々お手術をなされませ』

續いて小一郎も云つた。

『兄上御名代、及ばずながら此の腕、此の胸、此の心にて務めまする、然し總大將御納得ございましたかな』

云ふと藤吉郎は膝に支いて居た軍扇を颯と開いて、慌しく煽ぎながら、

『兎に角御承知、只能きに爲よとの御諚であつた、謂はゞ大切な仕事、味良う參らば、手を濡さず稻葉の城を乘取る事出來るが、もし一歩を過らば千丈の絶壁より眞倒に長良川の流れへ落ちる、河の底は地獄、活きて再び歸られぬ、ちやが何事も忠義のため、斯樣にして日々合戰、雙方負けず劣らず幾百人と數知れぬ死傷を出す慘しさ、目も當てられぬ、されば諸人を助くる神の御心、誠心を以て道案内とする、後を賴むぞ』

『而て御人數は』

彌助は隙さず問ひ掛けた。

『蜂須賀小六、同じく又十郎、青山新七、同小助、河口久助、梶田隼人、日比野六大夫、松田内匠助、永井半之丞其他手足と爲つて働く者十二三人もあれば事足る』

『僅それしきの御勢にて敵城へ御攻め寄せございまするか』と小一郎は訊ねる。

『間道を行くに大勢は邪魔、手足は四本にて事足る、若しも其の手五手六本、其の足三四本あらば、過ぎたるは及ばず、何れ程不便を感ずるかも知れぬ、無用の雜兵引き從れて何と爲う、蜂須賀、青山、

梶田、河口、皆我等心を存じの者ぢや、我等心の儘に手足と爲つて働く者ぢや、忍術には小助、力業には六大夫、又十郎も人後には落ちぬ、太刀取つては隼人、半之丞、内匠助、久助もそれ〴〵に取柄がある、小六は我等側に附き添うて左右前後に目を配れば、幾千百人の武士を召し率れるに優れて居る、懸念致すな』

『而て今宵の中に御出發とござりまする歟』と小一郎はまた訊れた。

『闇の夜を幸ひ、長良堤より間道を搦手に廻る心ぢや、もし武運拙く途中に災難あつて身を終ればそれまで、再び會はぬ』

小一郎も彌助もそれには何んの答もなく垂頭いた。

（二）

藤吉郎はまた云つた。

『我が君侯御一大事の合戰に從ふからは、身を御馬前に曝して忠義を盡すが武士たる者の本意、千仞の懸崖より轉げ落ちて長良川の藻屑となるも、明日の軍に眞先駆けて、流れ丸に胸を打たるゝも死は同一ぢや、忠義の誠に渝りない、其の時は後を頼む、小一郎の所來、彌助の身上、若御方に願ひ置いた、これも呼念致すまい』

何から何まで殘る方なき藤吉郎の用意深い注意を聞いて、二人は涙の催さるゝまで有難く感じた、この時幕の外に勇ましき跫音、袖草摺の數々擦れ合ふ音がした。

『お前樣へ申し上げまする、一統用意整うてござります』

氣も爽かに云ふは蜂須賀小六であつた。

『呵』と藤吉郎は頷き『小六か、皆か用意致した喃』

『十三人の者、決死の覺悟に身を堅め、此れへ參上、いざ打ち立たせませ』

『直ぐ參る』と藤吉郎は快げに『かれて申し置いた物、用意したか』

『齋藤家の紬印、合印、悉く用意、青山新七所持致しござりまする』

『諾し、それが弓矢鐵砲に代る大事の物ぢや』と藤吉郎は云ひ切つて、小一郎と彌助とを顧眄つた『二人とも聞け、能く云ひ置く、藤吉郎武運に協ひ、望み通り搦手み打ち破り、敵の本城へ乘り込まば、明日の博曉東の空の白み行く時、合圖の瓢に金箔を塗り附け、最も高き松の梢に結び附ける、燦燦た

る黄金色稲葉山の絶頂高き梢に輝く時、それを合圖に本丸から驀地に攻め立つるぢや、忘るゝ喃

『心得てござります』

小一郎と彌助は勢よく答へた。

『その事丹羽柴田其の他例れもへ通じ置くぢや、然し今でない、明日の朝天のほの〴〵と明くる頃、時を待つて爲へ

二人は承知の旨を答へた、藤吉郎はさらばと立ち上る、眞夜中近き秋の夜風は、眞晝の如く焔々と燃え立つ篝火を煽つて、凄氣幕の中に充滿た』

『御機嫌克く無事御歸らせ』と小一郎は流石に別れを惜む如く『勝軍を祈りまする』

『勝軍々々』と藤吉郎は幾度も繰返し念じて『命あらば會ふ、今夜はこれまでに見ぬ大賭博ぢや』

『勝軍々々』

と彌助もまた此の危險の首途を祝ふ如く心で念じた。

幕の外には小六又十郎初め十三人の股肱の武士、露繁き芝生の上に手を支いて藤吉郎の立ち出づるを待つて居た、藤吉郎はすらりと見て、

『皆が大儀ぢや、今より命を捨てに參る、命捨つる足下に、必ず活きの道あらう、音せぬやうに立て、闇の夜も心に忠義の二字を抱けば、行く道は分明ぢや、久助は案内を存じ居らう』

『存じ居りまする』

『眞先に行け』

河口久助は先に立つた、敵に姿を見られ間敷き祕密の出陣なれば、松明一箇手に持たぬ、袖草摺の音せぬやうに、草鞋穿き緊め肅々と出發した、それを陣所の前まで見送つて、心に熱田明神を祈つたは小一郎と彌助であつた。

久助はかれて藤吉郎の吩咐を受けて、まさかの時の用心に、此の邊一帶の地理を調べて居たので、案内は能く知つて居る、上加納の陣所から今泉井口の町盡處を遠廻りして、忠節堤から長良の河沿ひに稲葉山の背後へ廻つた。

（三）

稲葉山の後は、長良川の激流に臨んで、宛ら屏風を立てたやうな絶壁である、人の力では容易に攀

ぢろ事も叶はぬ、齊藤家は此の嶮を頼むが故に少しの手配りをして置かぬ、それでも齊藤道三が此の城を持つて居た時は、油斷ほど大敵はないと云ふので、鳥も通ふ間數き長良口の間道に、要害堅固な砦を築いたのであつたが、龍興はこれを無用の長物として少しの人數も備へて置かなんだ、砦の外には日影に延びた草が繁つて、其の下に蟋蟀松蟲のすだく聲さへ憐れに聞えた。

藤吉郎一隊の人數は、此の間道を難無く越えた、墨を流したやうな闇の夜に星明り高く光つた、九十九折の嶮しい道を木の根に取りつき、蔦かづらに縋り、漸うに山の半腹まで攀ぢ登つた、久助は遠くを見透し、

『神の賜物、眞個に神の賜物でござります』

藤吉郎はそれを聞いて、

『忠義の誠に神の心の伴はぬことは無い、助けとは什麼ぢや』

『此の前に三の木戸ござります、三の木戸には平生十五六人の番卒共詰め居る慣ひ、夜は篝を焚き、晝は柄物を掛け並べて、嚴重に守護致しあるを知つてござります、なれど今宵に限り影も見えませぬ、人の氣も見えませぬ』

『眤』と藤吉郎は考へ『謀計でもあるでないか、心して行け』

久助はまた進んだ、闇に透して三の木戸の内外を窺ふに、夜露滑かに星を宿して、きら〳〵と螢の如く光るのみ、番卒らしい者は見えぬ、それに安堵して、

『誰も見えませぬ、木戸口に秋風老いて、御方お入りを待ち受けござります』

『重疊々々』と藤吉郎は答へながら油斷なく身を構へて、三の木戸を難なく越えた、次の木戸にも一人の番卒さへ置かれて無かつた、それを越えると絶頂である、絶頂を小半丁も南すると其處に五の木戸が構へてあつた、五の木戸は軈て當城の搦手である、久助は立ち止まつて、

『暫時待たせられ、五の木戸に篝火見えまする、流石に番卒共見張りと見えまする』

『人數は何れ程ぢや』

藤吉郎は立ち止つた、小六を初め十二人の者等は、久助の返答如何にと待つた、久助は凝と視て、

『僅ばかりの小勢、然も物の役に立つ間數き老人ばかりでござります、篝火の火も消え勝に怠り見えてござります』

藤吉郎は頷いて、隼人と内匠助を側近く呼んだ。

『此處は力が入用ぢや、番の者を縛り上げ』

『心得てございます』

手燭引いて其の沙汰を待つて居た隼人と内匠助とは勢ひ猛く立ち上つた、さうして居眠りから覺める間もなく、番卒の頭らしきを捻ち伏せて、高手小手に縛めた、殘る者は腰を拔かさんばかりに愕き逃げんとするを、一同驅け寄つて手に〳〵刄を引き拔いた。

『身動きせば命がないぞ、靜にせ』

頭ごなしに押し壓げる、此の木戸には八人の番卒が置かれてあつた、斯程の嶮崖を攀ぢ登つて搦手近く攻め寄せる者あるまいと、高く括つて居るので眞の式ばかりの防備を置いた、萬一の事あつた時は五六人にて禦矢、殘る二三人は走り歸つて、急を本營に注進する筈に爲つて居た、搦手の本營は其處を去る一丁ばどの處にある、總大將は不破河内守此れも三人衆に劣らぬ齋藤家の重臣であつた。

（四）

然し實際の敵に出會うては、其の約束が反古に爲る、八人の番卒は悉く藤吉郎の前に土下座した、

主に忠義を盡すよりは、自分の命に忠義を盡すを忘れなかつた。

『命ばかりは助けて下さりませ』

『無用の殺生は爲ぬ、我等は當城の御主齋藤右京大夫龍興殿に申し上げたき事あつて參つた、搦手の大將は何人ぢや』

『不破河内守樣でございます』

頭らしい男が答へる。

『人數は何れ程ぢや喃』

小六は側から口を添へた。

『五六百人もございませうか、直兜して本陣に詰め合せございまする』

『其の本陣何れに在る』

『其處より谿一つを隔て、南の方一丁程の處ございます、本陣に續いて煙硝倉兵糧倉御金藏も御座ります』

『誰にても案内爲』

藤吉郎は明星の如く光る眼に儼然睨んだ、此の眼に睨まれては、猫に逢うた鼠の如く、軀も縮むばかりに爲るのが例であつた、實に藤吉郎の眼は、人に優れた異樣の光を持つて居た、心を刺す針のやうに鋭い輝きを持つて居た、藤吉郎の眼に睨まれて、誰も頭を擡げる事が能きなかつた、蜂須賀小六、稲田大炊助、竹中半兵衛、大澤次郎左衛門など、一騎當千の武士でありながら、藤吉郎の手に從つて、手足の如く働くのも、此眼に威服される爲であつた、一方の旗頭ともなるべき勇士すら威服さるゝ眼に向ひ、高の知れた番卒共が生氣を持つ筈がない、宛ら朝日に打れた蚊の泣くやうな聲をして、只唯々と云ふばかりであつた。

『此れにて用意、暫く待たう』

藤吉郎は再び云つた、小六は彼の袖印、合印を十三人の手に渡した、さうして之を袖袂に附けさせた、番卒は只戰々兢々と顫へながら、久助に伴はれて前に立つた、隼人と又十郎と六大夫とは手に手に松明を取つて道を照した、小半丁も行くと底の深い谿があつた、南へ行くには此の谿を降りて、更にまた嶮岨な道を登らねばならぬ、實に天然の要害で此の谿一つを持つ搦手は、幾百人の軍卒を配り置くよりも手強かつた、久助が其處を降りやうとするを、隼人は止め

『河口姓待たせられ、此の谿を降つて更にまた彼方の嶮岨を攀ぢるは容易でない、此れへ橋を架けて進ぜる』

云ふが否其處に立つて居た杉の大木に手を掛けた、力自慢の半之丞と内匠助とは興ある事に思つて、隼人と共に曳々と打ち倒した、三間以上の溪間へ早速の丸木橋が渡された。

『これや即妙、良い思ひ附ぢや』

久助がまづ渡つた、殘る人々も此の橋を南に越えて、五の木戸の番卒が交替の爲本陣へ歸るやうに見せかけ、人の目の少い處をずん〳〵と奥へ進んだ。

然し齊藤家の者は誰一人怪まぬ、五の木戸の番卒が前に立つて居るのみならず、袖印合印も皆味方の者であるので、何かの用で奥深くに行くのであらうと思つた、藤吉郎は案内の番卒に囁いて、まづ煙硝倉へ案内させた、煙硝倉は最も大切な處且は火氣を悞るゝので、他の倉とは少し離れた處にあつた、此處には番卒が三四人居たけれど、それは小六の働きで直ぐ猿轡を銜められた、藤吉郎はそれを青山新七に申し付けて、内から火藥を取り出させた、さうして次には兵糧庫へ進み行つた。

（五）

そこは搦手一隊の兵糧を支給する處であるから、大釜を幾十箇ともなく架け列べて、三十三四人の武士がそれ〴〵に飯を焚く、然も皆が昨日の軍に疲れ果てゝ肱枕に眠つて居る、藤吉郎は天の與ふる好い折と歡んで、忍びには妙を得て居る手の者ばかりであるから、密と飯櫃を盜み出させて、それを薪小舍へ運ばせた、薪小舍には枯柴薪が山の如く積まれてある、藤吉郎は敵の兵糧を取つて餓を凌ぐ了見ではないから、飯櫃の上に多くの薪を積み重れて、それに煙硝を盛りかけた、折柄北風、仕掛けた火藥が燃え揚らば、其猛火は直に本丸の屋の棟へ掩ひかゝる手順であつた、運の末は是非もない、敵の旗頭が城内へ忍び込んで此れ程大仕事をなし遂ぐるを、齋藤家の者誰一人氣附く者はなかつた。

藤吉郎は此處に小助一人を附け置いて、殘る十二人と共に本丸の柵の外より山を下り、二の丸へ通ふ間道を研究した、案内は敵方の番卒、一から十まで能く心得て居るので、思ふ儘に仕事が出來た、今は味方を引き入るゝばかりである、小一郎彌助に吩咐けた手の者、驀地に大手口へ攻め掛ける、其の合戰の始まる頃に、仕掛けた火藥が薪に移る、搦手の火の手が見たら、齋藤家の軍兵愕き慌てゝ

本丸附近へ驅け集るに相違ない、其の時は味方捷利を得る機會、此れに待ちうけ、總大將の馬の轡を取り、本丸へ御案内申し上げなば、嘸御歡びあらせられうと藤吉郎は心に思つた、それにはかれて合圖した瓢簞出さればならぬ、東の天漸く白み渡る其の光に金箔塗つた瓢の輝き、小一郎の目に入らば、それが軍の手始めである、天はまだ明けやらぬ、今の間に能く爲と云ふので、永井半之丞に用意した瓢を渡した、半之丞は委細を心得て、最も高い松の木に攀ぢ登つた、宛ら猿の木を傳ふ如く、最も高い松の木に瓢を結んで、する〳〵と降りて來た。

二の丸の總大將は、日根野備中守であつた、長井隼人は此の時本丸に引き取つて、明日の軍の評定に夜を徹して居た、陣中は寂寞と靜まつて、稻葉山の松の梢に渡る夜風ばかりが高く聞え、時々思ひ出したやうに、吹き立てる貝の音が物凄く響き渡つた、藤吉郎は暫時人氣のない森の中に立つて居たが、やがて新七を近う呼んだ、さうして何事かを囁き示した、新七は聞く毎に頷いて、

『さらば稻葉伊豫守殿御家來衆へ、密と申し上げるでござりまするな』

『忍んで行け、命懸けの仕事ぢや』

『心得てござります』

『安藤殿詰所は本丸の北の廊下、竹の間と申すにある氣ぢや、その邊り調べて見』

云ふ下から蜂須賀小六は詞を添へた。

『安藤殿身内小池三九郎心を得た者ぢや、不破河内守殿よりの使者と云ひ入れ、對面を願はゞ故障は無い筈、此れに割符がある、手渡し爲う』

小六は懷中して居た木札を渡した、此れは小六が稲葉伊豫守を說き附けて、信長へ心を傾けさせた時、證據にとて小六へ渡した物であつた、三九郎は伊豫守の側近く仕へる者で、最も心利いた武士である、新七は總てを了承して聽て其處の木蔭を辭した、新七は彼等の仲間中で、最も忍びに妙を得た者であつた。

二十七　稲葉山落城

（一）

龍興は自分の足下に、惡ろしい毒蛇が焰の如な舌を吐いて、近寄つて居るとは知らず、明日の軍は

必定味方の大捷利と、稲葉伊豫守の申し上ぐる詞を信じて、昨夜は早く寢所へ入つた、それでも精神が知らすのか、夜の明けぬ間に起き出でゝ何時になく酒も呼ばず、有明の下に茫然と坐つて居た、側には初瀨が侍つて居る。

『朝のお茶にても參らせまするか』

媚かしう媚を含んだ聲で云つた。

『欲しうない』と龍興は只一言、初瀨はまた優しげに、

『お酒も限りござりまするで、不束ながら一服お茶を參らせうと思ひまする、召させませぬか』

重れて云つた、龍興は之に答へもなく、

『宿直は誰ぢや』

『不破半左衛門殿ござります』

『半左か』と頷くやうに『まだ天明けに間もあらうか』

『只今寅の上刻、秋の夜は長うござりまするで、まだ明けるには一刻の間があらうと心得まする』

『伊豫はまだ伺候せぬか哺』

『齋藤様は昨夕お暇給はつて詰所へ退らせございます、それ故今朝は御伺候もある間敷きかと……』

『さうで在つたか』と龍興は息を吐いた『さらば半左を呼べ』

云ふ詞の終らぬ間慌しく次の間に飛込んだは、今噂して居た不破半左衛門であつた。

『半左か、近う』

『御油斷なりませぬ、怪しき者御本丸の側近く忍び入り、城内の模様窺ひあるやにございます、只今日根野殿お手に於てそれ是れを詮議最中、此の義取り敢ず御披露申し上げ置きまする』

『敵の忍び、城内へ紛れ入つたと云ふか』と龍興は驚いたやうに聲掛け、由々しき大事ぢや、草の根分けて詮議せ』

『御諚を傳へまする、然し日根野殿御如才なく、城内隈々御詮議あらうと心得まする』

『伊豫は喃』

『まだ御出仕ございませぬ』

『訊れたい儀がある、今日は馬場殿の誕生日ぢや、合せて祖父様の命日ぢや』

龍興の祖父様と云ふは總て道三の事である。

『中々のこと』

『ふつと忘れて居た、正福寺も戦塵に裹まれあらう、佛間には龍興手親ら花を手向ける、山菊の色良いを折つて參れ』

何時になく此度憐れに殊勝な事を云ふのを聞いて、初瀬は思はず美しい目を瞠つた、半左衛門は驚いて主の顔をつく〳〵視た。

『祖父様には伊豫も御恩を受けた者ぢや、共々參詣致すやう傳へ參れ』

『心得てございます』

半左衛門は不審の眉を蹙めながら退いた。

『馬場殿にも此の事申し傳へて參れ、さうして腰元共へ吩咐け、佛間に御燈火を上げて置くぢや』

不審しくは思つたが、悪い事ではないので初瀬は心得て座を立つたが、後には龍興只一人、次第次第に力なく薄れ行く有明の光に裹まれて、物淋しう坐つて居たが、暫時して、

『誰かある〳〵』

呼び立てた、宿直の武士が伺候する。

『伊豫はまだ目覺めぬか』

『什麼とござりませうか』

『先刻半左衛門へ申し付け置いた、疾う此れへ參るやう申し傳へ』

宿直の武士は次へ退る、それと入れ違ひに半左衛門は、山菊の香り良いのに、桔梗女郎花の麗しいのを添へて、朝の露のしと〳〵と垂るばかりなるを手折つて來た。

『仰せの花御意に協ひませぬか』

龍興は手に取つて輕く頷いた。

『而て伊豫は』

(三)

『只今御諚を傳へござりましたれど、昨夜より腹痛、頻つて苦惱の容子ござりまするで、今朝はお目通り協ひ難きやうござります』

『何と云ふ』と驚いたやうに『伊豫は腹痛か』

『急病と見えまする』

『是非もない事ぢや、さらば』と花を持つた儀立ち上る『祖父樣へ手向け參らせ、合せて此の度の合戰勝利、當家の武運長久を祈り申さう』

半左衛門は御前に平伏したまゝであつた、龍興は奥へ入る。

其の間に夜はほの〴〵と明け放れ、東の山に紫の雲棚引いて、其の間から今日の明るみが映して來る、龍興は馬場殿諸共佛間へ入つて、哀れ深き秋花を手向け終る、蠟燭の火は微に動いて代々の位牌を照す、此の時どツと聞える矢叫びの聲、續いて釣瓶擊つ鐵砲の響き、天地も崩るゝばかりであつた、龍興は思はず立ち上つた。

『早や合戰、今日の合戰』

口早やに云ひながら、つか〳〵と驅け出して表座敷の欄干から屹と視た、然も其の物音は間近に聞えた、瑞龍寺山から小熊今泉一帶に敷かれた敵の陣地に、陣鉦太鼓の音が高く響いた、昨日の合戰と趣が異つて居る、海の如に霧の深い在々の彼方此方に、白帆見る如く、旗指物がちら〳〵動く、龍興は何となく哀の身に沁みる如く感じた、秋霧の空吹く風が、何處となく濕氣を帶んで來た。

『伊達はまだ伺候せぬか』

不破牛左衛門を始め、宿直の武士は悉く表の間に詰めて居た、龍興は吻と息して、

『隼人はの』

『今日の手配り御評議の爲、二の丸へ御出陣ございます』

牛左衛門は勇ましく答へた。

『備中は』

『眞先に御出馬、お味方一萬餘騎、鶯谷より早田井の口長良へ渡つて必死と御堅めございまする』

松杉の色、館の狀、前に伺候した近習の顏、原の姿に變りないが、龍興の目からは何處となく淋しく哀れに見えた、世の秋風が悉く此の山に集つて、樹々、館、人々の上を吹き捲くるかと思ふやうに哀れに感じた。

『さらば伊賀は、勝俊は』

續け樣に訊れた、長井日根野の兩家老が、專ら寵を得るに至つたので、最も疎遠にして居た三人衆までが斯うなると戀しくなつた、責て三人の中の一人でも、側に居て呉れたら、何れ程心强いかも知

れぬとの心があつた、牛左衛門は手を支いた儘、

『安藤殿は鶯谷に御守らせ、氏家殿は三の丸より七曲口へ掛け、必死とお手配りございます』

『さらば、さらば』と龍興は遠く近くに聞える鐵砲の音を、惡魔の叫喚の如く聞きつゝ、『長井飛驒守日比野彌五左衛門彼等皆什麼とした』

『何れも合戰眞最中とございます、なれど御懸念御無用、今の間に御捷利御知らせございませう、まづ勝軍の御盃を擧げさせられ』

牛左衛門は引き立てるやうに云つたが、それでも龍興は茫然と立つた儘であつた。

馬場殿は今尙佛壇の間に坐つて、當家の武運長久を祈つて居た、次の間には初瀨、これも殊勝氣に數珠を爪繰つて龍興の勝利を念じた、此の時鶯谷の難所に、一滅り矢叫びの聲が聞えたかと思ふと、今迄朝風に靡つて居た伊賀守の旗指物が、風に折られた竹の如く伏つて、替りに丹羽五郎左衛門の旗印が樹てられた。

(三)

さしもの要害も敵の爲に奪られたのが推量された。

『半左彼れを見、伊賀の旗は見えずなつて、敵の指物が飜つた、彼處は鷲谷の雜所で無いか』

半左衛門は愕いて欄干近くへ寄る時、搦手に當つて凄じき物音が聞えた、はつと思ふ間も無く、焔焔たる火勢天を烘して立ち昇る、藤吉郎が仕掛けて置いた薪部屋から、今火を發したのであつた、折柄北風烈しく吹き捲るので、火の粉が雨の如に本丸の御殿へ注ぐ『内通ぢや、返り忠ぢや、敵は搦手へ押寄せた』と口々に呼ばゝる聲、彼方此方に鳴り響いた、女子供は身を置く處も無く右往左往に散亂する、搦手は鳥も通はぬ難所と心に憑んで油斷して居た城中の武士も、此の不意の出來事に見た時は一齊に色を失つた、龍興は我を忘れて佛間へ驅け込んで、馬場殿の手をきつと握り、

『當家の運も早や盡きた、敵は搦手より押し寄せ、煙硝倉へ火を放つたやうに見ゆる、お祖父樣命日に、斯ほどの敗北を招くも、龍興の不德、當家運の末、今は此れまでぢや、お覺悟なされ、冥途黄泉の末々まで、兄妹手を引き參るであらうに……』流石に涙含んだ聲で云つた、馬場殿は無言、初瀬は聲を揚げて泣き立てた。

半左衛門を初め居合せた者共は、悉く搦手へ驅け附ける、本丸から二の丸を堅めて居た人々も、後

に逼る一大事を捨て置き難れて、悉く猛火と闘つた、多くの煙硝を枯れ切つた薪に仕掛けて置いたのであるから、吹き頻る風に從れて火勢は焔々と燃え揚る、水の手に乏しい山の上では、幾萬騎の大敵よりも猛火の襲來が怖しかつた、城中の武士が火事場に主力を集めて居る隙を見逃さず、藤吉郎の旨を受けて、瓢の合圖を待つて居た小一郎は、手勢八百餘騎を引率して、直に七曲口から二の丸へ押し寄せた、七曲口と百曲口とは稲葉の城の關門であつた、小熊今泉其の他の陣所が悉く敵の手に入らうとも、幾萬騎の大軍を以て山の麓を取り捲かうとも、搦手には長良堤よりの間道、表口には七曲百曲の要害、夫さへ堅めて居たら、齋藤家の地盤は尚大磐石であつたが、藤吉郎の仕掛けた火に慌てゝ、悉く此の辯所を捨てゝ居たのが織田家武運の開ける基、合せて藤吉郎の智謀の顯れる機運であつた、小一郎は一人の士卒も傷けず忽ちにして二の丸を占領した、信長から許された名譽な五色の旗は七曲口に颯と樹てられた、遠く早田今泉邊に集められて居る齋藤家の主力と、稲葉山の本城とは、是に由つて連絡を斷たれて了つた、小一郎の八百騎で二の丸をひしと堅めて、更に七曲口と百曲口とに嚴重の手配りをしたから、城方は外へ出ることがならぬ、龍興の股肱は城へ歸る手段を失つた、藤吉郎は斯くと見て直ぐに彌助を招き寄せた、長尾彌助は小一郎の副將として、最も敏捷な働きをしたの

であつた。

龍興は早や覺悟を定めた、もう斯うなつては命長へる望みも無い、再び譜代恩顧の武士を集めて弔合戰する手術も無い、只死後の名を全うするにある、由つて其の事を馬場殿に物語つた、馬場殿も命は惜まぬ。

『何處までもお供致しまする、長へて信長の玩弄物に爲るより、死んで親父樣、父上のお側に參るが何れ程良いか分りませぬ』

初瀬も同じ道へと云つた、然し龍興は頭を振つて、

『信長は仁義を知る武士、殊に木下藤吉郎は情ありと聞く、女子供の命取らうとは云ふまい、後に殘つて一門の後世を弔ひ、此れを只管願み置く』

それでも初瀬は繰り返し〳〵同じ道へと搔き口説いた、龍興も不憫と思はぬでは無かつた。

（四）

城内には多くの老女腰元があつた、本丸詰の重役に伴れ添ふ妻子眷族も數多あつた、常には酒の場にも參り合つて樣々興を助けた者が、斯うなつては慌て騷ぐばかりで、誰一人參り合ふ者も無い、誰一人馬場殿の介抱する者もない、火の手は幸ひ鎭つたが、それでも黑い煙は尙滿山を掩うて居た、鐵砲矢叫び陣鉦太鼓の音、彼方此方に物凄う聞え、それが惡鬼羅刹の喚ぶ如く龍興の身に逼つた。

『人手に懸つて活恥を見るより、今の間に潔く生害、馬場殿お覺悟なさせられ』

云つて刀を引き寄せる時慌しく驅け附けたは長井隼人正であつた。

『暫時〻〻、暫時待たせられ』

云ふ聲の懷しさは地獄の底で親の聲を聞いた如くであつた。

『隼人か、近う』と龍興は坐り直した。

『是非もなき御運の末、早や此れ迄と見えございます、怖ろしきは木下殿の軍配智謀、惡むべきは三人衆の仕方、別しては稲葉伊豫守卑怯未練の振舞ございます』

『呀』と龍興は目を睜つて『伊豫が什麼と致した喃』

『三人衆皆獅子心中の蟲ございます、代々の御恩を棄て、お家を賣つた奸物でございます、今日の敗北詰る處は三人衆返り忠、敵を誘引き寄せたに因りまする』

『え、えッ』と龍興はさり〳〵と齒を切り『憎い奴、伊豫を引っ立て、伊賀守を引っ立て來う』

『其の義叶ひませぬ、安藤稲葉兩家老早や織田殿旗本へ引き取られございます』

『犬、犬、犬、犬にも劣つた奴等、さうと知らず今の今まで……』

龍興は口惜し涙を瀧の如く流した。

『なれど是皆御運の末、三人衆仕方を恨ませられるに及びませぬ、二の丸既に木下殿御手に入る上は、當城の安穩に保ち行く事叶ひませぬ、今は御生害の外あるまじきと存じあつた處、藤吉郎姉婿に長尾彌助と申す仁、只今隼人陣所へ參り、沁々藤吉郎志を告げてございます』と隼人は思はず息をついて『お味方に犬畜生惡鬼の如き人非人數々あると違ひ、敵方の大將は皆情ございます、藤吉郎申しの條、只速かに當御城を開け渡しございませ、降參あらせらるゝ上、右京大夫樣は申すに及ばず、御一門衆何れもへ、決して手出し致しませぬと……』

『おゝさらば藤吉郎我等の命を助くると喃』

『御意、併しながら竹中半兵衛堅く木下殿へ約束致した事ある氣、半兵衛は鵜沼の城に在つて木下殿の幕下に附けど、心は尙御方の下に通ひ、御代々御恩を思ふが爲、當お城落つる事あつても、御方御一命に障り無きやう、堅く賴み置いたことある氣、木下殿深く其の心を憐み、約束通り御命を助け參らせう心を以て、態々長尾彌助殿を遣はされございます、何處までも隼人お供申し上げ、御先途を見届け申しまするで、此れに御開きございませ、馬場殿を初めお附女中共、それ〳〵お輿轎の用意致し置きございます』

殘る方なき詞であつた、龍興は夢に夢見た心地、返す詞も無く坐つて居た。

『一旦の御恥辱を御忍びございませ、御命恙なく在す間、當國の草木、皆御恩に靡くでございます』

『されど龍興父祖の國土を失ひ何處に身を寄する處なければ、只此れにて……』と云つて又刀を取り上げた。

（五）

『心細いお詞、隼人その意を得ませぬ、三人衆は身を御當家御恩の下に置き心を織田殿へ通はせられたれど、竹中半兵衛は身を鵜沼の城に置いて、心は御當家の御恩に仕へございました、實に天地黑白の相違、其の情を仇になさるは、神への怖れございます、越前には奥方お實家も在らせられます、佐

佐木公情厚き御方、必然御加勢もあらせられまする、斯て年月を過さする間、御譜代の御家人、軈て御計へ集り參るは必定、其の時當國へ攻め入つて、今日の御恥辱を雪がせ給はゞ、御先祖への御孝道は立つでござります、いざ御案内、只御代々の御位牌のみはお供なさせられで協ひませぬ』

龍興は年頃恨み重なる信長の軍門に兜を脱いで、藤吉郎情の下に命助かり、阿容々々稻葉の山を退くのは此處で腹を切るより尙辛いのであつた、が隼人の詞を斥ける事もならず、馬場殿を初め一家一門の上を思ふに附けて、心ならずも敵の手に傳來の城を授け、降人をなつて命助かる外は無かつた。

『良きに爲、心は死んで軀ばかり落ちて參る、此の上は只此方任せぢや』

此れが此の城の見納めと思ふので、龍興は此處に別れの盃を取り上げた、馬場殿を初め、淺井家から嫁入つて居る妻、初瀨其の他皆次ぎ〳〵に飲み合ひ、軈て用意の爲るを待つて悄々と山を逃れた、本丸から出口までは、藤吉郎の手で道を戒め、萬一の間違ないやうに計つた、道三以來武威を恣にした稻葉の城も、文祿七年八月三日の秋の木の葉と落ちて了つた、道三が其の主長井藤三右衞門長弘を打ち取つて、已れ美濃一國を手に入れてから、今年三十五年目であつた、三十五年の短い命は、鼇を繞る長良川の水の泡と共に消えた。

そこで信長は稻葉の城へ乘り込んだ、齋藤家の家來で、此の時信長の手に從いたのは三人衆を初め、十數人の大將分と千五百餘騎の兵卒とであつた、日根野長井齋藤槇村其の他恥を知る者共は、皆散々に落ち失せた、さしも攻め飽んだ當城が纔一日二日の戰鬪で、首尾よく我が手に入つたのも、正しく藤吉郎の働きであると云ふので、信長は改めて藤吉郎に三千貫の加增をした、柴田佐久間其の他の重役に、褒美加增の沙汰をする前、逸早く藤吉郎に褒美した、それは今迄幾度も加增の事を告げる度、藤吉郎が辭退して居た廉もあり、此の度の大功は萬人の謳むる處、依怙の沙汰と思はれる懼れも無いので、特に此の破格の加增をしたのであつた。

戰爭は收まつて後には秋風が吹き渡る、稻葉の城に捷鬪の聲充滿て、西の空に三日月のさやけさが照り渡る頃、名古屋矢場町政秀寺の澤彦和尙が飄然と遣つて來た、此は此の度の捷利を祝する爲であつた、信長は思ひ懸けぬ珍客を得て直ぐ對面の間へ通した、政秀寺と云ふのは信長のまだ壯年であつた時、其亂行を諫める爲命を捨てゝ意見した、織田家の重臣平手監物政秀の菩提を弔ふ爲特に建立せられた寺である、此開山の澤彦和尙が期せずして遣つた來たのは、政秀の魂が附き添つて居る樣に思はれて、一目見るより思はずも目を潤ませた。

『和尚能く參つた、何はさて今日の捷利を政秀の靈魂へ告げ遣りたい、幸ひ佛間に主が無い、彼れに位牌を祈り下さらぬか、信長の今日あるは全く監物忠義の蔭ぢや』

昔を忘れぬ詞であつた、澤彦は頷き、

『お心懸け殊勝に存ずる、政秀殿も今日御勝利の狀を御覽ありたう思召さう、如才なくお供をした』

懷中から袱紗に裹んだ政秀の位牌を出した。

（六）

澤彦はそれを今の前まで齋藤家代々を祀られた佛壇へ安置した、其處には龍興の手親ら手向けた秋草がまだ取り退けられずに置いてあつた、信長も恭しく拜を終る、側に附き添ふ近侍の武士も、また同じやうに伏し拜んだ、暫時して信長は兩眼に涙を浮べ、

『政秀存命にてあらば嘸歡ばうを、木の主と爲つては詮も無い、和尚は二三日逗留、此れにて靈魂を慰め奥れうぞ』

『御意承りございます、政秀公御側に在しまさずとも、靈魂は常に御方の御武運に添はせられござ

ります』

『そこで』と信長は詞を改めて『此の城の名ぢや、秀龍以來井口の城と申した氣、井口は此の麓一帶の土地の名ぢや、がそれに隣つて早田、忠節、今泉、などの字あつて紛はしい、我等當城を領知致すから、此の邊の土地を一統して、新しき名を附けたいと思ふ、良い名ござるまいか、今日の捷軍を何時までも記念する、良い土地の名ござるまいか哺』

『中々の事、井口、早田、忠節、今泉字多くて紛はしう思召さう、此城御手に入る上は、土地の名も決めあらせられるも一策、嘸て此處の民心を清うする手術ともなり申さ、良い名考へ參らせう』

と和尚は法衣の袖を搔き合せて、暫らく思案に暮れて居たが、

『岐阜と爲させられ、此の御城を岐阜城となさせられ』

『岐阜とは……何か據處あるぢや哺』

周岐山に起つて天下を定むとござります、土地の名を岐阜、山を岐山と命名けさせられ、周の世の故事は嘸て御方御武運の崩と爲つて、後々天下を定めさする瑞相ともなりまする』

『おゝ、左樣な芽出度い故事があるか、岐阜は良い名ぢや、周岐山に起つて天下を定むとあるか、す

れば信長の……』と云ひ掛けてにたりと笑つて『皆を召せ、今日より此の土地を岐阜と呼び、此の山を岐山と命名くろ、其の旨披露、一統へ捷軍の酒肴、山の神も驚愕く程に謠ひ噪げ、さうして直ぐ清洲の町へ使者を立て、友閑を呼寄せよ、斯様な時に例の一さし、小唄謠うて樂まずば、何の時に踊り唄ふ折あらう、疾く〳〵爲』

信長の機嫌斜ならず良いのであつた。

齋藤退治は彼れが四方の志を成すべき第一歩であつた、龍興が長井隼人正其の他一門二十餘人を從へて、落ち延びた後は、美濃二十三郡の草木悉く信長の德に靡いた、氏家卜全、稲葉伊豫守、安藤伊賀守を初めとして、大澤次郎左衛門、佐藤紀伊守父子、竹中半兵衛、不破河内守、續いて土岐、齋藤兩家に恩顧を蒙つた者までが、悉く幕下に參じた、中にも氏家、稲葉、安藤の三人衆は、最も忠勤を擅でる、半兵衛と次郎左衛門とは、藤吉郎に屬して他意なき奉公振りを見せる、美濃尾張の天地は三四年が間極めて長閑に且美しかつた。

信長は齋藤攻めに、藤吉郎の手術拔群の効を奏して、さのみ人馬を傷けず、思ふ儘の勝利を得たのち、藤吉郎を第一の相談相手とした、戰にかけては柴田、佐久間、瀧川など屈竟の者もあつたが、總ての相談はまづ藤吉郎、次いで淺野彌兵衛、丹羽五郎左衛門、前田又左衛門など智慧分別ある者に懸けられた、信長は尾張美濃二國を手に入れたれど、それで滿足する大將では無かつた、彼れは一日も早く京師へ出て、將軍家輔佐の實を盡さうと望んで居た。

幸ひに武運全く、天下一統の志を遂げ得たならば、直々朝廷の御心にも添ひ奉らんと願つて居た、美濃尾張を手の中に握りながら、彼れの官名は上總介に止つた。

二十八　足利家の末

（一）

信長はそれが無念であつた、一日も早く朝廷の武士と爲つて、忠義の實が盡したい望みであつた。

それには近國と親好を結ぶが肝要であると云ふので、まづ近江の淺井肥前守長政に長女を娶せ、甲斐の武田勝頼に次の娘を嫁がせた、德川家康とは前から親交が結んであつた、東では武田德川、西では淺井肥前守、此の三人は當時弓取りの中の弓取りと呼ばれてあつた、此の三人が信長の味方とならば

ば、さし當り他に恐るゝ者もない、然も當時花の都は三好松永の勢力爭ひで足利將軍の武威は地の底に落ちて居た、信長手に唾して立たば立ち所に天下一統の志を成し得らるべき機會であつた。

當時信長は美濃尾張二國を手に握つて居るばかりでなく、伊勢國に於て員辨桑名の二郡を從へて居た、此二郡は信長の片腕と賴んだ瀧川左近將監一益の武勇に由て征伐し得たのであつた、されば信長は近國に並びなき優勢と爲つたのである、甲斐の武田と爭うても負けぬ程の大身と成り上つたのであつた。

それで一日も早く京都へ出て朝廷に拜謁の榮を得たく思つて居たが、江州には佐々木右京大夫承禎が控へて居る、淺井備前守は自分の長女は嫁に遣つて、親しく交はりを結んで居たが、佐々木家とはまだ因緣が結んでない、承禎の他にも幕下に附いた大小名が數々ある、由つて京都へ上る道すがら、其れ等多くの邪魔を討ち攘つて行かればならぬ、それには確な名義が無くてはならぬ、大義名分の正しからぬ軍は、如何な智勇を以てするも、最後の捷利を得る事が能きぬ、藤吉郎は絕えず信長の逸る心を背後から引いて、

『時節をお待ち爲されませ、無謀の合戰は偶〳〵御方御自身を傷け給ふ外ございませぬ』と心注けた。

處が天正十一年五月圖りなく信長をして天下に志を爲さしむべき最良の機會が來た、信長の軀に一際明い光の加はるべき大きな星が落ちて來た、それは細川兵部大夫藤孝が、竊に越前から岐阜の城へ忍んで來た爲であつた、細川兵部大夫は自分の主と恃む足利義昭公の仰せを受け、信長公へ賴み參らせたき事あつて、懇々殿上との旨を執次役へ申し出た、執次役は此の事を家老重役列座の前へ披露する、細川藤孝の名は疾くより聞いて居る、義昭公仰せを承けて懇々下向したとの口上に、一座は皆色めき立つた、信長は多くある家老の中から、其應對役を藤吉郎へ命じた、藤吉郎は合戰に於て拔群の謀あるのみならず、其舌に於ても他に優れた力があつた、由つて藤吉郎は速かに藤孝を對面の間へ案內爲せ、自ら衣服を改めて罷り出でた、藤孝は播磨守元常の養子で、三淵伊賀守晴員の子である、晴員は足利十二代將軍義晴の昵近であつたから、壯い時から義晴に見出だされ、義晴薨去の後、十三代義藤の執事と爲つて、將軍家の諱の一字を授けられ、藤孝と改めた名譽の人である、此の度遙々越前から當城へ來たのは、信長の手に由つて足利家の武威を昔に復されたい望みであつた、京都は三好松永の徒に蹂躪せられ、武家の棟梁ともならせ給ふべき御方も、賴む木蔭に雨の漏る有樣、南都一乘院に出でさせられて、伊賀路より江州矢走の里へ落ち延びさせ、佐々木右京大夫を御賴みあらせたれ

ど將軍家の武威衰へたる折柄、主從の恩顧も忘れて御力を添へ奉る事もせず、却つて門外へ追ひ出し奉る、由つて悄々越前へ越えさせられて、朝倉義景を御憑みなさせられたれど、義景もまた捗々しく御味方申し上げず、今日まで逆臣征伐の模樣無きは、忠義の心消え失せて只管自分の利益のみを守る者と見えた、今は天下廣しと雖も、織田殿の他頼み思召す御方は無きとの御諚に由り、藤孝態々參つて遲き御諚を傳へ奉る、願はくは古今例少かるべき武勇を以て、都に蔓る逆臣共を征伐、再び足利殿御代に復し給はらば、上樣御歡び此の上もある間敷義、只管お執成し頼み上ぐると懇懃に陳べ立てた、藤吉郎は委細を聞いて直ぐ信長へ披露した。

『幸運の神は當お城の棟の上に御宿らせ、願うても無き事、速かに御受けの御口上然るべく心得ます る』

信長の心忽ち動く、一家中の歡喜譬ふるに物も無かつた、此れにて信長上洛の名分正しう明かに立つのであつた。

（二）

事は枝葉に屬するが、茲に少しく足利家末期に於ける京都擾亂の内容を語らう。

三好松永兩家の爲に花の都は隙間も無く黑い雲に掩はれた、然て其の事は今日に始まつたのでも無く、遠く應仁の昔に萠して居る、それは管領細川勝元と山名持豐入道宗全との間に確執があつて、東西に陣を張り、手痛き合戰を爲たのに始まる、應仁の大亂と云ふのは此れである、文明五年宗全は西の陣に物故し、同五年勝元は東の陣に逝去したが、それでも尙合戰は歇まなかつた、前後七年の亂れの間に、朝廷の禮儀は廢れ、將軍家の作法は紊れて、兩家に一味する大小名、國々に割據したから片時も合戰の歇む時無く、一時の戰亂は旋て六十餘州の亂れと爲つた、されど尙足利將軍は闇を照す月の如く輝いて、多少の光を持つて居たが、天文十年阿波國三好の庄の地頭職をして居る、三好孫二郎長慶が泉州堺へ乘出してから月の前に霧が蔽つた、足利將軍の名の上に黑い點が見えて來た、長慶が堺へ來たのは、一族の三好宗三が近畿に勢力を持續して居たのを頼るのであつた、年齒はまだ二十の血氣盛りであつたが、武勇にも勝れ、智慧にも長け、加之に勇氣が勝れて居たので、その主細川晴元の爲に深く寵愛と信用とを得て居た、細川晴元は此の時も尙四國の大守で將軍家の管領職を奉じて居た。

初め長慶が父長基に死別れたのは、まだ十歳の幼時であつたから、萬事は家老の松永彈正久秀と、一門の三好宗三とが左右の手と爲り足と爲つて補助をした、長慶は若い時から戰好きで風流の道にも心が厚かつた、十七歳の時宗三と久秀とを從へて、其の主晴元の爲に軍を爲た、それは晴元と氏綱との間に同族相食む見苦しい合戰が始められたからであつた。

氏綱は細川右馬助政賢の子で、四國管領細川右京大夫高國の養子であつた、同じ細川の家には生れたが、宗家たる細川勝元とは互に間が悪かつた、それで十二代將軍義晴に向つて、兩方から讒言を爲合ふのであつたが、義晴は初めから氏綱が最眞であるから、總ての政事向きは皆氏綱に相談がある、晴元は將軍家の管領でありながら、將軍家の信用が無い、從つて勢力も次第に衰へる、晴元は不平に堪へぬ、そこで義晴に向つて『某と氏綱との間に多年確執、合戰歇む時も無く鎬を削る、然しこれは在下が事を好むでない、氏綱心に奸計を持つて當家を壓伏しやう狀が見えるからでござる、一日も早く彼れを除かれば、遂に宗家を奪はれる事無いに限りませぬ、在下氏綱の首を得て、位牌に手向けずば、枕を高く眠る事出來ませぬ、何卒彼れを御前より御斥け爲させられ』と訴訟に及んだが、義晴は一向に聞かぬ、そこで晴元は腹を立てゝ、將軍家の館近くに火を放つて脅迫した、義晴も晴元を敵に

すゝる心はないから、遂に氏綱を斥けた、それで一時將軍と管領との間が圓滿く治まつた、氏綱は據なく本國の阿波へ歸つて、暫時鋭氣を養つたが、何時まで草深い田舍に埋もれて居るでもない、一度は晴元を壓へ附けて、以前の恨みを報ればならぬといふので、手勢數千騎を引率して都近く攻め入つた、其の幕下には游佐長教筒井順照など、名譽の武士もあつたから、勢ひ中々烈しかつた、晴元の幕下にも香西元教三好政長など聞えた武士があつて、攝津國三宅の城に立籠つた、さうして此處で氏綱の都へ入るを食ひ止める用意をした、三宅の城は三島郡別府の北二十町の處にある、今云ふ三宅村は此れである、三宅城で十日に渡る大合戰があつた、晴元の兵も能く戰ひ能く守つたが、氏綱の猛烈な攻めに當り難ねて散々に敗北し、晴元は命からく〳〵但馬路へ落ち延びた。

（三）

此の戰爭で長慶は氏綱の爲に有力な援助をした、何故長慶が其の主たる晴元に弓を引いて、氏綱を援助けたかと云ふと、これには深い仔細がある、それはずツと前から長慶と宗三との間に確執があつた、宗三は三好家の枝族であるけれど長慶よりは年長で、長く畿内に住つて居た緣故もあるから、土

地の者には存外の德望があつた、何うかすると長慶の頭を抑へる、負けぬ氣の長慶はそれが忌々しくて堪らなかつた、自分の手に兵馬の權を握つて、一族の長者と立てられたい心から、宗三が居ては邪魔になる、そこで養育の恩ある宗三を足の下に踏うとする、宗三は養育の恩を楯にして、却つて長慶の上に立たうとする、此の爭ひが長く續いた處へ、肝腎の主たる晴元は常に宗三を贔屓にして、長慶を抑へやうとしたから堪らぬ、負けぬ氣の長慶は刮と恚つた。

『主君宗三を援助けたまふならば、我れは氏綱公を助け參らす、將軍家宗三を御贔屓あれば、我れは將軍家の敵となる』

と云ふので、遂に氏綱に味方した、さうして宗三の據つて居た中島の城を屠り、更に進んで柴島の砦を乘取り、三宅城を攻め落したのであつた、長慶の勢ひは宛ら朝日の登る如くに見える、然し長慶は親ら陣頭に立つて三宅城を攻め、もし晴元の討死することがあつては、主殺しの名を受ければならぬと思ふので、自ら表に出でず陰に采配を振つて居た、それで三宅城が落ちて、晴元が但馬路に逃げ延びたと聞くと共に、さつと淀川縁を退いて、驀地に江口の陣を衝いた、江口の城には當の敵たる宗三が居たのであつた。

丁度此時は城内に兵糧が竭きて居たから、長慶は思ふ儘に捷利を得た、宗三の旗本から内通する者さへあつて瞬く間に江口の城を陷れた、此合戰は隨分劇烈であつたと見え、長慶の手に首を納むること一千三百八十餘級に及んだとある、宗三は一方に血路を開いて河内路へ落ち行く處を、長慶の手の者追ひ蒐けて無慙にも討ち殺した、此の勢ひに乘じて長慶は自ら氏綱の陣頭に現れ晴元に附いて居た多くの城砦を攻め落し、破竹の勢ひで京都へ攻め入つた、晴元は討ち漏らされた手の者を引き纏め、幾度か頽勢を盛り返さうとしたが、連戰連敗今は何うすることも出來ぬので、將軍義晴と其の子義藤とを奉じ、近江阪本の城へ落ち延びた、それで氏綱長慶は難無く京を乘つ取つて、氏綱は管領職、長慶は其の執權と爲つた、然し肝腎の將軍家が無くてはならぬと云ふので、早速使者を阪本へ遣つて義藤を京都へ迎へた、其のとき義晴薨去の後で、義藤が十三代の將軍を繼いで居た、義藤は晴元を伴つて京都へ入らうとしたが、其れは長慶の拒む處となつた、長慶は將軍家に恨みがあるのではなく、只晴元を惡む餘りに此の合戰を起したのであるから、晴元がお側に居ては、將軍家のお輪子をお迎へ申す事が出來ぬと云つた、由つて晴元は髪を剃つて出家と爲り、名を一清と改めて處を定めず出て行つた、義藤は後に義輝と云つて、將軍職は持つて居たが、勢力は悉く長慶に移つた、氏綱に管領の名は

あつたが、實權は悉く長慶の手に收められた、氏綱は面白くないから淀の城に移つて、永祿六年十月病の爲に卒去した、後は長慶が管領職と爲つた、其の家老松永彈正久秀が京都の政治を執り行つた、其の中に長慶の勢力が漸く衰へて、實權はまた久秀の手に移つた、長慶心にそれを面白からずと思つて、久秀を無いものにせうとしたが、もう長慶の手に壓へることが能きなかつた、後には將軍家の信用を得て、從五位下に叙せられ、桐の御紋章までを賜はつた、久秀の勢力は朝日の昇るさまである、長慶の祕藏子義興が邪魔になるから、手術を以て毒殺するに至つたが、それでも長慶は手を着けることが出來なかつた、夫れ是れする間に長慶は病死する、養子の義繼は年齢が若いから一向に振はぬ、將軍家も末には、久秀の横暴な行爲を忍びかれ、遠く上杉輝虎と心を協せ、西の方毛利元就を語らひ、竊に久秀を挾み擊たうとしたが、其の謀計もまた成就爲なかつた。

（四）

折角の謀計も忽ち久秀の爲に見顯はされたから堪らぬ、久秀の恐ろしい手はすぐ將軍家に掛けられた、素破といふ間に手勢を繰り出す、石清水參詣と僞つて二條の館を取り圍んだ、義輝將軍は思ひ掛

けぬ事で何うすることも能きぬ、折柄お側に人數も少い、宿直の番に當つて居た畠山一色の徒が、健氣にも忠義を思つて奮戰した、義輝も又自ら薙刀を振翳して力戰したが、衆寡敵せず、火を館に放つて自殺した、誠に無慘の最期であつた。

三好長繼は此の報を得て驚いた、父長慶の居た時でさへ、久秀には手を置いて居た、目の前に逆臣を置きながら、それを退治する力はないが、それでも主家を思ふ心はあつて、阿波國平島の館におはした足利義榮を迎へ參らせ、十四代將軍とした、夫等の事から長繼と久秀との間に、いよ〳〵深い溝が生きた、長繼は征夷大將軍を挾んで、三好家の勢力を回復しやうとし、久秀は一代の勇氣を揮つて、おのれ天下を一統しやうとする、松永三好兩家の間に、合戰爭奪止む時もなかつた、義榮は左馬頭義冬の子で、足利十代、俗に大將軍と呼ばれた足利義稙の孫に當る。

處が前將軍義輝の弟覺慶僧正が、奈良一乘院に坐つて居る、出家にこそなつて居るが、十二代將軍義晴の實子であるから、血統から云ふと足利家の嫡流である、もし此人に野心があつて、遙に義榮將軍に應じ、奈良法師を繰出すことがあつては、久秀に取つて由々しい大事である、今の間に殺害せよといふので、密に刺客に送るの說があつたから、驚いて奈良へ驅け附け、和田伊賀守を賴んで、覺

慶僧正を助け出したのは、前に記した兵部大夫細川藤孝であつた、

藤孝は伊賀路より近江へ入り、近江から越前へ轉じて、まづ覺慶僧正を還俗させた、將來は足利十五代の將軍を襲がせられる御身であるといので、名を義秋と改めたが、越前へ入つて後、元服して義昭となつた。

斯くして花の都は、三好黨と松永黨との勢力爭ひの修羅場と爲つた、藤孝が信長の手に由つてこの不祥の戰塵を掃除されたく望んだのは、此の見苦しき合戰の爲に將軍家の武威日に衰へ行くを慨くからであつた、三好家の勢力を維持する爲に立てられた將軍家に、威信の保たるゝ筈ないを思ふからであつた、同時に義昭の爲に、松永久秀は兄の仇であつた、足利家の敵であつた。

信長は藤孝の賴みを容れて、其の年七月十日越前へ迎ひの使者を送つた、其の人々は不破河内守、村井民部、志方所之助の三人と、之に從ふ家中の武士であつた、藤孝は云ひ甲斐あるのを歡んで、此等迎ひの使者の爲に案内の役を努めた、義昭が不破村井志方等の迎ひと共に美濃國西の庄立政寺へ到着したのは、それから十數日を經た後であつた。

西の庄は岐阜を距る西南一里の處にある、信長は藤吉郎以下を從へて、立政寺に待ち受ける、義昭

の爲に鳥目千貫を堆高く積んで、二心なき旨を誓ふ、義昭は歡びのあまり、藤孝を以て、『行末長く賴み思召す』旨を云はせる、信長は委細を領して、御太刀、御鎧、御武器、御馬色色を進上される、それについで柴田、佐久間、瀧川、丹羽、木下などの家中から、身分相應の物を獻ずる、義昭の滿足、藤孝の祝着、西の庄あたりの秋の色は一齊に芽出度さが籠められた。

信長上洛の期は迫つた、足利義昭殿を奉じて、天下の擾亂を鎭むといふに、幕下の者は皆な勇んだ。もし信長の前に立つて、鉾を向ける者あらば相手は嫌はぬ、踏み倒して通行爲といふのであつた。

信長は其の日の全く暮るゝ頃まで、義昭の御前に在つて、種々賴母敷き口上を申し上げ、軈て岐阜の城へ歸つた。義昭は其の儘立政寺に止つて居る。

立政寺は文和三年の開基で、淨土宗中本山と立てられた名刹である、境内に開山の智慧和尙が植ゑた櫻の大木があるので、一に櫻寺とも云ふ、維新前まで五十石の朱印地で、其の頃は此の四邊に並び無き大伽藍であつた、此の廣き寺の周圍は信長の手の者で、十重二十重に警護せられる、夜に入つてからは、晝の如く篝火を焚き列れて、屈竟の武士が交る替る番に立つ、總指揮官は藤吉郎で、不波河内守、村井民部、志方所之助が其の警護の任に當つて居た。

それに義昭の率ゐて居た足利家譜代の忠臣も少くなかつた、細川藤孝を初めとして、大館治部太夫宗定、同伊豫守春忠、三淵大和守藤秀、武田大膳大夫義秀、京極近江守高成、仁木伊賀守義廣、一色治部少輔秀長、上野中務大夫秀政、飯河山城守信賢、二階堂駿河守高秀、槇島玄蕃尉照光、和田伊賀守秀政其の他にも多くあつた。

二十九　明智光秀

（一）

夜は早や更けて、秋風が颯々と鳴る、義昭は信長の手厚き款待を受けて、一方ならず安堵したものか、臥床へ這入つて眠りに就かせる、次の間に宿直の武士が十數人も詰めて居る、境内には此方彼方に篝火を焚いて、周圍に信長の家來が非常を戒める、その光景物々しくも嚴かであつた。

丁度丑滿を過ぐる頃、細川藤孝は油斷なく身を堅めて、義昭の寢所とした方丈の庭の外を、それとなく見廻つて居ると、其處の庭欄きに當る、廣書院の垣の外に只一人佇んで、靜に天文を考へて居る

武士があつた、焔々と燃える篝火は斜に其の武士の半面を照して居る、籠手臑當に黑皮の胴を着て、青銅作の太刀を佩いた姿が、宛ら地から生えた如くに見える、藤孝は怪んで屹度視る、然も烱々光る眼と人並勝れて隆い鼻とに見覺えがある、斯までに好意を運ぶ信長の手の者に、二心あるものが居やうとは思はれど、萬一の變を思ふ忠義の心から、一歩二歩進み出て熟々と顏を眺めたが、頓て思ひ當る事があつたと見え、

『其處に在るは重兵衞でないか』と聲掛けた、すると立つて居た武士は驚いたやうに後を顧て、

『誰方でござります』と凜々しく寂のある聲で尋れた。

『乃公ぢや、兵部ぢや、見忘れあるまい』

云つて垣の側へ身を進める、篝火は容赦も無く其氣高く品のある顏を射た。

『え』と叫ぶやうに云つて、武士は大地に兩手を支きも果てず、『兵部公ござりまするか、思ひ懸けぬ御對面、且は夢かとも……』

『我等も夢かと存するよ、此處でお身に會はうとは思ひも懸けぬ、さて久濶の對面ぢや』

『恙なき御顏を拜み奉り、此れに上越す歡びござりませぬ、先年御手に仕へ參らせた時は、一方なら

す御恩を享け、然も其大恩に報い奉る事も致しませぬ、なれど新公方様御運も開けさするやの瑞相、上總介様御味方なさせられる上は、軈て都へ御還御もあらせられうと、今も此れにて御運のほどを測り居たでございます』

『乃公も織田殿お志の厚いを見て、永い年月胸を掩うた黒雲を拂ひ退けた』と藤孝は云ひながら『而てお身は、近頃織田殿の身内に在るぢや哺』

『御意にございます、御許を退いて後諸國を流浪、一昨年の春、縁あつて當家へ仕官致したのち、幸ひに落度も無く瀧川將監殿手に附けられ、先年伊勢の戰闘に、思はぬ功名仕つてより、只今では物頭をも務め居るのでございまする』

新公方とは義昭の事、伊勢合戰は瀧川一益信長の命に由つて、伊勢國桑名郡矢田城の主八田市郎左衞門を退治した時のことを云ふのであつた。

（二）

重兵衞はまた詞を次いだ。

『不束者斯様に出世致すも、畢竟は朝倉殿御恩、別しては御方御陛と、寢た間も以前を忘れる事ございませぬ』

云ふ顏に懷しげな狀が見えた。

『まづは重疊、乃公もお身の器量は彼の時深く見込んであつたも、家老共申す旨あるに由つて惜しい器を手放した、其の後も雨に附け風に附け、重兵衞の名を思ひ出さぬ事はなかつた、縁あればこそ之にて會ふ、委細の事共陰乍ら聞いてあらう、上様深く織田殿を憑ませ給ふ事あつて、遙々此れへ在せられた、織田殿は忠義の武士、上様御爲三箇國の武士を驅り催し、遠からず上洛もある筈ぢや、其時はお身も先手致すであらう、江州にはまだ織田殿の德に靡かぬ草木もある、到る處太刀劔の用あらうで抜群の働き爲、命懸けの手柄を爲、さうして家名を再興せば、父祖の靈魂も草葉の陰で歡びあらう、乃公も上様御側に附き添うて、お身の手柄を聞くを待つぞよ』

此の武士こそ、明智重兵衞光秀であつた、光秀は此の時まだ信長の幕下で、僅に物頭を務めて居るに過ぎなかつた、序に光秀のことを談して置かう。

光秀は美濃の名族土岐の血統であつた、土岐は清和天皇の後胤、遠津守頼光七代の孫、伊賀守光基

に出て居る、光基の子、土岐美濃守光衡が文治年中、右大將頼朝の仰せを受けて、美濃守護職の任に當つた儘、長く美濃國を管領したから、一族次第に繁昌した、光衡五代の孫、土岐伯耆守頼清に四人の子供であつた、嫡男は大膳大夫頼泰、次男は下野守頼兼、三男は揖斐甲斐守頼雄、四男は土岐美濃守頼忠で、其の頼忠が本家を相續し、次男の頼兼が美濃國惠那郡明智の城に居住して、遂に明智を名乘るに至つた、此れが光秀の祖先である、又本家を相續した頼忠から六代の後に、美濃守頼藝と云ふのがあつた、それが道三の爲に殺されたから、美濃の名族と呼ばれた土岐氏も亡びた、明智頼兼の子孫は、微弱ながら餘勢を保つて明智の城に籠つて居たが、頼兼から七代の孫に重兵衛尉光繼と云ふがあつた、其の子下野守光綱の子が、軈て重兵衛光秀であつた、然し光綱は光秀が生れて間も無く死んだので、弟の兵庫助光康と云ふが後を繼ぎ、明智の城に住つて居たが、光秀十六歳の時、元服させて一人前の男にし、自分は世を捨てゝ名を宗宿と改めた、さうして一日も早く甥の光秀に世を讓つて、其の身は佛門に入らう心であつた、處が丁度その頃齋藤義龍が父の道三を討ち殺して、美濃一國を一統爲やうとした時であつたから、稻葉山からは二十里を隔つた明智の城まで、風雲が急に騷いだ、宗宿は齋藤道三と無二の友で、親しく往來した間であるから、勢ひ義龍に從ふ事が出來ぬ、假令一命を

失ふまでも明智の城に楯籠つて、道三の爲に弔ひ合戰を爲ればならぬ、義龍はそれを知るので、長井飛驒守を對手に差し向け、多勢を以て明智の城を犇々と取り圍んだ、宗宿は家來郎黨を悉く城へ集め、矢種のある限り禦戰つたが、多勢に無勢終には打ち負けて潔く腹を切つた、其の時光秀も同じ死に死なんとしたが、宗宿は鑑と止めた。

『今は此方の死ぬる時でない、一命を全うして、家を興す謀計を運らせ、此處で犬死するは先祖への不幸、一門の恥辱、年齒は若うても清和源氏の嫡流、土岐家の血を傳へて居る身ぢや、彌平次諸共一方を切り拔けて兎の角も落ち延びよ』と力を籠めて云ひ聞けた。

（三）

宗宿は尙苦しい中から諄々と道を諭して、一子孫平次と共に搦手から落し遣つた、孫平次は後に明智左馬之光俊と名乘つて　光秀の片腕と爲つた名譽の武士である。

其の後光秀は孫平次諸共、越前の穴馬に落ち延びて、此處に一二年を送つたが美濃は悉く齋藤義龍の手に握られ、義龍が死んでからは龍興の所領となつて、今は手を附ける餘地もない、此の上は諸國を

遍歴して文武兩道を究め、時機を待つ外無いと思つて、六年の間修業した、或る時は天龍寺の僧堂に入つて、禪學の端をも窺ひ、或る時は若州小濱の鍛冶冬廣の仕事場に奉公して、鐵砲の製作にも思ひを潜め、さうして艱難辛苦をして再び越前に舞ひ戻つたのは、永祿六年の秋であつた、恰度其頃國主朝倉義景が、國中から武藝拔群の者を募つて居た時であつたから、早速召に應じて義景の家人に爲つた、文武兩道は云ふに及ばず、兵法にも達し、且は當時流行した鐵砲の術にも堪能であつたので、義景は二無き者に寵愛し、段々引き揚げて側近く召し使つたが、何うかすると、新參成り上りの身を以て、譜代の重臣老臣を蔑ろにする狀が見ゆる、それに眼光尋常ならず、智慧才覺人に勝れて、時には恐ろしい程の大言を吐くので義景も漸く疎外する心が出た、今迄は一にも重兵衛、二にも重兵衛と、日夜側を離さず信用し寵愛して居たのが、二三年の後には遠侍へ黜け、側近く召し寄せる事も無くなつた、重兵衛は面白くない、遂に暇を願つて、其の時近江から越前へ賴つて來た、細川藤孝に仕へ其の足輕と爲つたのである、原より才覺ある者であるから、遂には小人頭まで昇進したが、此處でも他の家來と氣が合はず、暇を取つて去つてから、緣あつて信長に仕へる身となつた、藤孝が重兵衛の姿を見て思はずも聲かけたは、斯る深い緣故がある爲であつた。

藤孝は重兵衛が當家に仕官するに至つた顚末を落ちも無く聞いて後、

『立ち寄らば大樹の蔭と下世話にも云ふ、良い禽は木を選んで栖む譬へ、此方が織田殿御内になつて忠勤を勵むは、此の上も無い歡び、公方樣も織田殿力に由つて京都へ還御あらせらゝ筈、逆臣三好松永の徒も自滅、天下の政治は公方樣御手に歸して、織田殿管領職とも爲らせられう、すればお身の出世も目の前、忠義一圖に御奉公申上げ、忠義の二字は正宗の名刀よりも身を護るは大事の寶ぢや』

『お心添へ忝うございます、緣あつて御當家に身を任す上は、一命を抛つて、此君侯の爲に盡し奉つる心ございます』と重兵衛は明瞭とした聲で答へた『殊に怨みある齋藤龍興を攻め亡ぼし、祖先の國土を逆臣の手より取返し下された御方、申さば明智一家の恩人でございます、此の君侯の爲に粉骨碎身の忠を竭すは、先祖への孝行、別しては恨みを呑んで明智城の露と消えた、叔父宗宿の菩提を弔ふ隨一の手術でございます』

『能く云うた、織田殿の武勇は宛ら野面を吹く春風に同じ、到る處靡き伏さぬ草木も無い、家來も數多い中、第一の出頭は柴田權六殿と見た、佐久間右衛門尉殿と見た、瀧川一益殿は智勇に勝れた大將と聞き及べど、折なければまだ對面爲ぬ、柴田佐久間兩家の技倆、お身の目から什麼と見ゆる』

『さればござります、目上に立つ方々を新參下賤の身が批判申し上ぐるは恐れあれど、お尋れとあれば申し上げる、御他言は無用、柴田佐久間御兩家、勇氣餘りあつて思慮足りませぬ、殊に柴田殿御當家第一の老臣とあつて、勢力をさ〳〵諸家中の上にあれど、心中より歸服して敬ひ冊く者幾人もございませぬ』

明智光秀

（四）

『ほゝ』と藤孝は考へながら『佐久間殿も同樣のう』

『佐久間殿は柴田殿の器を小さうしたに過ぎぬ、此れに論外と心得まする』

『次いでは丹羽、池田、森、佐々此の人々は什麼とある喃』

『皆夫々に光を以て闇を照す星と輝いてあられまする、中にも淺野彌兵衛殿は例し少き智慧者、池田勝三郎殿は軍上手の分別人、なれど重兵衛目からはさした器量とも見えませぬ』

『さらば木下藤吉郎は』と藤孝は詞を切つて『當時織田殿幕下の花方と噂さるゝ木下藤吉郎器量は喃』

『眞の猿智慧、取るに足りませぬ、彼奴根が尾張中村の百姓の腹から生れ、智慧才覺は聊かあれど、武士の魂はござりませぬ、鍬持つ手に太刀劔持つて、何の仕出來す事あるまいと御承知あらせられませ、幸ひに殿樣御寵愛を得て、一方の旗頭を承りあれど、その手の者に武士らしいは一人もござりませぬ、第一が蜂須賀小六、池田大炊助、青山新七、皆海賊野武士の成れの果、系圖正しき歴々衆と肩を并べて世に立つ者ではござりませぬ、詰まりは夜盗の張本、高の知れた小兒童でござります』

明智光秀

『お身は左樣に云ふが、藤吉郎采配には如何な金城鐵壁も立所に落つると云ふ、現に此の岐阜の城も織田殿大軍を以て幾度攻め立て押し寄せても、土壘に搖ぎなき處、藤吉郎手術を以て間道より忍び入り、一擧して本丸を突き動かしたと云ふで無いか、萬人の歩卒より、一人の智慧者が勝を得る世の中、左樣にまざゝ藤吉郎を貶し云ふ理由にも參らぬ、お身の僻目でないか』

『虎の威を假る狐でござります、信長公御前に立つて采配振ればこそ、藤吉郎手術も時には用を爲すことござりますれど、信長公御息かゝらずば、虎の附かぬ狐、山狼の餌食に爲るは知れ切つた事でござります』

重兵衛の返答は眞箇に傍若無人であつた、其身の眼中、柴田佐久間も無く、淺野池田も無く木下藤吉郎も無いのであつた、篝火は消え〳〵に爲つて、餘焰を重兵衛の半面に投げて居た、信長旗本の人

人を批評する毎に、怖しきまでに輝く二箇の眼は、爛々と異様に光つて見えた、藤孝は詞を改め、

『此の度の上洛、藤吉郎も扈從すると云ふ、眞實哺』

『什麼とござりませうか、野狐は何處に住んでも高の知れた獸でござります』

『お身、參るか』

『此の度瀧川殿手を離れ、信長公直々お指圖の下に、拔群の手柄、將來は明智の家名を起すべき首途、何處までも御供、忠義の實を現さう心ござります』

『善い覺悟ぢや、然し人を咒ふ者は、其の身の爲に陷穽を造り置けといふ諺もある、お身は自分の勇氣を賴んで、人の器量を蔑する癖がある、人と云ふ字は雙方から支へ合うて文字を爲す、己れ一人で事を爲す事難しき世の狀を、それと知らば餘りに人を惡く云ふ哺、餘りに人を侮り輕んずる哺、上は上として立て、下は下として愛み遣られば爲らぬ、早い例を引けば、お身が朝倉家を暇に爲つたも、其の廣言が禍したで無いか、藤孝の幕下に附いて、少しく頭を擡げやうとする時、他の者より邪魔せられて再び浪人の身と爲つたも、尙且上を凌ぐ其の心がお身の光を掩うたでないか、新公方樣御世となり、藤孝御側にある間は、お身の爲惡しうは爲ぬ、舊緣を云ひ立て、織田家へ縋つても、聽て一

城の主にする、然し其の心では爲るまいぞ』

三十 佐々木攻

(一)

信長は頻つて出陣の用意をする、越前の朝倉は義昭の催促に應ぜず、便々と時機を延ばした爲、遂に當家を賴み思召さるゝ事と爲つた、されば一日も早く用意を整へ、江州路を都に押し上つて、首尾よく亂臣を征伐した上、新公方樣をお迎へ申し上げればならぬとの心があるから、伊勢征伐は瀧川一益に任せ、岐阜の城は柴田勝家に留守居させ、自らは佐久間右衞門尉、木下藤吉郎、丹羽五郎左衞門、淺井新八郎それに美濃の三人衆稻葉伊豫、氏家卜全、安藤伊賀などを供に加へられた、明智重兵衞は誰の手にも附かず、三百騎を附けられて遊軍に立つべき旨を沙汰せられた。

諸事の準備が整つたので、八月七日江洲佐和山へ繰出す事と爲つた、由つて先づ使者を觀音寺の城へ遣はし、佐々木右京太夫承禎へ深き心を告げ知らせた、其れは此の新公方樣御爲、且は天下の人

心を鎮める爲、尾張伊勢美濃の武士を引率して、信長上洛致すに就き、其の方より人質を致し、路次の警護、道中の手配り、隨分馳走致すべき旨を云ひ入れ、七日の間に返答すべき旨を達したのであつた、七日の間に承知の旨を返答あらば、新公方樣天下一統の後は、貴公を以て都の所司代となさるべく、四百年來連綿として續いた佐々木家の世に出づる時は今、速かに御味方申し上げらるゝ方宜しかるべくと說いたのであつたが、承禎からは一向に返事が無かつた、此上は是非に及ばぬ、蹂躙つて通行せよと云ふので、九月七日信長は立政寺の書院へ出て義昭に御暇乞申し上げた、御前には藤孝を初め多くのお側衆伺候する、其の前へひたと坐つて、

『信長今日上洛の途に就き申す、近江國には佐々木右京太夫罷り在つて、觀音寺の城と箕作山の城に多くの人數を備へ置き、信長上洛を塞ぎ止めやう謀計もあるやに申せば、御方御武運を頭に戴き、忠義の心を胸に置いて驀地に參る上、如何なるものも懼るゝに足りませぬ、程なく江州一遍に打ち果し、御迎へを進じ參らする覺悟、當城には柴田勝家を殘し置き參らするで、信長同樣御隔意無く仰せ含められ然るべう心得まする』

義昭は賴母敷げに聞かせて後、側に居た藤孝へ何事かを囁かれた、藤孝は一膝乘り出して、

『深く貴殿を賴み申すべき旨の御上意天が下廣しと雖も、貴殿ならで天下の動亂を取り鎭むべきもの無きに由つて、やがて吉左右御待ちあらする旨の御上意、今日の首途を御祝ひとあつて御紋散しの鞍一具下し給はる旨の御上意、有難くお受けあらせ』

信長は謹んで御禮を申し上げる、祐筆は目錄を參らする、後には例の勝軍の盃あつて、多くの人人に深く遠き望みを囑されつゝ信長は勇ましく出立した、其の勢一萬餘騎と註される。

其の日は不破郡平尾村に一泊、翌日江州佐和山に着いて此處に二日の休息、佐和山へは淺井備前守の出迎へあつて、全軍の士氣大に振ふ、其處で十一日愛知川近邊に野陣を張つた、信長は軍上手、殊に野驅に妙を得て居るので、自ら陣頭に立つて采配を打ち振り、多くの手勢を勵まし〳〵瞬く暇に數箇所の小城を乘取つた、此の間絕えず側に從き添つて最も能く働いたは云ふまでも無く木下藤吉郎であつた、觀音寺の城は遠く森の小蔭に見え隱れ、其處を距る半里餘りの此方に箕作山の城、巍然として立つて居た、信長は其の二つの城の前に控へて、其の夜愛知川の畔り近く一泊した、明日は未明に箕作山に押し寄せやう手配り嚴重に見え渡つた。

（二）

觀音寺の城内では、昨日も軍議、今日も軍議、東江州の各地に散在する佐々木家の一門親族は悉く此處へ集つて、信長の大軍を如何にして禦ぐべきかを評定した、西江州は淺井の領地東江州は佐々木家の手に附いて、相互に勢力を持つて居た、淺井備前守が信長の婿と爲つて、專ら心を都方へ傾けろ、新公方の爲に一臂の力を盡さうとする如く、承禎は三好黨に親好を結んで、將軍義榮に志を運んだ。

曩に義昭が奈良より逃れて、承禎の館へ身を寄せやうとした時、水の如く冷かに待遇して逐ひ出す如く越前へ逐ひ遣つたも、畢竟當將軍家へ忠節を盡す心からであつた。

されば信長此の度の上洛に就いても、第一に承禎を味方に附けやうとしたが、遂に一言の返事も爲す、明かに敵意を示した、三好家に對する義理から、將軍家に忠節を盡す一片の義氣に外ならぬのであつた、信長は伊勢、尾張、美濃の勢を引率して攻め上ろと云ふから、其の勢ひは定めて雲霞の如くであらう、殊に新公方家を守り立て、先代將軍の爲に逆臣を討ち亡ぼし、兄君の仇を返し奉る義兵の

首途なれば、其の勢力も烈しからう、然し當家は當將軍に賴まれ奉つた義理がある、信長が新公方家を世に立て參らせやうと思ひ急ろと同じく、當家は當將軍の御代を永久に續け參らせたく願ひ居る、すれば雙方互角の戰鬪ぢや、信長如何に猛くとも永正の昔、大内義興、義稙將軍を守護して、京都へ攻め上つた勢ひにはよも過ぎまじ、義興は九州四國の軍勢を一手に集め、山陰山陽の武士共を驅り集め、四國三十四箇國を一手にして攻め寄せたが、其の時當家の義澄將軍の御賴みを容れ參らせて、佐々木家の勢を以て見事に勝を得た例もある、それもこれも將軍家の御爭ひ、新公方家は前將軍の御舍弟に當らせたまへど、一旦出家遁世あらせられたお身、私に還俗して、當將軍家を傾けんと爲させ給ふも、誰一人眞底より歸服する者あるまじ、信長は田舍育ち、都の事不案内とて、義理も究めず、正閏も正さず、猥りに大軍を動かしたれど、當家は兵庫頭季定公初めて武士の群に入つて、當城に據らせられて後、當代まで十八世四百餘年の月月を經、鍛ひに鍛ひ、練りに練つた膽魂、高が信長づれの足に蹂躙られやう事あるまじ、されど油斷すべきでない、命を的に合戰の忠を勵むは、自國安全の爲にして、且は當將軍家への忠節、隨分粉骨、命を輕んじ、義を重んずる心得、必然の忠を盡せと云ふのが、承禎及び其の子義賢の命であつた。

それを聞いて一統は畏まり奉る旨返答する。

『さらば和田山へ要害を構へ、箕作の城を修繕せよ。信長萬一攻め上らば、最も街道に近い和田山から人數を繰り出し、面も觸らず切つて入れ、其の戰半と見えた時、箕作と當城とより屈强の武士を繰り出し、三方より攻め打たば信長如何に强勇なりとも、軈て見苦しき敗北をするであらう』

それには城内の手配りが肝要であると云ふので、箕作の城へは吉田和泉守を大將として同新助、舘部源八郎を武者頭に、千餘騎の勢を附け、和田山の砦には山中山城守、田中治部の二人に此れも一千餘人を附けて嚴重に守らせ、觀音寺の本城には承禎父子自ら采配を打ち掉つて二千餘を引籠らせた、それと同時に佐々木家の持城と爲つて居る日野の城は、蒲生下野守定秀入道の守護、此の定秀入道は俵藤太秀郷の苗裔で、代々當國蒲生の地頭を勤め、佐々木家の旗本では隨一の名家と呼ばれたる武士であつた。

(三)

此れを初めに守山の城へは種村大藏、上阪主馬介、水口の城へは進藤山城守、建部采女正、石部の

城へは伊庭出羽守、里見内藏助、草津の砦には眞淵次郎、長光寺の砦には上阪兵庫助、近藤傳八郎、楢原の砦には長里隼人、楢崎の砦には信田監物、其の他それ〴〵に守護を命じ、總ての枝城十八箇所に旗本の勇士、少きは五六百騎、多きは千餘騎を籠らせて、兵糧彈藥の用意、弓矢鐵砲の手分け、殘る方もなく嚴重に整へた、今にも信長攻め寄せば只一擊に討ち平げて、近江源氏の腕前を見せて呉れうと、手具脛引いて待ち受けた。

九月十二日の朝霧まだ霽れやらぬ間、信長の陣中に、今日の軍評定が開かれた。佐久間右衞門尉は信長の旨を受けて一統に戰爭の手配を報告せる。

『昨日の戰は眞の小城を一箇二箇攻め落したばかりで、眞の合戰と云ふ程の事では無い、然し今日は大事の軍、此の一兩日が間に、佐々木家の土臺を根本から覆す御手術、和田山、箕作山の兩所に、堅固な要害構へあれど、此れは枝葉、幹は觀音寺の本城に在る、由つて枝葉は打ち捨て、まづ其幹を擊たせられる仰せ、幹を去れば軈て枝葉は自然に枯れる、此の儀皆が心得、それ〴〵手配り嚴重致さうぞ』

云ふ詞の終らぬうち、藤吉郎は膝を進めた。

『勿體なき御諚ござり申す、箕作山と和田山とは味方の御陣に最も近く、然も觀音寺と繋ぎの枝城、鼎の足の相接ぐ心を以て築き建てた處とは、誰の目にも見え申す、其の二箇の城を捨てて、それより奥の觀音寺に押しかけ、大切の軍なされうとは、日頃にも似ぬ御分別と見てござります、その時もし二箇の城々より打つて出で後を取り切る事あらば、此の合戰至極難儀とはござらぬか、觀音寺は佐々木家四百餘年來の居城、要害堅固とござります、力攻めにはなる間敷き義、是には藤吉郎存じ寄りの手段もあれば、まづ差し當つて箕作山の枝城を攻めさせられ新公方樣手始めの合戰、萬一味方敗北あらば、第一には御運の瑕ともなり申す、容易を攻めて手始めの軍に勝つは、味方の勢を增す屈竟の手術、枝葉を討ち取らば幹は自然に枯れて行く、此の儀御披露願ひ奉る』

憚る色もなく言上した、右衛門尉は目を光らせ、

『己れまた差し出を云ふ喃、以前の御方と、今の御方とは御身分に違ひがある、今にては尾張美濃伊勢三國の御主であらせられるぞ、斯樣な御大身を以て僅か小城をお攻めなされるは、牛を割く刀を以て鷄を割くと同然、世の胡盧と相成らう、斯樣な城を我れ等手にて一時の間に攻め落す、大將御手を煩はし給ふ程では無い』と得意顏に云つて退けるを、藤吉郎は隙さず、

『いや』と遮り、直ぐ後を次いで『斯程の小城、佐久間殿御手を煩はし給ふに及ばぬ、高が藤吉郎の手にも餘りござる』

『えい』と右衛門尉は鋭き眼に見て『お身が見事に、只一手で喃』

『御懸念ござりまする喃、三四時が間に必然手に入れ、お目に懸け參らする』

『口廣う云うた、彼の城は吉田和泉守大將として籠りある氣、然も和泉守は佐々木家身内にても人に知られた勇將、殊に場馴れた古兵ぢや、お身など若輩者の手に乘らうか、及ばぬ事を云ひ立てやうより、控へて一統の評議を待て』

然し藤吉郎は騷ぐ色も無かつた。

『佐久間殿お詞とも覺えぬ、藤吉郎一身を以て軍するではござり申さぬ、畏れ多くも新公方樣御威德を頭に戴き、總大將御名を以て向ふ處、鬼神もまた恐るゝに足りませぬ』

（四）

『況して斯程の小城、三四時に攻め落すは、左程力も要らぬ事、今にも我が君侯御諚あらば、手の者

引き連れ押し寄せて手柄仕る、萬一此の詞に相違あらば、熱田明神の御罰を受け、二度と何れもへお目に懸らぬ』

藤吉郎は覺悟の體で云ひ切つた、信長は先刻からの諍ひを熱々と聞いて居たが、此の時藤吉郎を儼と見て、

『お身は此の戰爭能く爲るか』

『聊か覺えございます』

『さらば箕作山討手の大將其方へ申付くる、三四時が間に攻めて參れ』

『畏まりございまする、さらば此れにて』

改めて一統に目禮して、潔く座を立つた、右衞門尉は、信長の御諚に背いても、藤吉郎を呼び止めんとする狀であつたが、其の隙も與へず信長は、直ぐ第二の問題を提出した。

『而て和田山へは誰が參る』

此詞を待ち難れた如に、緣外に蹲つて居た明智重兵衞は恭しく手を支いて、

『重兵衞へ仰付け給はりませう』

此不意の聲に驚いて一座の面々儼と重兵衞に目を注いだ、信長は眉を寄せて、

『誰ぢや』

『明智重兵衞光秀ございます』と右衞門尉は直答へる。

『重兵衞と哺』と信長は沈と視下し『瀧川左近將監に附いて、伊勢攻めに一二度手柄したと云ふ、重兵衞はお身歟』

『御意でございます、以後お見識り置かせられ』

光秀は沈着いた聲であつた。

『此方それに在つたぢや哺』

『先刻より御評議の次第、具さに承つたでございます』

『箕作山の城には木下藤吉郎殿討手に向つた、此の度は』と云ひ切つて、また詞を改め『和田山の討手、お身が引き受けると申すぢや哺』

『命を的に御奉公申し上げ度き望み、木下殿御手にて成る事、重兵衞手にて爲し得られぬ筈ございませぬ、平に御許しございませ』

『お身では爲らぬ』と信長は突き放すやうに『和田山は佐々木家大事の手城、山中山城守大將として守護しある、山城守は吉田和泉と一對の勇將、殊に人數一千餘騎もあらうと云ふ、其處に新參者の其方、器が輕い、爲らぬ』

右衞門尉は此時ずつと膝を進めた。

『御諚ではございますれど、木下殿も新參成り上りの者、重兵衞もまた同じ新參、弓矢取って何れに勝劣あるべしとは思へませぬ、殊に重兵衞は代々美濃の國主であつた土岐家の支流、系圖正しき武士でございます、筑前の朝倉に仕へて、一方の旗頭をも勤めた覺えの者ございます、木下殿爲す程の事、重兵衞の手に爲し得られぬ事ございませぬ、萬一仕損じ、見苦しき敗北取らば、斯く申す右衞門尉引き受け御名を傷ける事致しませぬ、諸事は右衞門尉に御任せ下さる御心にて、重兵衞お執り立ての程幾重にも願ひ上げるでございます』

右衞門尉は、日頃心善からぬ藤吉郎の頭を抑ふべく、重兵衞の器量を見込んで、信長に推擧の勞を取るのであつた、信長も重兵衞が人に勝れた手並を持て居る事は、先年以來それと無く目を注けて居た、又人の風評にも聞いて居た、今日を手始めに、軈ては天下の志をも爲し遂げうとする折柄、一人にても頼母敷き大將を手に入れ度い心があるので、此れを機會に重兵衞の腕を試し見やうと云ふ心が起つた、果して藤吉郎と智勇を爭ふ程の者であるか、果して玉か、果して瓦か、此の一擧に見定め置いて、後日の役に立つべき者と決らば、折を見て引き上げも爲やう心が起つた。

(五)

信長は面を和げて、

『お身の引き受けとあらば、重兵衞に討手の役吩咐けぬでない、然し新公方樣手始めの軍、大事の瀬戸、仕損じあつては味方一統の氣も折れる、此の義心得居らう喃』

『胸の底は曇りませぬ、忠義の二字を左右の手に握つて、新公方樣御爲に懸命の軍して、木下殿に負を取る事致しませぬ、佐久間殿お執成し、此の上の歡びございませぬ』と重兵衞は思ひ込んで云つた。

『さらば其の方に云ひ附くろ、藤吉郎に後れを取らぬ樣、和田山の砦に向へ』

『畏まりございます』

光秀は面目身に餘つて、心嬉しく其の場を退いた、後の軍議は木下明智の軍の模樣に由つて、信長

自ら觀音寺の城へ馬を進める手筈に決した。

藤吉郎は自分と重兵衛との器量がこの合戰で試みられようとは知らず、手配、攻口、總ての事を竹中半兵衛に謀つて後、手勢一千餘騎を三段に分つて、箕作山へ攻め寄せた。

竹中半兵衛は常に藤吉郎の智慧嚢であつた、藤吉郎の仕事に半兵衛の智慧の添はぬ事は無かつた、藤吉郎が半兵衛を得たのは、龍に翅を添へた如くであつた、半兵衛の謀計を用ひた爲、藤吉郎の身に何れ程光を增したかも知れぬ、藤吉郎は美濃落城の後、三千貫の加增、それから又廣次知行を殖されたので、今は五千貫ほどの大名と爲つて居た、其の內千貫を半兵衛に宛ひ美濃岩手の城に妻子眷屬を留守させて、立派に父祖の名を繼がせた、半兵衛も藤吉郎の志の渥いに感じて、懸命に奉公の忠を盡した。

藤吉郎が半兵衛を參謀として畫策した次の日の戰略は、まづ土地の案內を能く知つた野武士を寄せ集めるにあつた、豫れて江州路を經て都へ攻め上る信長の心中は、疾より知つて居たので、如才無く此の邊へ腹心の家來を出し、それと名の知られた野武士鄕士に、まさかの時の用に立つべく連絡を附けて置いた、梶田隼人、蜂須賀小六は、原が同じ野武士であるので、雙方から知られて居る者もあつた、其傳手で思ひの外、味方に附く者も多くあつた、藤吉郎が今日箕作山を攻める時には、百人近くの野武士が加はつた、其處で梶田隼人、稻田大炊助、青山新七、永井半之亟、堀尾茂助、河口久助、青山小助の七人を大將として、自分が本陣を出立する前、早く箕作山の後へ廻らせ、其處に沈と忍ばせ置いた、さうして大手の門に懸つた時、一發の烽火を擧げる、それを合圖に斯う〳〵せよと、諭して置いた、一同は忠義初めに手柄を顯はさうと云ふ意氣込みで、忍び〳〵に山の後へ廻つた、天は全く明けきらぬ、殘月仄かに西の方に閃めいて、木立を深く微かな光を投げて居た、然し此邊の案內は能く知つたものばかりである、少しも遲疑せず、間道を廻りながら背後の山へ登り着いた、さうして此處から城中を瞰下すと、宛ら岸から淵を望むやうであつた、百餘人の野武士に二百餘人の武士が附添つて、何れも木蔭に身を潛めた。

藤吉郎は正面から攻めかゝつた、箕作の城には吉田和泉守、豫て期した事なれば少しも騷がず、城內の武士を要所々々に配つて、弓矢鐵砲其の他の柄物を用意させ、敵勢間近く攻め寄らば思ふまゝ戰して、近江源氏の名を落すなとの意氣込み、素破と云はゞ一時に火蓋を切つて放すやうに、油斷なく鐵砲の銃先差し向け、息を詰めて待ち受けた。

（六）

藤吉郎はまづ愛知川に沿つた在々に火を放す、西風烈しき折なれば、火勢忽ち燃え揚る、それと同時に天地も崩るゝばかりに鯨波を揚げて、えい〳〵と進み寄る、城の内では斯くと見て、素破こそ敵は間近に寄せた、禦げや防げ、近江源氏の名を殞すな、此の城は右京大夫様數年の間御心を罩めさせ、御造營あらせられた名譽の出城、織田勢の足に蹂けられては、末代まで恥辱、早打て、と云ふ儘に鐵砲を釣瓶打つた、されど藤吉郎の手の者は、彈丸の達かぬ限りに歩を停めて、只『えい〳〵』と鯨波を揚げるばかりであつた、城中の者共は斯くと見て、扨は織田勢此の銃先に堪り難れ、一歩も進み得ぬと見えた、此機を外さず一齊に打つて出で、見る〳〵間に蹴散らせと、血氣に逸る武士共口々に罵るを、和泉守は押し止め、

『油斷無き敵の仕方、遠き謀計あるに極つた、斯くして味方を疲らし、其の虚に入つて事を爲すはある慣ひ、今は音も立てる喃、一人も門外に繰り出すな、持場々々を大事に爲よ、一度打ち出した彈丸は再び戻らぬと合點せよ、矢丸には限りがある、敵の勢は幾千騎と數知れぬ、此の儘に持ちこたへよ』

と口々に告げ知らせた、藤吉郎の陣中には、時々鯨波を揚げて城の武士を誘引き出さうとするが、城内は寂と鎭まつて、物音さへも聞えなんだ。

時分は可しと思ふので、藤吉郎は采配を颯と掉る、五色の旗は眞先に押し進める　稻葉山の捷利以來、早や三つ程も數を增した瓢の馬印は、次第々々に明けて行く東の空に照り添うて、味方の勇氣に輝き渡つた、瞬く隙に城近く押し寄せて、鐵砲を打ちかける、城内にては、鬼神にても斯うはあるまじと思ふ程、早濠外に進んで來た、寄手の手際に驚いて、一旦下した鐵砲を取揚げる、弓に矢番ひ、應戰の準備に懸つたが、不意を食つて周章へ騷く光景、見苦しくも無慙であつた、藤吉郎はそれと小六へ下知を傳へる、小六の率ゐて居た二百餘人の武士は、手に手に一本づゝの材木を擔いで搦手へ押寄せる、何んの爲に材木を持たせたかと云ふと、此れは城の後に井樓を組み上げる爲であつた、最初は何の用にするとも心注かず斯程の戰爭に、材木を擔がせて、什麼を爲さるお心かと怪んだ者もあつたが、小六の口から此れにて井樓を組み上げよと云はれた時、初めて藤吉郎の深慮に感じた、瞬く隙に井樓は三箇所まで組み上る、それへ昇つて城中を瞰下すと、手に取る如く隅々隈々までも見透かされた。

藤吉郎が三箇に分つた軍勢は、斯くて箕作山の三方から取圍んだのであつた、承禎が四五年の間心を罩めて造り上げた城の礎も、早く此處に搖ぎ始めた、藤吉郎は此等の用意の成る間、鐵砲を打ち掛けて、敵の勢を此方へ引き寄せる事にのみ力めた、天は明け放れる、眩い程の朝日の光は曈々と照り渡る、時分は可しと、合圖の烽火を上げやうとする處へ、飛ぶが如くに驅付けたは小一郎であつた。

『一大事でございます、兄上まだ御存じもある間敷く心得、宙を飛んで御注進申し上げまする、新參者の明智重兵衞殿、佐久間殿お執成し、信長公仰せに由つて、和田山の攻め口を引受け、只今御出陣なされございます』

藤吉郎は此を聞いて意外に感じた、重兵衞の事は、かねてより其の人と爲りを知つて居る、其の器量人に勝れた事も知つて居る、原は美濃の國主土岐の一族であつた事も、永く朝倉家に仕へ、後細川藤孝に從ひ、軈て浪人して文武兩道を究めた事も知つて居る。

（七）

同時に彼の眼光の容易ならぬ事も知つて居た、彼の心の底には上を凌ぐ恐ろしい影の閃いて居る事

もまた能く知つて居た、時の勢ひ止むを得ず、今は信長公お に手附いて、賤しい地位に甘んじては居るが、將來は一國一城の主と爲り、更に進んで天下の政事をも手に握り、先祖の家名を再興しやうと望み居る事も推量して居た、それが佐久間右衞門尉の執成しに由つて、和田山の攻め口に向つた事、意外にも意外の事であつた、箕作山と和田山とは、共に觀音寺の出城で佐々木家左右の枝である、箕作山を三四時の間に攻め降し、其の餘勢を以て一擧和田山を屠らうとは、藤吉郎が最初からの謀計であつた、果して小一郎の注進した如く、明智重兵衞に和田山の攻め口をお任せあつたが眞箇なれば、自分の謀計は其半を壞されたと同じである、それは忍ぶとしても、幾年の間御手に附き、草履取りから苦勞艱難して、漸く今日の地位を得た藤吉郎と、させる手柄も無い新參者の重兵衞とを、同じ秤に量げられたも同じである、今日の御處置は忍ばれぬ、重兵衞も和田山の合戰に捷利を得て、其の城に立て籠る山中山城守、田中治部の兩大將を討取らば、其の手柄は自分と同じ事である、彼は必ず出世爲やう、右衞門尉後楯と云ふ上は、柴田殿もまた同じく彼をお庇ひなさるに違ひ無い、信長公御爲に懸命の働きを爲し、新公方樣手初めの合戰に、少しの瑕瑾も附けまじく思案して、疾くから謀計を運して居た苦心も、半は水の泡と爲つて、口惜しくも彼れと我れとの手並を試みらるゝ場合と爲つた、

彼れと我れとの貫目を度られる事と爲つた、藤吉郎は心中不平に堪へられぬのであつたが、色にも現はさず頷いて、

『重兵衛は覺えの武士ぢや、必然手柄せう、然し人數に事を缺きはせぬか、重兵衛手には三百餘人をお預けに爲つたばかりぢや、和田山は新規に築かれた小城なれど、要害は堅固、殊に右京太夫の一族、山中山城守籠りある、三百人の人數で捷利得る事、難くは無いか、それが懸念ぢや』

『その義懸念御無用でござります、明智殿手勢少きに由つて、佐久間殿御手から五百騎を貸させられでございます、信長公お旗本から三百騎を添へられてございます』

『呵』と驚いた如に云つたが、直ぐ鎭めて『佐久間殿御加勢なされたか、御前旗本の衆をお遣はし爲されたか、すれば事無う捷利を得やう』

『兄上御無念とは思召しませぬか、明智殿は御奉公間も無き新參者でございます』

『武士に新參古參は無い、それを云へば藤吉郎も新參ぢや、十年前には信長公お草履を摑んだ成り上り者ぢや』

『左樣とはございませうも、今日までの御苦勞は、兄上のお身に清い光を添へて居りまする、明智殿

には此れと云ふお手柄もあらせられぬ、伊勢御征伐の砌り、瀧川殿お手に附かせ、二三箇所の合戰に、人の目に注く働きをなさせられたとは申せど、兄上御手柄に比べては、九牛の一毛にも足りませぬ、兄上松ならば明智殿は杉苗、兄上大石ならば明智殿は小さき砂利、兄上大河なれば明智殿は小川の流れ、然もその明智殿を和田山討手の大將に爲させられた、結句兄上と同じやうの御扱ひ、勝負は什麼とござりませうとも、差し當る無念、竹中殿も頻つて御立腹のやうに見え居りまする』

『それを云ふ喃、誰の手に打ち取るも皆新公方樣への御奉公ぢや、御家來衆數々多き中より、特に重兵衛をお採りなされたは、信長公手並みを賴母敷う思召す處あるからぢや、それを兎や角評議致すは、藤吉郎他人の功を嫉むやうで心苦しい、武士は命を捨て、敵を討つを則とする、他を顧みる遑無い』

（八）

藤吉郎は思ひ決せる如くまた云ふ。

『我等當城攻口を承り、只今此れへ寄せ參つた、すれば他は何うあらうと、それを心にかけは致さぬ』

『とはござりませうも、餘りと云へば餘りのお處置と、畏れながら信長公御心恨めしう思ひまする』

小一郎は兩眼に涙さへ浮べて云つた。

『他の事よりも我が事、まづ此の城の攻め口を見、藤吉部謀計の思ふ壺に嵌るを見』

小一郎が尙何をか云はんとする隙も與へず、藤吉郎は忽ち采配打ち掉つて『進め、進め』と下知をした、重兵衞に對する不平は、一圖に敵の攻め口に向つて發した、眞先に進む鐵砲組の足輕は、隙間も無く鐵砲を打ちかけ、次に控へた弓手の者は雨霰の如く矢を射出す、其の間間に鯨波をどつと揚るけ、城の中では、大手門に主力を集めて藤吉郎の多勢に應じた。

斯くする事半時餘り、時分は可しと合圖の烽火を颯と揚げた、此れと共に井樓の上に登つて居た蜂須賀小六の手の者は、交る替る城内へ火矢を射かける、恐ろしい火の雨は、本丸二の丸役所々々に撒り懸る、流石の城兵もこれに驚いて、あはやとばかり周章へ騷ぐ間、後方に伏せ置いた野武士の百騎、これにつけられた二百餘人の者、一度に起つて犇々と肉薄した、城内の混雜目も當てられず見えた處へ、豫ての計略、山上から城を見かけ、大石小石を投げ入れた。

大手門の外には雲霞の如き敵勢押し寄せ、一寸の隙も無く鐵砲を釣瓶打ち、井樓の上からは石火矢、

後方の山からは大石、小石、それが雨霰の如く降り懸る、城内は三方に敵を受け、然も火矢大石、鐵砲の攻道具に掻き亂されて、上を下へと混雜する、その間に火矢の火が、秋風に乾き切つた簾庇に燃え移る、朝風に煽がれて焰々と火の手が揚がる、鐵砲火矢大石小石を敵とする上に、更に猛火を敵とせねばならぬ、城内の苦戰は容易の事でもなかつた、藤吉郎は此の光景を篤と見透し、時分は可しと思ふので短兵急に大手門へ攻めかけた、命知らずの若武者共は、濠を乘り越え門際近く驅け寄つて、鐵の槌を振り翳し力任せに扉を破る、流石の和泉守も、當城の運命早や此れまでと觀念した狀、打ち漏らされた武士を一所に集め、搦手の一方に血路を開いて、觀音寺の本城へ退却した、佐々木家の手と頼んだ箕作山の城は、藤吉郎が豫て約束した通り三四時の間に落ちて、二丸本丸の處々に餘焰白く燃え揚る間、五色の旗は勇ましく樹てられた、此の捷軍に尙一箇數の殖える瓢の馬印は金色の光を放つて、高く勇ましく城内に輝き渡つた。

此の事忽ち愛知川の本陣へ注進ある、藤吉郎の手並は、信長かれてより知つて居れど、斯程迄に逸早く彼の手に落ちやうとは思ひ懸けぬ事であるので、滿面に自然の笑が含まれた、それと同時に和田山の城外に鐵砲の音が聞えた、陣鉦太鼓の響が物凄く勇ましく鳴り渡つた、明智重兵衞の手の者が此

處に合戰を開いたものと見えた。

藤吉郎の旨を受けて、箕作山落城の事を信長の本陣に注進したは弟の小一郎であつた、信長は傍近く呼んで、藤吉郎の働き群を抜いて、天晴武士の亀鑑と爲るべき旨を沙汰せられた、小一郎は面目身に餘つて有難く頭を下げる、すると側に居た左衛門尉は口を添へ、

『明智重兵衛總大將の仰を受け、和田山の城に向うた、今合戰最中と見える、重兵衛も覺えの者、敵に後を見する事致すまい、然し彼の城には山中山城守田中治部二人大將として籠りあれば、合戰難儀に及ぶまじきに限らぬ、由つて……』と詞を切つて、

（九）

『藤吉郎既に箕作山を攻め落し、手勢皆休息致しあると思はれる、匆々重兵衛へ助太刀、和田山攻めの後卷を致すやう、お身から具に申し傳へ』と嚴に云ひ渡した。

小一郎は不平で堪へられ無かつた、兄藤吉郎と新參者の重兵衛とを同じ樣に取り扱はれるさへ無念の極みとあつたものを、今また和田山の攻め口に向つて居る重兵衛の後卷をして、其の勢ひを援けよ

との詞を聞いたのであるから、胸中は湧き返る如く涙を打つた、信長の御前で無くば云ひたい丈けを云つて退けやうと思つたが、兄の考へもある事、此處で荒立てゝは一門の爲なるまじきを考へ、兎も角仰せの次第を兄藤吉郎へ申し傳ふべき旨を答へ、聽て御前を退いた、和田山に起る鐵砲矢叫びの聲は次第々々に烈しく爲る、小一郎は待たせ置いた栗毛の馬にひらりと乘つて、一鞭當てる間も無く飛ぶが如く箕作山へ歸つて來た。

さうして左衛門尉の云つた口上を藤吉郎に傳へると、藤吉郎は只頷くばかりであつた、朝日の如に輝き渡る目を開いて、手に取る如く聞ゆる矢叫びの音する方を見遣りながら、詞はなく輕く頷いた。

『兄上』と小一郎は呼び掛け『後卷爲されまするか、重兵衛の後卷爲させまするか』

『總大將仰せ背きはならぬ、小六を呼べ』

『いや』と小一郎は遮つて『總大將御口より仰せられたではござりませぬ、御側に附き添ふ佐久間毅から……』

『存ずる次第もある、何事も云ふ喃』

と藤吉郎は抑へつけて『小六を呼べ』

小一郎は其の上返す詞も無く、小六を呼んだ、小六は直ぐ出頭する、藤吉郎は側近く招き寄せ何事かを囁いた、小六は心得て引き下る、新しく藤吉郎の手に附いた野武士の百騎は、小六と共に何處へか出て行つた、後は城内の手配り、門々の堅め、先刻の火災に燒かれた後の始末、燒け殘つた本丸の廣書院に竹中半兵衛、堀尾茂助、稻田大炊助、杉原孫兵衛などを集めて、まづ勝軍の酒を汲んだ、和田山の合戰味方不利とあらば、直に援兵を繰出すべき用意を整へて、物見の者は後方の山から和田山の軍の模樣を見物し、時々刻々戰況を知らせて來る。

その報告に由ると最初は寄手の者優勢であつたが、城の大將、山中山城守三百餘騎の手勢を引き具し、大手の門を八文字に開かせて、決死の態物凄くまた勇しく、手に〳〵鎗薙刀を振り閃かし、一度に喚いて明智勢の眞中へ突き入つた時は、さしもの寄手も突き捲られて、五六丁が程引き退き、其處にて僅に敵の猛勢を食ひ止め居たとの事である、その注進を聞いた時、藤吉郎は折敷の上に在る土器を取り上げて、

『お味方勝利ぢや、重兵衛の手柄は見えた、祝の盃今一獻爲う』

此の合戰の供をして藤吉郎の側近く仕へて居た、孫兵衛の長男大藏は精悍しく酌に立つた、蔑助は

唐突に立ち上つて

『某狀況を見屆け參るでござりませう』

云ふが否驅け去つたが、程も無く歸つて來て、

『如何樣お詞に違ひませぬ、和泉守の手勢手痛き合戰、寄手の者散々に打ち惱まされて見えたる處、城内遽に騷がしく、此處彼處に火の手揚つて見えまする、内通の者どもあるか、又は返り忠の者にても現れたか、普通の光景とは見えませぬ、斯くと見て寄手の者勢を盛り返し和泉守の三百騎を取り卷いて、一騎も漏らすまじと攻め立てる、今が合戰の眞最中、然し勝負は七三と見えてござります』

（十）

藤吉郎は半兵衛と顏見合せ、

『博奕は重兵衛の勝と爲つた、和泉守可惜勇士ながら、佐々木家の運命傾きたれば是非も無い、早やこれ迄ぢや』

人を傷む聲の底に濕りが見えた、すると又注進の者が緣外に驅け入つた。

『和田山、明智殿手に落ちてござります、桔梗の紋附いた旗印は彼の砦の内に樹てられてござります、山城守は田中治部諸共、打ち漏らされた手勢少しばかりを引き連れ、觀音寺の城を指して落ち延びたやうに見えまする』

手に取る如く云ひ捨てゝ忽ち其處を去るのであつた。

半時餘りを過ぎると、先に野武士を引き連れて、何處とも無く立ち去つた峰須賀小六が歸つて來た、小具足の袖草摺に生々しい血汐が附いて居る、莞爾と笑ふ顏の間にも怖ろしい殺氣が殘つた、藤吉郎は見るより、

『謀計圖に當つた氣味、まづ重疊、重兵衛も此れで面が立つ、詰りは御方御武運に協はせられる處ぢや、新公方樣手初めの合戰に、瑕も附けず終つた、何とも芽出度い』

『仰せ付けられた通り、豫て作り置いた敵の袖印役に立つて、山城守大手の門を出た後へ、ぬく〳〵と紛れ入り、城方の者と見せかけ、砦の內の要所々々に火を放ちござります、折柄西風、此處彼處に燃え揚る火の手には、如何な山城守も敵し難れ、周章へて引返さうとする後から、寄手の人數蝟地に攻めかけ盛り返し、難無く城を乘取つてござります』

小六は明白に物語つた。

『而て山城守は喃』と藤吉郎は敵ながらも惜しき勇士の始末を訊れた。

『命全う觀音寺の城へ落ち延びたやうにござります』

『さらばお身達、重兵衛には顏を合さず、直ぐ之れへ歸つた喃』

『山城守落去を見屆け、速かに手勢を集め、搦手より城方の人數本城へ引き上げる體に見せかけ、一人も傷けず、此れまで歸り着いてござります』

『まづ可し』と前に在つた土器を取り上げ『一獻參れ、香り良い酒ぢや』

『御諚默し難く、今日の援軍してござりまするも、申さば緣の下の力術、殊に快よからぬ明智重兵衛助勢と云ひ、胸の底何となく澄み難れてござります』

『初めて承知、峰須賀殿重兵衛の助勢に參られた喃』と茂助は驚いて聲掛けた。

『殿は只信長公に忠節を思召す外は無い、信長公御諚とあれば、水火の中にも進ませられる、明智重兵衛假令新參者にも爲、信長公御家人として和田山の攻口に向ふ上は尙且味方の一人、敗北させては ならぬ、萬一の事あつては、新公方樣お手初めの合戰に瑕瑾が附く、それを思召して、我等へ祕密の

計謀を授けさせられた、明智重兵衛今日の捷利は軈て殿の御差配、我等加勢に參らずば、山城守の太刀先に當り難れて敗北は目の前、眞箇に危い事であつた』

小六は藤吉郎の心の潔く水の如きを說き明した。

『ぢやが兄上、斯程のお志を重兵衛辨へ居らうか喃』

小一郎は眉を蹙めて云つた。

『眞箇に其事、重兵衛己れの手柄にして、殿の御厚意を信長公御前に披露致す事あるまじと心得ます る』と小六は其事ばかりを懸念するやうに『すれば我等の働きは埋木、重兵衛の身に光り添へる爲、懸命の合戰致すのは本意ござりませぬ』

（十一）

『小六一命は殿にさし上げござりまするで、いか樣の骨折致さうとも毫厭ふ處ござりませぬ、縱し一生の間此の事人に知られずとも、殿に對する忠義を思へば、聊かも恨み思ふ事ござりませぬが、殿一言の吩咐を能く守つて、敵の城内に紛れ入り、思ふ儘に働いた野武士共の手柄、また土の下に埋れる

は氣の毒と、只そればかりを思ひまする』と藤吉郎を視上げるのであつた。

『手柄は日ぢや、日を蔽ふ雲はない、一旦は埋木と成つても、軈て信長公お目にも入る、雲霧れて日の光見ゆると同じぢや、懸念する喃』と藤吉郎は抑へるやうに云つたが『假令信長公御耳に達かずとも、藤吉郎能く存じ、弓矢八幡能く御存じ、別しては我等一家を御護らせの熱田明神、高い空より御照覽ぢや、少しも恨むな』

『其のお詞承つて、胸の底晴れた心、昨日までは野武士の生涯、殿の御手に附く上は、我等とて同じ御家人、其お盃頂戴、一統にお流れが遣はしたい、御許されございませうか』

『有理の事、それ』と小一郎に目配せする、小一郎は心得て次に下つたが、三寶の上に鳥目を山の如く積んで持つて出た『當座の褒美ぢや、今日の手柄に較べては、眞の九牛の一毛ぢや、なれど藤吉郎の志、やがて此の銅錢より黃金の光輝き渡る時もあらうで、一統へ頒ち取らせ、確と申し付ける』

『御懇の御意、お流れ戴くに此の上も無きお下物でござります』

小六は忝しく受け戴いた。

『和田山當城、信長公御手の許に靡き伏す上は、一刻の御猶豫無く、觀音寺の城へ御手勢を差し向け

給ふ手順とあつた、重兵衛も參らう、我等も今より愛知川の御本陣へ參り、御評議に加はらうぞ、當城は堀尾茂助、小一郎共々確と留守せ、佐々木は四百餘年來の舊家、洪恩を思ふ者、主家の爲、如何な手段致さうも測られぬ』

一統は委細承る旨を返答する、藤吉郎は二三十騎を從へて、信長本陣へ驅け附けた。

折柄明智重兵衛も、今日の軍拔群の手柄した得意の色を面の上に漲らせ、駿馬に鞭ち今しも此れへ到着した處であつた、信長の御前では、家老重役星の如く集つて、觀音寺攻めの評定を凝らして居た。

藤吉郎は案内に從れてずつと通る、其の後から重兵衛もまた伺候した。

信長の滿足は『大儀〳〵』と繰返し云ふ詞の間に表はれた、佐久間、丹羽其の他多くの人々は、一齊に名譽の兩大將へ目を注いだ、二人は面目身に餘つて見えた、中にも重兵衛は、信長の配下で軍上手の名を博つた藤吉郎と同じ手柄を收めて、新參者の器量を見せた自慢の鼻が蠢いた、佐久間右衛門尉は頼れるばかりに笑を見せ、

『重兵衛手柄であつた哺、和田山の砦新普請とは申しながら、山中山城守、田中治部兩大將千餘騎の武士を以て、堅固に構へた要害、一時の間に攻め落した手際、人間術とは思はれぬ、殆ど感服、日頃の手練顯はれ、目出度い』

重兵衛は軀から光映す如く一搖り搖つて、

『此れと申すも、皆總大將御威德に由る處、一は佐久間殿御加勢の賜物、重兵衛手柄ではござりませぬ』と謙讓つて云ふのであつた。

『それに引替へ藤吉郎箕作山の城落すに、三時餘り四時近くも掛つた、承禎數年の心を罩め築き上げた城とは申せ、猫の額程の小城、人數も和田山と同じ千餘騎、それを攻めるに斯程の暇要る、日頃の手並にも似ぬ事ぢや』

右衛門尉は嘲弄ふやうに云つた。

（十二）

それでも藤吉郎は爭はぬ、信長は其處に在る一口の短刀を取り寄せて、

『今日の勝軍を忘れぬ爲、藤吉郎へ遣はす』

藤吉郎は謹んで頂戴した。

『重兵衛も手柄者ぢや、之を遣はす』

と定紋附いた印籠を下された、重兵衛も恭しく頂戴する。

『今日の手柄雙方に甲乙無い、然し重兵衛はお身一人の手柄とは思ふまい喃』

軟かに、咽喉を絞めるやうな聲であつた、重兵衛は詞も無く平伏する、藤吉郎を最屓の人々は、此の一言に胸の底を清うした、流石は總大將、人の見ぬ奥底まで見らせられる、御眼力の程驚き入る外無いと目引き袖引きした。

『そこで』と信長は藤吉郎を沈と視て『觀音寺の城攻ぢや、軍評定罷り在る、箕作和田の城手に入つた勢に乘り、一擧して攻め落さうとぢや、お身の思案何うある喃』

『恐れながら明日は總大將、彼の城へ御動座あらせられるに極つてござります』

『又しても左樣な大言、箕作山を攻めるにさへ、四時近くも手間を取つた、觀音寺の城は佐々木家十八代、根ざし深く築いた城ぢや、一時や半時にて御手に入る筈は無い、殊に佐々木左京大夫承禎、子息義弼幾千騎の勢を集め、此處を先途と防ぎ矢する體も見ゆる、其れに明日は彼の城に御動座など、思ひも寄らぬ事申し上げ、抜き差しならぬ破目と爲らば、お身は何を以て御詫を申し上げる喃』

右衛門尉は詰るやうに膝を向けた。

『聊か思ふ處あつて、今の如に申し上げた、明日は必然御動座、彼の城御手に入るは火を見るより明ぢや、箕作和田二箇の枝城、僅の間に落城とあつて、觀音寺の本城根ざし動かぬ筈は無い、藤吉郎申す事相違あるか、明日の樣を御覽ぜられ』

『見やう〳〵』と右衛門尉は氣色ばんで『左程に云ふお身の手並を見やうぞ』

一座は俄に殺氣立つた、藤吉郎を最屓の人々は悉く藤吉郎に附き添ひ、右衛門尉の鼻息を伺ふ者は、悉く右衛門尉の味方をして、一座は颯と二つに分れた、信長は隙間も無く問ひ掛ける。

『藤吉郎今の詞、事も無げに聞えた、攻め道具は火矢か、鐵砲か』

『鐵砲の用ござりませぬ、一枚の舌、それも左程の勢は要るまいかと推量、承禎父子、父祖代々の城に籠り、御方大軍を引き受け、城を枕に響れある最期遂げる武士ではござりませぬ』

『おゝ』と信長は膝を拍つて『乃公も左樣に存じあつた、早や落去か』

『今宵を過しませぬ、藤吉郎箕作の城より油斷無く物見、左右御往進申し上げるでござります』

『なれど承禎手の中に、少しは骨のある者もあらう、假令承禎落去するとも、由緒ある彼の城、無慙

無慙我等が手に渡す事あるまい、其の義は哺』

『舌の用そこにございます、承禎落去の後は、忠義一圖の者後に殘り、御方大勢を引き受けて、最後の合戰致すは必定、さありては彼の城如何樣に成り行くかも分りませぬ、由つて速かに使の者を差し遣はされ、一應の理義を御說き聞かせ爲させらるゝ外あるまいと心得まする』

『我が心を得つる、先刻よりの評定、樣々の意見もあつたが、それに心付く者一人も無かつた、承禎父子觀音寺の城を退去の後、命懸けの留守居するは、彼の身内で誰あらう、蒲生、種村を始めとして腹心の家來、それ〳〵枝城に籠り最後の忠義を盡すと云ふ、すれば承禎膝下には此れと云ふ者あるまい、山城か又は和泉か、お身に存じ寄り無いか』と信長は又尋れた。

（十三）

藤吉郎はすぐ答へる。

『三雲新左衞門ございます、佐々木家の棟梁と豫てより噂高き新左衞門ございます』

『さらば其の新左、城に止まりあらうか哺』

『其の外に心當りございませぬ、今宵は此れにて御休息、明日の朝明け切らぬ內、藤吉郎より參らする注進の口上を聞かせられ』

『さらば委細をお身に任す、尤も出陣の手配り、素破と云はゞ此の度は親ら眞先き驅けて進む、觀音寺の城手に入らば、出發の時お約束、新公方樣を此れへ御迎へ申し上げねばならぬ、能く致せ』

『心得てございます』

藤吉郎は勇ましくお受けをした。

御陣には幾十人の大將分詰め居たれど、信長の目からは、藤吉郎只一人が星であつた、外には人無きが如く藤吉郎を信ずる事深かつた、流石の右衞門尉も、藤吉郎の信用を破るべき口上を持たなかつた、第一の出頭人たる右衞門尉が口を噤んで居るのであるから、其の他の者誰一人異議を挾む者も無い、先の程より議論四方より起つて、容易に決着する處なかつた評定が、藤吉郎に由つて直ぐ決した、重兵衞の身から輝き渡つた光も、陽炎の倏ち立つて倏ち消ゆるかの如くになつた。

評定の席果てゝ後、信長から骨休めの酒を下されて、一同は勝軍の盃を擧げつゝ、銘々の陣所へ引き取つた、觀音寺山の一角には殺氣今も充滿て、其の四邊一帶の秋の暮は、物凄い夕陽の色に包ま

れた、藤吉郎が箕作山の城へ歸つたは、夕陽のちり〳〵落ちる頃であつた。

同時に觀音寺の城内に人馬の動く景色が見えた、鬱蒼と生茂る森の中を、多くの武者が右往左往するやうであつた、此處から觀音寺まで一里足らずの道程があるので、それの能く見える筈は無いが、力なく照る陽の間に、其の光景が自然と現れた、藤吉郎は小高き丘の上に立つて、洸と其の方を凝視めて居た。

藤吉郎の側には例の大藏が扈從して居た。

『彼れを見、城中に人の騷ぐ影が映す、承禎父子本城を打ち捨て、何處へか落ち行くと見えた、南西に勢の續くは甲賀か、守山の城か』と云ひながら手を翳して視て居たが、やがて大藏を顧眄まつて『此の事愛知川の御本陣へ注進申せ』

『畏まつてございます』

今年十五の秋を迎へて、二三度は合戰の場にも出た將來頼母敷き若者は、委曲を心得て驀地に驅け出した、其の後に扈從したは小一郎であつた。

『小一郎か』と藤吉郎は大藏を見送つた目を放さず『觀音寺の城内彼の樣に騷ぎある、四百餘年打ち

續いた佐々木家運命も早や此れまでと思はれる、根ざし深き大木も、時節來れば枯れ果てる、見る影も無い小松若松も時を經れば棟梁の材と榮え茂る、これも皆世の樣ぢや』

『城方の運命、哀れにも無慙に見えまする』と小一郎は兄の顏を視上げながら『斯程混雜したる處、此方より驀地に攻め掛らば、彼の城立ろに陷り、新公方樣へ承禎父子の首を檢分に入れ奉る事も出來やうかと推量、何故お掛りなされませぬ』

眉を蹙めるやうに云つた。

『今宵の嵐に散り行く花、追ひ討ちして何と爲う、彼の城信長公御手に入るは、今から三四時後の事ぢや、勇ましく入城の御用意爲させられ然るべき旨、愛知川御本陣へ注進せ』

『然し』と小一郎は遮つて『承禎父子退去ございませうとも、後に殘る決死の武士、無慙々々城を渡す事あるまいと心得まする、それにても今のやう御注進申し上げるでございまするか』

と兄の詞を疑ふ樣に云つた。

『何事も我等用意にある、申し付けた通り御注進申し上げ』

藤吉郎は儼と命ずる、小一郎は鞭を擧げて愛知川へ驅け附けた、其の間に日は暮れて、東の空に十

三夜の月皓々と輝き渡る、秋の氣は水の如く澄みて天空一面に星の晃き、森にも丘にも夜露の玉きらきら光る、それでも藤吉郎は原の處に立つた儘であつた。

三十一　舌と鐵砲

（一）

藤吉郎が箕作山の城から、觀音寺の本城を手に取る如く視遣ると同じく、和田山の砦からは、明智重兵衛が尙且小高き山の上から、觀音寺の城の光景を殘る方なく見屆けた、重兵衛は胸に大きな望みがあつた、其の望みを土臺にして、眩いやうな心の光が、隙間も無く輝き渡つた、承禎父子信長公の太刀風に怵へ難れ、本城を捨て措いて、何處かへ退散するものと見えた、城中混雜目も當てられぬ、此の虛に乘じ攻め討たば、如何な要害も瞬く際に落ちるであらう、佐久間殿お陸にて當城の攻め口に藤吉郎を凌ぐ程の手柄したれど、信長公左程御賞美の樣も見えぬ、詰りは藤吉郎、信長公御信用を得て我等の上にあるからぢや、將來天下の志を成し遂ぐるには、先づ目の上の瘤を除くに在る、頭の上

に掩ひ被さる黑雲を拂ひ除くに在る、目の上の瘤は藤吉郎ぢや、頭に掩さる黑雲も藤吉郎ぢや、彼れを信長公の御信用から離すには、此の上に手柄して信長公御信用を待つ外はない、それにはと氣味惡いやうな凄い笑を見せ『丁度よい軟い羊の肉が目の前に横はりある、取て料理せう、先刻の評定に藤吉郎は舌三寸を以て、彼の城を手に入れやうと申し上げたが、舌よりは太刀、武士は太刀を以て活るが約束、舌三寸何んの用をか爲う、藤吉郎の舌功を立つるか、重兵衛の太刀手柄をするか、此處善惡の岐るゝ道、時を過さず彼の城へ押しかけて……爾うよ、我等拔懸けの功名して、猿奴の鼻を明けて吳れやうと頷きながら、

『彌平次々々』と呼び立てた、彌平次は聲に應じて驅けて來た。

『御用ども』

『存じ注いた事がある、早々出陣の用意せ、佐久間殿お手勢は半お返し申したれど、まだ二三百騎は殘りあらう、それに重兵衛手の者二三百騎にて、鐵砲組を眞先に彼の城へ押し寄せる計略、今重兵衛の胸に決した、彼れ見よ城內頻つて混雜、武具きら〳〵と日に映つて遠く甲賀の方に續く、必定承禎竊に觀音寺の城を開いて、甲賀の出城に引き退くものと見えた、此の期を外して勝利を得る時ある

まい、先手は例の如くお身に吩咐る、重兵衛出世の首途、油斷なく仕れ』

彌平次は躊躇て聞いて居たが、

『如何樣觀音寺の城内に人馬の動く光景見えまする、承禎父子甲賀の出城へ退去、後にて必死の軍を致すべき用意あるまいに限りませぬ、十八代續いた當國一の舊家、身内に忠義を知つた者もございます、蒲生種村其の他の郎黨は十八箇所の枝城に楯籠り、御當家軍勢を食ひ止めやう手配りあるやに聞き及ぶ、山城和泉の兩大將其れに三雲新左衛門名譽の武士ございます、見る〳〵敵の押し入るに任せて、指を咥へ、傍觀致す筈ございませぬで、此れは篤と御思案、尙折を見て進まぜられ、今日のお手柄に瑕がついてはなりませぬ』

『おゝ』と重兵衛は頷くやうに『お身は我等出世の首途を妨げするな』

『左樣ではございませぬが、今日愛知川御本陣にての評定に、木下藤吉郎殿申されの次第、信長公御頷かせの事、何れにも觀音寺の城夜討との御上意はございませぬ、それに拔懸の合戰、萬一後日お咎めあらば、今日までの御苦勞水の泡になりは爲ぬかと、彌平次懸念に絶えませぬ』

『呀、お身にも似ぬ引込み思案嚙み込めぬ、假令御前評定の主意には背くも、敵の本城を乘取つて大將に參らするが、落度に爲る筈ない、早く用意せ』と敦圖き切つて云ふのであつた。

（二）

彌平次は無言、重兵衛は又語を次ぐ。

『縱し、それが信長の御意に背き、お咎めを受くるとも、目の前に横ばる幸福を、見す〳〵遁すは神佛に畏れぢや、我等心は決つてゐる、早々用意、脫漏あるまい』

大空に輝く明星と光を爭ふやうな重兵衛の兩眼は、一言云ふ毎に烱々と晃いた、さうして其の光が直に彌平次の胸を貫く、彌平次は一旦云ひ出した事を後へ引いた例のない重兵衛の心を知るので、據なくお受けをした、さうして其の儘其處を退いた、重兵衛は後を見送つて、

『彌平次は仁義ばかり知つて、大賭博の面白味を知らぬ、觀音寺の城手に入らば、信長公お咎めを蒙るとも、後の仕法は幾何もある、第一は猿奴に鼻を開かせ、第二は立身出世の基礎を立てる、敵の城を攻め落して、總大將御馬を迎へ奉る家人の顏を、目を瞋らして見たまふ筈無い、もし又其の手柄反古に爲さるゝ方なれば、主と賴んで甲斐も無い、四百餘年打ち續いた佐々木家根城、立身の足場とし

て不足は無い、何れにしても拔懸の合戰、捷利手の中に握つてある』

獨語する舌の尖頭に毒々しい血が籠つた、藤吉郎は城内混雜の模樣を一々愛知川の本陣へ注進した、

さうして承禎父子悉く退去の後、舌三寸を以てさしもの名城を手に收めやうと計つて居た、然も重兵衞はそれと反對に和田山の砦から手に取る如く見ゆる敵方の樣子を、一度も信長には知らさなかつた、

さうして敵の虛に乘じて鋭く攻掛けやうとした、藤吉郎と重兵衞との仕方は、是れ程に違つて居た、

二人の性格、二人の奉公振り、更に二人の踏む道は、是れ程に違つて居た、彌平次は聽て出陣の用意整うた旨を告げ知らせた。

『さらば打ち立て、少しも猶豫は無い、堺際までは跫音をさする喞、敵に悟られる事する喞、可しと思ふ時、我等から號令する、それを合圖に城内へ鐵砲打ちかけ、石崖を掘り崩し、城方の者陣備へをする隙も與へず、面も振らず亂れ入つて、まづ留守居の大將を生擒にする、其の事一軍に觸れ渡すぢや』

彌平次はまた心得て退いた、此れと引き違ひに、心利いた郎黨は重兵衞の愛する栗毛の馬を牽いて來た、重兵衞はひらりと乘る、六百餘騎の軍勢は忍び〳〵に觀音寺の城へ押し寄せた、時は恰度亥の

下刻であつた、城内は寂寞と靜つて拍子木の音だにせぬ、承禎父子心利いた手の者を引き連れ退散した後と見えた、重兵衞は壕外に突立つて暫時樣子を考へて居たが、聽て一言、

『直ぐ掛れ』と號令する、それを合圖に鐵砲組の六十餘人は一齊に火蓋を切る、糞を燒くやうな響はばち〳〵と鳴り渡る、彈丸は雨の如く城内へ降り注ぐ、されど内よりは一發の應戰も無く、又物音も無く闃としてあつた。

『城内に人は無いぞ、空城にして引いたと見ゆるぞ、可惜無用の丸を射るな、門の扉を打ち碎け』

重兵衞は鐙踏張り罵つた、それに勢を得た兵は我先にと壕を渡り『えいえい』聲して門前に押し寄せた、此時城中からは時分を見計らつて居た鐵砲組の人數一齊に打ち出した、其の音天地も頽るゝ程に凄かつた、外から内に打ち込むのとは違ひ、内から寄手を引き寄せて、矢間狹間から狙ひを定め打つのであるから、一發の仇彈丸無く瞬く隙に寄せ手の人數五六十騎、枕を駢べて討死した、流石の重兵衞も不意を食つて一足下る、彌平次は側に附添ひ、

『油斷ならぬ敵の手術、早御退陣なされませ、此の儘に時を過さば、味方の人馬を傷つける外ござりませぬ』と聲を限りに意見した。

（三）

一旦敵城近く押し寄せた寄手の人數は泡を食つて引き退く、合戰難儀と見えた時、疾風の如く驅け附けたは木下藤吉郎であつた、見ると續く武士も無い、後には稻田大炊、蜂須賀小六、堀尾茂助の三人が從いて居た、重兵衛は敵の打ち出す鐵砲に追ひ縮められて、一丁ばかり此方の森へ引き退いた處であつたので、詞も掛けず息を詰めて藤吉郎の爲んやうを見守つた、藤吉郎は壕側に馬を進める、城内は再び寂乎と鎭つた、藤吉郎は破鐘の如き聲を振り絞り、

『當城の留守居する大將に物申す、此れに織田上總介殿御内木下藤吉郎、矢玉を參らする前に一言申し上げたい事あつて參つた、早々其れへ出させられ』

それでも城中は森閑とした儘であつた、藤吉郎は再び大音を振り絞る。

『當城内に留守居の衆は無いか、道を聞く耳持つた人は無いか、これは新公方樣仰せを受けて上洛の道すがら、當城の主佐々木殿御父子の罪科を問はせ給ふ、織田上總介公御内に木下藤吉郎と申す者ぢや、武士の禮儀を以て一言申す』

すると櫓の窓が靜かに開いた、月の光は斜に其の窓の壁を射た、内には白い顏が動いた。

『存外の口上、武士の禮儀知つてあるか、織田殿新公方樣に賴まれたと同樣、當お館は京都將軍家と り親しう御賴みを受けてある、敵となり味方と爲るも時の運、勝負は何れにあらうとも義の一字を以て楯籠る城へ、不意に押掛け、鐵砲石火矢卑怯にも暗の中から打ち出した、斯くても禮儀知ると云ふか、當城より打ち出す彈丸に怖れて引き退いた後、差出がましき詞、殊に武士の禮儀など口賢い事を云ふ、恕し難い仕方、左樣な者へ詞交すも無益と存じ、耳あれど聞かぬ振して控へあつた、合戰の場に詞諍ひ無益、斯う云ふは當お館の家老三雲新左衛門友則ぢや、弓矢鐵砲太刀劍を以て挨拶爲う、再び云ふ喃』

凛々しく勇みある聲で云つた、藤吉郎は直ぐ押し返して、

『不思議な事を聞く、信長公御勢三萬餘騎　半道柱も後の方に控へ在します、第一の魁は斯く云ふ木下藤吉郎、其の他に寄せ手の者押し寄せ參る筈も無い、先刻よりの矢喚び鐵砲の音、我れ等も遠くより聞いてあつた、野武士共當城の隙を見かけ、武具馬具の落物拾はうとて差し寄せ參つたでない歟織田殿御勢は、足輕小人の末に至るまで、一人として義を知らぬ者も無い、假令千萬斤の大砲目の前